

平城京右京八条二坊五・六・十一・十四坪

— 近鉄九条駅前周辺整備事業に伴う発掘調査報告 —

2009年
大和郡山市教育委員会

平城京右京八条二坊五・六・十一・十四坪 —近鉄九条駅前周辺整備事業に伴う発掘調査報告—

例　　言

1. 本書は、大和郡山市九条町229-3他に所在する平城京右京八条二坊五・六・十一・十四坪で実施した発掘調査の報告書である。

2. 調査は、大和郡山市都市建設部都市計画課が主管する近鉄九条駅前周辺整備事業に伴って大和郡山市教育委員会が実施した。

3. 調査期間、調査面積は下記のとおりである。

2004年度調査 2004(平成16)年8月31日～9月17日 137m²

2005年度調査 2005(平成17)年10月3日～12月28日 485m²

2006年度調査 2006(平成18)年8月23日～10月16日 561m²

4. 調査は以下の組織で実施した。

調査事務 大和郡山市都市建設部都市計画課

調査機関 大和郡山市教育委員会 教育長 山田勝美

調査組織 教育部長 松村達志(2004年度) 木下平一(2005・2006年度)

社会教育課長 岩本正和(2004・2005年度) 寺前良昭(2006年度)

課長補佐兼文化財係長 奥田純男(2004年度)

文化財係長 服部伊久男(2005・2006年度)

調査担当 主　　査 服部伊久男(2004・2005年度)※2005年度は係長)

技術員 十文字健(2006年度)

5. 調査及び報告書作成には下記の諸氏の参加があった。

神野悠、川崎幸彦、中山千彰、長谷川義明(五十音順、敬称略)

6. 調査及び報告書作成にあたっては、下記の方々のご教示・ご指導があった。記して感謝したい。

大西貴夫、奥山誠義、鐘方正樹、川越俊一、神野恵、林部均、林正憲、三好美穂、森川実、安井宣也(五十音順、敬称略)

7. 本書の執筆は、第IV章は服部と協議の上で十文字が、他の執筆と編集は十文字がおこなった。

8. 調査に関する写真・実測図・出土遺物は全て大和郡山市教育委員会が保管している。広く活用されたい。

凡　例

1. 本書で使用する座標値は、特に断りがない限り、世界測地系に基づくものである。また、図中の方位は座標北を示す。ただし、過去の調査は日本測地系に基づいて測量されているため、必要に応じて国土地理院が配布する座標値変換ソフト「TKY2JGD」で変換した数値を使用した。
2. 遺構実測図に示した標高は、東京湾平均海面（T.P.）からの値である。
3. 遺物番号は瓦、土器類、金属製品、木製品、石器類ごとに通し番号になっており、実測図と図版の対照が可能である。
4. 言や参考文献は各節末に付した。
5. 遺構名は4桁の数字で示し、数字の頭に遺構種別を付した。4桁の数字は上2桁が調査年度、下2桁が調査年度ごとの通し番号を示している。なお、通し番号は遺構種別を問わずに設定した。
6. 遺構実測図及び土層断面図の縮尺は、各図に明記した。
7. 遺物実測図の断面は、土師器が白抜き、須恵器が黒塗り、瓦・瓦器・瓦質土器がアミかけとした。
8. 遺物実測図の縮尺は、土器・瓦を1/4に統一した。他の遺物については各図に明記した。
9. 遺物写真は特に縮尺を統一していない。
10. 本書では、文献の参考・引用にあたって、頻出する組織名や書名について下記のとおり略称を用いることとする。

(組織名)

奈良文化財研究所（旧、奈良国立文化財研究所）→奈文研
奈良県教育委員会→県教委
奈良県立橿原考古学研究所→橿考研
奈良市教育委員会→奈良市教委
大和郡山市教育委員会→郡山市教委

(書名)

『平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』→『平城宮概報』
『奈良県遺跡調査概報』→『県概報』
『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』→『奈良市概報』
『奈良市埋蔵文化財調査報告書』→『奈良市報告』

(シリーズ名)

奈良文化財研究所学報→奈文研学報
奈良県文化財調査報告書→県報告
奈良県立橿原考古学研究所調査報告→橿考研報告
大和郡山市文化財調査概要→郡山市概要
大和郡山市埋蔵文化財調査報告書→郡山市報告

目 次

第Ⅰ章 序言	1
第Ⅱ章 位置と環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3節 既往の調査	7
第Ⅲ章 調査の経過	10
第Ⅳ章 遺跡	13
第1節 遺跡の概要	13
第2節 奈良時代の遺構	20
第3節 平安時代以降の遺構	26
第Ⅴ章 遺物	29
第1節 瓦塼類	29
第2節 土器、土製品	34
第3節 木製品、漆器	56
第4節 銭貨	58
第5節 石器、石製品	60
第VI章 まとめ	61
第1節 奈良時代以前	61
第2節 奈良時代	61
第3節 平安時代以降	69

挿図目次

図1. 調査地位置図	1
図2. 調査地と周辺の遺跡	3
図3. 平城京条坊と調査地	4
図4. 調査地と周辺の小字	5
図5. 右京八条二坊の既往の調査	8
図6. 五・六坪 土層柱状図	13
図7. 十一坪調査区 平面図	15
図8. 十一坪調査区 土層断面図	16
図9. 十四坪(2005-1地区) 平面図	17
図10. 十四坪(2005-2地区) 平面図	17
図11. 十四坪(2006-3地区) 平面図	18
図12. 十四坪調査区 土層断面図	19
図13. 建物0521	20
図14. 建物0634	21
図15. 柱穴0522	21
図16. 奈良時代の土坑	22
図17. 土坑0509	24
図18. 土器埋納坑0632	24
図19. 戸戸0639	25
図20. 土坑0519	26
図21. 平安時代以降の溝 土層断面図	27
図22. 軒丸瓦・丸瓦	30
図23. 平瓦①	31
図24. 平瓦②・埴	32
図25. 建物・整地出土土器	34
図26. 土坑出土土器①	36
図27. 土坑出土土器②	37
図28. 土坑0509出土土器①	39
図29. 土坑0509出土土器②	40
図30. 土器埋納坑0632出土土器	41
図31. 土坑0624・0610・0619出土土器	42
図32. 戸戸0639出土土器	43
図33. 粘土採掘坑出土土器(奈良時代)	45
図34. 後世の遺構への混入土器	46

図35. 包含層出土土器①	48	図42. 銭貨	59
図36. 包含層出土土器②	49	図43. 石器・石製品	60
図37. 硬・土馬	51	図44. 関係条坊検出位置図	62
図38. 連構出土土器（平安時代以降）	53	図45. 周辺の条坊復元（案）	63
図39. 粘土採掘坑出土土器（平安時代以降）	54	図46. 右京八条二坊十一・十四坪の主な遺構	64
図40. 古墳時代の土器	55	図47. 十四坪の炭化物土坑群	65
図41. 木器・漆器	57	図48. 平安時代以降の遺構配置	69

表 目 次

表1. 周辺の調査一覧	9	表6. 関係条坊の推定式	63
表2. 近鉄九条駅周辺整備事業に伴う発掘調査一覧	11	表7. 復元点の座標	63
表3. 丸瓦・平瓦重量	33	表8. 炭化物土坑一覧	66
表4. 銭貨計測表	58	表9. 平城京内の土師器皿埋納土坑	67
表5. 関係条坊一覧	62		

図版目次

図版1 上. 2005年度調査区全景（北西から）		図版10 上. 溝0614西半（南東から）	
下. 2006年度調査区全景（南西から）		中. 溝0620（北東から）	
図版2 上. 2005-1地区全景（東から）		下. 溝0615（南から）	
下. 2006-3地区西半全景（北西から）		図版11 軒丸瓦、丸瓦	
図版3 上. 2004-1地区全景（南から）		図版12 平瓦①	
中. 2004-2地区全景（南から）		図版13 平瓦②、埴	
下. 2004-3地区全景（北から）		図版14 建物、整地土、土坑0507出土土器	
図版4 上. 2005-2地区全景（北から）		図版15 土坑0502出土土器	
中. 2006-1地区全景（北東から）		図版16 土坑0505・0506・0510・0537出土土器、 土坑0509出土土器①	
下. 2006-2地区全景（西から）		図版17 土坑0509出土土器②	
図版5 上. 2006-3地区東半全景（北西から）		図版18 土坑0509出土土器③	
中. 2006-4地区全景（南から）		図版19 土器埋納坑0632、土坑0624出土土器、 井戸0639出土土器①	
下. 建物0521（南東から）		図版20 井戸0639出土土器②	
図版6 上. 建物0634（北から）		図版21 粘土採掘坑、後世の連構出土土器、 包含層出土土器①	
中. 土坑0509（北から）		図版22 包含層出土土器②	
下. 炭化物土坑群（北東から）		図版23 包含層出土土器③、古墳時代の土器、硬	
図版7 上. 土坑0507（西から）		図版24 土馬、平安時代以降の土器①	
中. 土坑0502（西から）		図版25 平安時代以降の土器②	
下. 柱穴0522（南から）		図版26 木器・木製品、漆器	
図版8 上. 土器埋納坑0632（北から）		図版27 石器・石製品、銭貨	
中. 井戸0639（北から）			
下. 井戸0639瓦溜まり			
図版9 上. 井戸0639底面遺物出土状況			
中. 溝0528（東から）			
下. 溝0614東半（南西から）			

第Ⅰ章 序 言

本書は、平城京右京八条二坊五・六・十一・十四坪において大和郡山市教育委員会が実施した発掘調査の報告書である。

大和郡山市は近鉄九条駅周辺地区の活性化を目的として多岐にわたる整備計画を進めているが、交通施設の整備はその中でも最も必要な計画とされていた。地区中心街をいかに生活利便型に整備したところで、そこへのアクセスが難しい状況では整備効果が望めないためである。実際に駅の周辺は道路の幅員が狭く、自動車によるアクセスが極めて不便な状況であった。また、朝夕の混雑時には歩行者や自転車等が交錯する危険な状況でもあり、早急な整備が求められていた。そこで、九条駅の東側において、バスのような大型車両にも対応できるロータリー広場と県道奈良大和郡山斑鳩線からの進入道路の設置という総事業面積10000m²を越える整備計画が進められることとなった（近鉄九条駅前周辺整備事業）。

事業地は平城京内に位置することから、文化財保護法第57条の3（平成16年当時）に基づいて大和郡山市から発掘通知が提出された。特に進入道路は平城京内でも重点地区である西市推定地内を東西に走るものである。これを受け、市都市計画課と市教育委員会社会教育課による協議がおこなわれ、事業用地の買収が終了した地点から順に事前発掘調査をおこなうことになった。

発掘調査は2004年度から2006年度にかけておこなわれた。各年度の調査地は、2004年度が県道と進入道路の取り付き部分（平城京の条坊では右京八条二坊五坪）、2005年度がロータリー広場部分（同十四坪）、2006年度が進入道路部分（同六・十一・十四坪）である。西市推定地内では、調査件数自体の少なさや、一帯で広範にわたっておこなわれた粘土探掘による奈良時代以前の遺構の破壊によって、これまで発掘調査による資料が十分に得られていないこともあり、今回の調査によって西市の実態解明につながる資料が得られることが期待された。

なお、事業は調査が終了した部分から順次着工し、道路やロータリーは2008年4月から共用開始されている。



図1. 調査地位置図

第Ⅱ章 位置と環境

第1節 地理的環境

平城京は奈良盆地の北端に位置する。すなわち西を西ノ京丘陵、北を奈良山丘陵、東を春日山や若草山等の山並みといった丘陵地に囲まれ、それぞれの丘陵から派生する低丘陵や大小の河川からなる沖積地上に造られている。今回の調査地は平城京では南西部であり、西ノ京丘陵東裾からひろがる沖積地上に位置する。北西から南東に向かって緩やかに傾斜しており、現地表面の標高は56.0～57.6mである。現況は養魚池や水田である。

調査地西方の西ノ京丘陵は、標高100m前後の南北に伸びる小高い丘陵で、富雄川をはさんで西側に並列する矢田丘陵と共に生駒山地を形成し、北に向かって緩やかに標高を高めながら奈良山丘陵へとつながる。調査地周辺の沖積地上には良好に残存している平城京跡の地割痕跡も、この丘陵地上では希薄になる。現在、丘陵地と沖積地との境付近を近鉄線が南北に走っているが、近鉄九条駅の西側ではこの丘陵上に宅地が展開し、今日も宅地開発が盛んにおこなわれている。

調査地の東には平城京内を南北に貫流する秋篠川がある。この川は奈良時代には西掘河として京内の物資運搬等に多く利用されていたようだ。現在この川は調査地の東方で、東に大きく流れを変えている。これは文禄年間の増田長盛による郡山城外堀整備に伴う河川の付替え事業によるもので、東に流れを変えた後に佐保川へ合流し、大和川へつながる。

調査地の南方は西ノ京丘陵東裾の沖積地上に展開する市街地であり、調査地以北のような水田や養魚池がひろがる景観とは全く異なっている。

参考文献

- 『大和郡山市史』 柳沢文庫専門委員会編1966 大和郡山市役所
『奈良市史』 地理編 奈良市史編集審議会編1970 奈良市役所

第2節 歴史的環境

本節では、調査地周辺の主要な遺跡の変遷を時代順に略述する。本節で取り扱う地域の範囲は、西ノ京丘陵南端とその周辺の沖積地上とする。また、取り上げる遺跡は発掘調査等によってある程度具体的な様相が知られているものとする。

縄文時代

西ノ京丘陵と矢田丘陵との間に南北に流れる富雄川の左岸に古屋敷遺跡が所在する。後・晩期の土器を含む自然流路と同時期の土坑が確認されている。佐保川流域では、地蔵院川と菩提仙川が合流する沖積地上に美濃庄遺跡があり、自然流路から晩期の土器が出土している。調査地周辺で現在知られている当該時期の遺跡は、上記のように少なく、沖積地上に点在している状況である。時期は早くとも後期以降を中心であるが、自然流路内に混入している状況での出土例が多いこともあり、当時代の様相についてはまだまだ不明な点が多い。

弥生時代

弥生時代になると、遺跡数が縄文時代と比べて増加する。かつて、奈良盆地の北部は南部と比べる

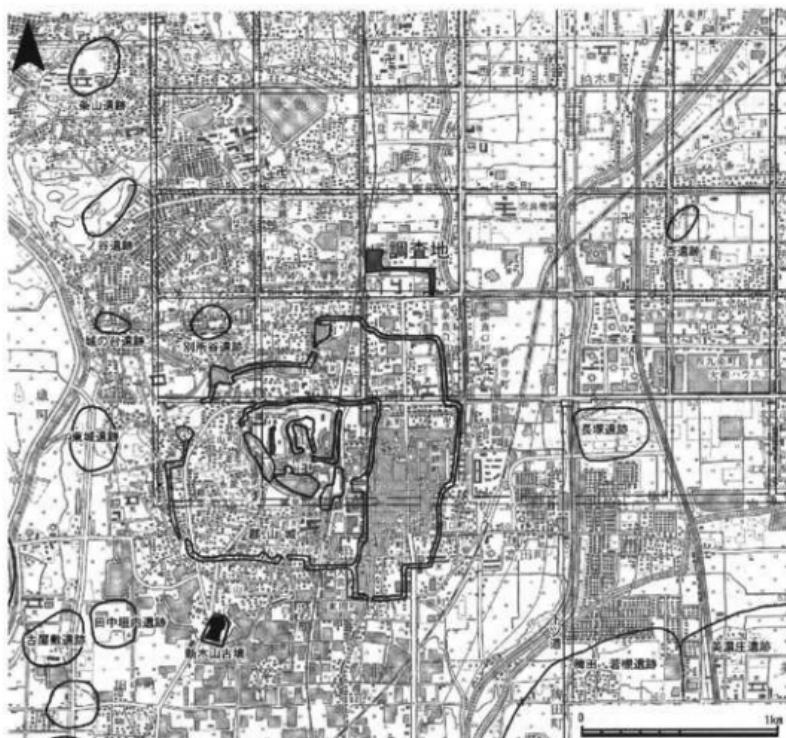


図2. 調査地と周辺の遺跡 (1/25000)

と大規模な環濠集落の検出がないこともあるって、当該時期の遺跡の様相がほとんど判明していなかっただ。しかし、平城京下層での調査事例が点的であるものの増加してきたことによって、遺跡の様相がしだいに明らかにされてきた。平城京下層では、特に京の北半でいくつかの遺跡の分布が知られ、集落の盛期はそれぞれ異なり、前期から後期までの各時期の遺構・遺物が確認されている⁽¹⁾。一方、平城京の南部にあたる調査地周辺では、調査の件数そのものが少ないとあって、岩井川流域の沖積地上に立地する、前期から中期が主体となる杏遺跡や中期から後期まで継続する東市下層が知られている他はあまりはっきりとした状況がわからっていない。また、先述の美濃庄遺跡でも溝から前期の土器が出土している。前期から中期にかけての集落は、縄文時代と同様に沖積地上に点在しているという状況である。

後期では、西ノ京丘陵上の六条山遺跡、一ノ谷遺跡、別所谷遺跡、城の台遺跡、郡山城下層といった遺跡がある。六条山遺跡では後期を通して継続的に集落が営まれており、出土土器から後期土器の詳細な編年が研究されている。一ノ谷遺跡や郡山城下層では後期後半の堅穴住居が調査されている。別所谷遺跡では遺構の検出はなかったが、包含層中に同時期の土器が含まれていることから、近隣に集落が存在していた可能性が高い。このように丘陵上では、短期間営まれる集落が後期でも特に後半

になって増加するようだ。一方で、沖積地上は後期以降の集落の調査事例が少ない。富雄川左岸に位置する田中垣内遺跡で終末段階の環濠を伴う集落や先述の東市下層で集落の一部が確認されている程度しか知られておらず、丘陵上と比べると不明な点がまだ多い。

古墳時代

調査地周辺には後期に属する古墳が多く分布している。中でも注目されるものは、西ノ京丘陵の先端部に築造された新木山古墳である。全長122.5mの市内でも最大の前方後円墳だが、陵墓参考地に指定されていることもあり、墳丘の形状から後期の築造とされているのみで詳細がほとんど知られていない。郡山城や一ノ谷遺跡の調査で埴輪片等の古墳に伴う遺物が出土していることから、同丘陵上の広い範囲に古墳群が築造されていたことが推定できるが、規模や墳形が判明している事例はない。丘陵周辺の低地部では、杏遺跡や長塚遺跡で削平された後期古墳が調査されている。

このように周辺では多くの古墳が築造されていたようだが、後世の地形改変によって現在その姿が判明しているものは限られている。その他に、稗田・若槻遺跡で前期の方形周溝墓や土坑墓が検出されている。

集落は、沖積地上での調査事例がある。富雄川左岸に位置する東城遺跡では5世紀代の堅穴住居や土坑が検出されており、出土遺物から玉類の生産に関わる集落と考えられている。田中垣内遺跡では6世紀代まで遺物が出土しており、古墳時代後期においても集落であったことがわかる。平城京の下層は弥生時代と同様で、京内の北部では古墳時代の遺跡も多く確認されているが、南部では現在あまり確認されていない。同時代の集落については、現時点では全体の動向を推測できるほど資料が得られない状況と言えよう。

奈良時代

周辺では7世紀代の様子が不明であるが、8世紀代になると平城京の造営もあり土地利用が活発になる。調査地の周辺は、平城京内でも平城宮からは離れた位置となる。京の西辺付近は西ノ京丘陵の上に立地することになるが、丘陵上ではどの程度まで実際に宅地の班給や条坊の施工があったか明らかとなっていない。調査地は平城京の条坊では右京八条二坊五・六・十一・十四坪にあたり、西市推定地を含んでいる。平城京内には東西2箇所に市が設置されていたことが文献史料等から確認されている⁽²⁾。市はひとつ前の都城である藤原京にも設置されており、律令国家の運営においても非常に重要な施設であった。

物流拠点としての役割はもちろん、刑の執行もおこなわれていたようだ。また、時間や交易等も令によって厳密な規定が設けられていた。西市は調査地を含む右京八条二坊五・六・十一・十二坪の4坪に設置されていたと推定されている。すぐ東に西堀川である秋篠川が流れている物流の適地であること、周辺に「市田」といった市の名を残す小字があることから、現在の推定地は非常に有力視されている⁽³⁾。ただし、「市田」が推定地の外になるなど、まだ解決されていない問題点も残っている。西市におけるこれまでの発掘調査では、後世の粘土探査によって奈良時代の遺構が広

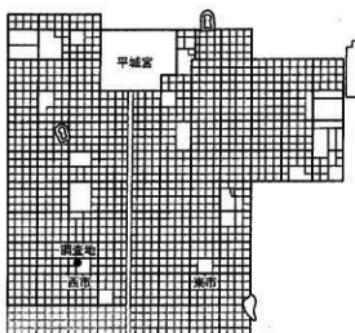


図3. 平城京条坊と調査地

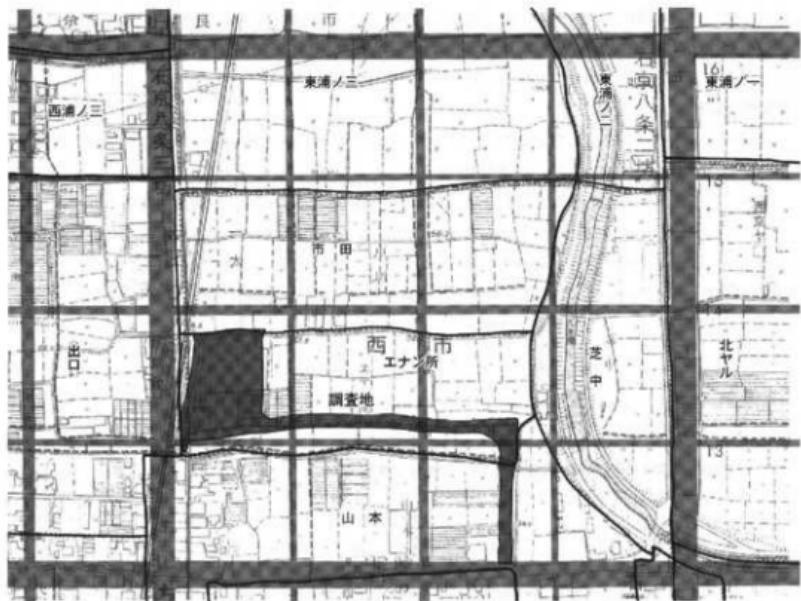


図4. 調査地と周辺の小字

範囲にわたって破壊されていることもあり、あまり大きな成果が得られていない。西市とその周辺の調査結果については次節で詳述する。

京内での周辺の調査で注目される場所には右京八条一坊十四坪がある。同坪の調査では、奈良時代の前半には鋳造・漆工房が設けられ、後半には宅地化される状況が確認されている。前半の大規模な工房は、近接する西市との関連が強いものと思われる。後半の宅地は1/16町や1/32町という区画であり、京内で同規模の区画割りが遺構として初めて確認された調査でもある。同十一坪の調査でも西一坊坊間路の側溝から多量の鋳造関連遺物が出土しており、工房が宮の隣近部のみでなく京の南部、特に市の周辺に集中して設置されていることが想定できる。

ところで、平城京の中心には朱雀大路が南北に通り、羅城門が京の入口にあたる。現在羅城門は佐保川の河床にあり、1935年の橋脚改修工事の際に礎石が発見されて以降は門の基壇北西隅が確認されたのみで、実態が不明である。羅城については、下三橋遺跡の調査によって、南北1間の東西に長い瓦葺掘立柱構造の施設であり、東一坊大路以東にはのびていないことが確認された。また、同調査では、左京城において、從來南京極とされていた九条大路より南側でもさらに1条分、京内と同様の条坊が施工されていたことが明らかとなった。この調査は、同様の状況が左京城のみでなく右京城にもあるのか、これらの条坊遺構がなぜ奈良時代でも早い段階で廃絶するのか、羅城や羅城門と南京極の実態はどうなっていたのか、といった多くの問題を提起することとなった。平城京の南辺一帯についてはまだ明らかにされていない点が多く、今後も資料の蓄積が必要である。

京外でも奈良時代の遺跡が調査されている。一ノ谷遺跡では谷地形の堆積土中から大量の祭祀遺物が出土している。東城遺跡では道路側溝と考えられる溝や掘立柱建物群が検出された。さらに京から

離れた稗田・若槻遺跡の調査では、下ッ道と道路を横断する奈良時代の運河が検出された。運河には橋脚が架けられており、橋周辺からは大量の祭祀関連遺物が出土している。同様に祭祀遺物を含む溝は近接する美濃庄遺跡の調査でも検出されている。

平安時代以降

平安時代以降については、発掘調査による所見が少ない。稗田・若槻遺跡で平安時代の掘立柱建物群が検出された他には特に主だった調査事例がない。

中世になると、美濃庄遺跡、古屋敷遺跡、田中垣内遺跡で、環濠を伴う屋敷地や集落が検出されている。奈良盆地内では環濠集落が中世以降に多く形成され、条里地割の水田と共に現在もその姿を残している。しかし実際にその形成時期が判明しているものはほとんどない。

近世以降は西ノ京丘陵の南先端部を利用して築城した郡山城が大和国内の政治経済の中心地となる。一帯は現代に至るまで城下町を中心に発展することになる。

参考文献

編文時代

「古屋敷遺跡発掘調査概報」『県概報1986年度（第2分冊）』 横考研1989

「若槻庄開達第4次発掘調査概報」『県概報1982年度（第2分冊）』 横考研1983

弥生時代

「平城京左京八条二坊一坪の調査 第134次」「奈良市概報昭和62年度」 奈良市教委1988

「平城京左京八条二坊二坪・杏遺跡の調査 第337次・第340次」「奈良市概報平成7年度」 奈良市教委1996

「平城京左京八条三坊発掘調査概報 東市周辺東北地域の調査」 奈良県1976

「美濃庄遺跡（四反田地区）発掘調査概要報告書」郡山市概要9 郡山市教委1988

「六条山遺跡」県報告第34集 横考研1980

「一ノ谷遺跡」県報告第74集 横考研1996

「郡山城第61号」郡山市報告第13号 郡山市教委2008

「別所谷遺跡」県報告第75集 横考研1997

郡山市教委「田中垣内遺跡第2次～第4次調査」「平成14年度奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料」 奈良県内市町村埋蔵文化財技術担当者連絡協議会2003

古墳時代

「大和前方後円墳集成」権原考古学研究所調査成果第4冊 横考研2001

「郡山城・三ノ丸跡発掘調査報告」『県概報1983年度（第2分冊）』 横考研1984

「長塚遺跡発掘調査概要報告書」郡山市概要8 郡山市教委1987

「若槻道路カナヤケ地区発掘調査概要報告書」郡山市概要16 郡山市教委1990

「大和中央道関連遺跡発掘調査概報」『県概報1989年度（第1分冊）』 横考研1990

奈良時代

「平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告」奈文研学報第46冊 奈文研1989

「平城京右京八条一坊十一坪発掘調査報告」 大和郡山市1984

「平城京羅城門跡発掘調査報告」 郡山市教委1972

山川均・佐藤亞聖「平城京・下三橋遺跡の調査成果とその意義」『日本考古学』第25号 日本考古学協会2008

「稗田・若槻遺跡発掘調査概報」『県概報1980年度（第2分冊）』 横考研1982

平安時代以降

「若槻遺跡第2次発掘調査概報」『県概報1981年度（第1分冊）』 横考研1983

「若槻庄開達遺跡第3次発掘調査概報」『県概報1981年度（第2分冊）』 横考研1983

「美濃庄遺跡今井地区発掘調査報告書」郡山市報告第5集 郡山市教委1997

「古屋敷遺跡第2次発掘調査概報」『県概報1990年度（第1分冊）』 横考研1991

「古屋敷遺跡第3次発掘調査概要報告」郡山市概要22 郡山市教委1991

註

- (1) 平城京下層の弥生時代集落については、ここでは詳述しない。全体を総括した以下の文献を参照されたい。
秋山成人「奈良市の弥生遺跡—平城京下層遺構による弥生集落—」『みずほ』第15号 大和弥生文化の会1996
『平城京左京五条二坊十五・十六坪』 横考研究報告第98号 横考研究2006
- (2) 西市の文献による研究の成果については以下を参考にした。
館野和己『古代都市平城京の世界』日本史リブレット7 山川出版社2001
『平城京西市跡—右京八条二坊十二坪の発掘調査一』県教委1982
- (3) 東西の市については、これまでの発掘調査では確実に市であることを裏付ける成果があがっていない。しかし、東西それぞれの、この4坪による市域の復元は現在最も有力視されるところで、特に否定する根拠もない。厳密には「西(東)市推定地」とするべきであろうが、本報告では煩雑さを回避するため、「推定地」を省略し、「西市」「東市」と記述することとする。

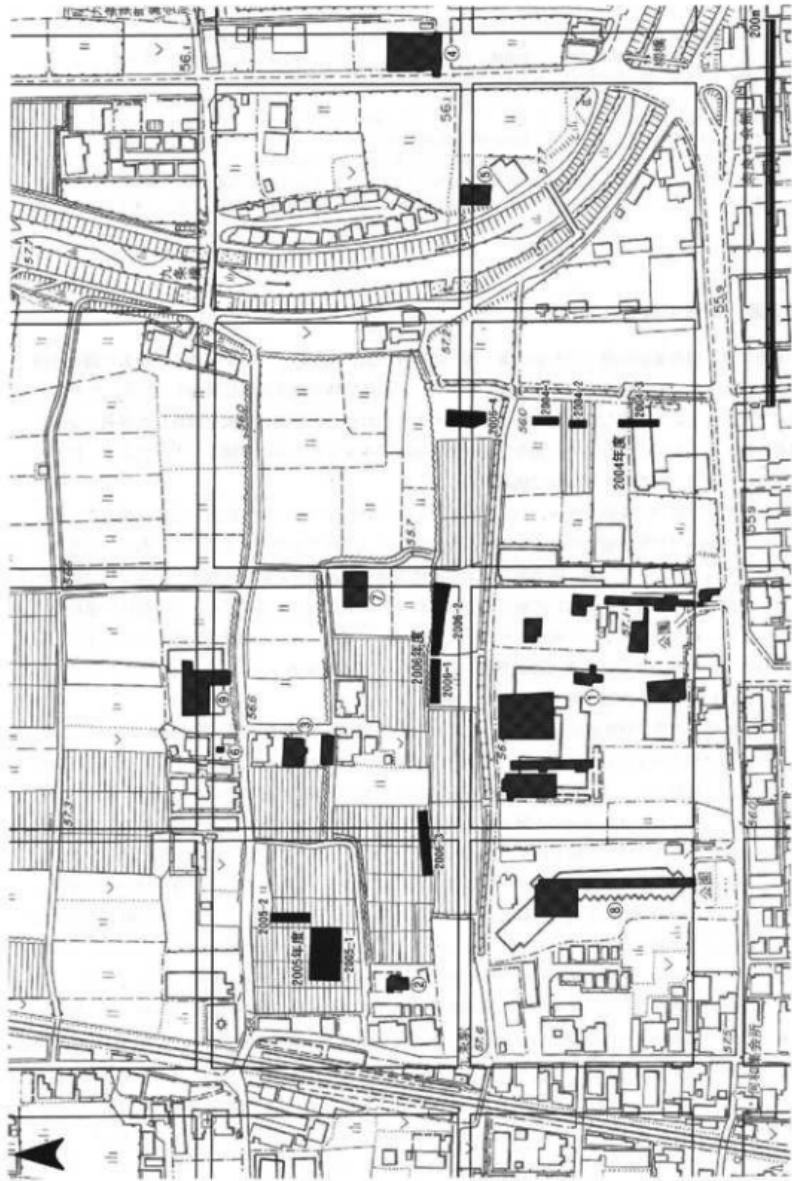
第3節 既往の調査

本節では、調査地が位置する右京八条二坊での既往の調査成果についてまとめる。過去の調査は西市にあたる4坪（五・六・十一・十二坪）を中心に、八条二坊の南半8坪に集中している。ただし、周辺ではこれまで大規模な開発があまりおこなわれていないため、広い面積を調査した事例が少なく調査件数も多くない。これまでの調査位置や調査原因等をまとめたものが図5と表1である。以下、各調査について、調査した年の順に略述する。

西市における最初の発掘調査は、1980・81年におこなわれたマンション建設に伴う発掘調査である（①）。この開発は敷地面積が6000m²を超え、事業地が十二坪の大半を占めるもので、西市での最初の大規模開発となった。その際、開発業者による遺構破壊や行政側の対応の不備等が大きな社会問題となり、遺跡の保存を要求する市民活動もおこなわれた。3次にわたる調査では、奈良時代の遺構の大部分が後世の粘土採掘によって破壊されていたものの、3時期にわたる遺構の変遷や、他の条坊と同様の坪内の区画割の存在、八条大路北側溝の検出といった成果があった。しかし、「市」の存在を確定するにはいたらず、課題を残すこととなった。

以後はあまり大きな発掘調査がおこなわれておらず、比較的小規模な開発に伴う調査が大半である。1984年には個人住宅の建設に伴って2箇所で調査がおこなわれた（②、③）。どちらも調査区内の大部分で粘土採掘によって奈良時代の遺構が破壊されており、掘立柱建物（塼）の一部が検出されたにとどまる。③では、底部穿孔の土器師器や製塙土器、砥石等が出土した土坑が検出され、祭祀に関連する遺構である可能性が指摘された。1986年には倉庫建設に伴って西一坊大路で調査がおこなわれ、路面と東側溝を検出している（④）。⑤は農業用倉庫建設に伴う発掘調査で、調査区は中世に埋没した深さ2m前後の流路内に相当し、秋篠川の旧流路の一部と考えられる。⑥は個人住宅建設に伴う調査で、こちらも調査区が東西方向の溝におさまるものであった。溝は両肩や最深部が調査区外になることもあり、詳細が不明である。この溝が条坊道路の側溝（八条条間路南側溝）に該当するかについては今後の調査成果の蓄積を待ってから判断したい。⑦は範囲確認調査で、粘土採掘による破壊が比較的少なく、奈良時代の遺構が良好に残存していた。遺構には掘立柱建物や井戸、炭や灰を多く含む土坑、西二坊間路の路面と西側溝がある。市の内部でも他の条坊と同様に条坊道路が施工されていたことが明らかとなり、これは東市でも同様の調査成果がある。⑧はマンション建設に伴う発掘調査で、西市では①の調査以来の大規模な面積が調査対象となった。しかし、ここでも後世の粘土採掘が広範に及んでおり、奈良時代の遺構は掘立柱建物1棟の検出に終わっている。⑨は福祉施設建設に伴う調査である。検出した遺構には八条条間路北側溝と思われる溝があるが、成果が未報告であり詳

図5、右京八条二坊の既往の調査 (1/2500) 案番号は表1と対応



細は不明である。

以上のように、周辺では後世の粘土探掘による破壊が広い範囲に及んでいることもあり、当地が市であることを確定できる資料はおろか、坪内の遺構変遷を捉えることもほとんどできていないのが現状である。今回の調査は、西市としては①の調査以来10年振りの調査で、事業対象地も広範囲に及ぶものとなった。

番号	調査原因	調査機関	調査期間	調査面積 (m ²)	主な遺構	文献
①	マンション	奈良国立文化財研究所	1次：1980.11.4～12.24 2次：1981.4.8～6.25 3次：1981.7.13～7.31	1次：459 2次：1180 3次：296	掘立柱建物、井戸、八条大路北側溝等	1
②	個人住宅	大和郡山市教育委員会	1984.7.9～7.28	100	掘立柱櫛	2
③	個人住宅	大和郡山市教育委員会	1984.11.19～12.15	300	掘立柱櫛、土坑	
④	倉庫	大和郡山市教育委員会	1986.9.10～10.31	500	西一坊大路東側溝	3
⑤	農業用倉庫	大和郡山市教育委員会	1988.2.8～2.27	150	溝	4
⑥	個人住宅	大和郡山市教育委員会	1988.12.5～12.14	9	溝	
⑦	範囲確認	大和郡山市教育委員会	1989.2.13～3.30	260	西二坊間路西側溝 掘立柱建物、井戸等	5
⑧	マンション	奈良県立橿原考古学研究所	1989.5.15～6.15	600	掘立柱建物	6
⑨	福祉施設	大和郡山市教育委員会	1994.2.1～3.1	387	八条条間路北側溝？	—

表1. 周辺の調査一覧

表1文献

- 1.『平城京西市跡一右京八条二坊十二坪の発掘調査－』 県教委1982
- 2.『平城京右京八条二坊十一坪 平城京右京八条二坊十四坪発掘調査概要報告』 郡山市概要3 郡山市教委1985
- 3.『平城京右京八条二坊十一坪 発掘調査概要報告』 郡山市教委7 郡山市教委1987
- 4.『筒井城第2次 平城京右京八条二坊四坪発掘調査概要報告書』 郡山市概要11 郡山市教委1988
- 5.『平城京右京八条二坊十一坪（西市跡推定地）発掘調査概要報告書』 郡山市概要15 郡山市教委1990
- 6.「平城京右京八条二坊十三坪発掘調査概要報告」「県概報1989年度（第1分冊）」 橿原研1990

第Ⅲ章 調査の経過

本章では調査経過の概要を調査年度順に述べ、最後に調査日誌を付す。各調査区の配置については図5を参照されたい。

a. 2004年度

近鉄九条駅前周辺整備事業に伴う最初の調査である。調査対象地は、土地買収が終了した県道との取りつき部分である南北方向の道路計画地で、事業対象面積は1700m²。調査地は、過去に社員寮や農業用倉庫が建てられていて、既に盛土造成されていた。

調査は3本のトレンチを設定して、2004年8月31日に開始した。盛土厚が約1.5mあり、包含層の厚さも1m以上あることから、狭い調査地内では安全を確保しながら遺構面まで掘り下げることができなかった。そこで、各地区で部分的な深掘区を設定して、層序と遺構面の把握に努めた。深掘区は記録後、すぐに埋め戻した。深掘の結果、調査地の大部分に粘土採掘坑が広がっていることがわかった。各地区的写真撮影や図面作成は地区ごとに随時おこない、9月17日に現地調査を終了した。

調査日数は実働11日で、調査には作業員のべ41人、バックホー(0.45)のべ4台を要した。

b. 2005年度

同事業に伴う2年度目の調査である。調査対象地はロータリー広場部分で、事業対象面積は4000m²。現況は大部分が養魚池で、一部が盛土造成されている。調査は、盛土造成がおこなわれていない養魚池の部分で2箇所の調査区を設定して、2005年10月3日に開始した。調査区内の大部分で粘土採掘により奈良時代から中世にかけての遺構が破壊されていた。粘土採掘坑は検出のみにとどめ、埋土の掘り下げをおこなっていない。調査開始当初は天候に恵まれず、掘削作業がやや遅れ、排水作業に追われる状況であった。また、中世遺物包含層が厚く硬くしまっていたため、人力による掘り下げ作業も難航した。地区杭は10月21日と11月16日に設置した。奈良時代から中世の遺構を検出した段階で、11月25日に調査区の全景写真を撮影し、同月28日から30日まで電子平板測量をおこなった。その後、遺構の掘り下げをおこない、写真・図面による記録作業を進め、12月21日に電子平板測量の補足をおこなった。埋め戻しは12月26日から開始し、資材の撤収を含めた現地作業は同年12月28日に終了した。

調査日数は実働52日で、調査には作業員のべ281人、補助員のべ3人、バックホー(0.45)のべ8台を要した。

c. 2006年度

同事業に伴う調査の最終年度である。調査対象地は過去2年度の事業地間を結ぶ東西方向の道路計画部分で、対象面積は4800m²。現況は水田や養魚池だが、2004年度調査地の北延長部分は盛土造成されている。また、道路計画線のほぼ中央に沿って東西方向の農業用水路があり、調査区はこの用水路を避けて設定しなければならなかった。以上の条件から、広い面積の調査区確保が困難であったため、条坊道路の検出を目的として4箇所の細長い調査区を設定した。2006年8月17日から調査地の草刈を開始し、掘削を開始したのは8月23日である。

2006-1・2地区の掘削作業は湧水により難航した。特に2006-2地区は降雨のたびに周辺の水が集まくるよう、調査区の西・北壁からは噴水のように水が流入してきて、壁面の養生に追われ

調査年度	調査期間	面積(m ²)	調査担当	主な遺構	主な遺物
2004年度	2004.8.31 ～9.17	137	服部伊久男	－	須恵器、土師器、瓦器
2005年度	2005.10.3 ～12.28	485	服部伊久男	掘立柱建物、土坑、溝、井戸	須恵器、土師器、瓦、瓦器、土鳥、石器、銭貨
2006年度	2006.8.23 ～10.16	561	十文字健	掘立柱建物、井戸、土坑、溝	須恵器、土師器、瓦、壇、土鳥、石製品、木器、漆器、銭貨

表2. 近鉄九条駅前周辺整備事業に伴う発掘調査一覧

た。この両地区は中世以降の大規模な溝もあり、奈良時代の遺構が希薄であった。2006-3地区は、2005-1地区と同様に中世以前の遺構の大半が粘土探査によって破壊されていた。2006-4地区は、現地表から4.4m掘り下げても安定した遺構面に達することができず、遺構が検出できなかった。各調査区は、遺構検出の段階で全景写真撮影と電子平板測量を随時おこない、調査地全体の写真撮影は9月20日におこなった。2006-3地区では調査区の西端で奈良時代の遺構を検出したため、事業地内で可能な範囲で西方に調査区を拡張した。また、2006-2地区も西方へ調査区を拡張して遺構の延長の検出に努めた。拡張部分の写真撮影や図化と掘り下げた遺構の補足作業をおこないながら、調査が終了した調査区から順に埋め戻し、10月16日に最後に残った2006-3地区の埋め戻し作業を完了し調査を終了した。

調査日数は実働36日、調査には作業員のべ187人、補助員のべ28.5人、バックホー(0.25)のべ10台、同(0.45)のべ23台を要した。

[調査日誌]

2004年度

- | | |
|--|--|
| 8.31 調査資材、プレハブ等搬入 | 9. 9 坑検出。 |
| 9. 2 安全機設置、2004-1・2地区設定掘削。両地区とともに堆積状況は似ている。 | 9. 9 2004-3地区、深掘区で地山検出。図化後すぐに埋め戻す。2004-2地区深掘。 |
| 9. 3 2004-2地区掘削、2004-3地区設定掘削。バックホー搬出。 | 9.10 2004-1地区、深掘区で粘土探査坑。記録後すぐに埋め戻す。2004-2地区深掘区写真、図化。 |
| 9. 6 2004-1地区深掘区設定掘削、粘土探査坑検出。全景撮影。2004-2地区掘削。 | 9.13 2004-1地区、深掘区写真、図化。すぐに埋め戻す。全体平板測量。現地作業終了。 |
| 9. 7 2004-2地区全景撮影、路面。2004-3地区掘削。すべての調査区での堆積状況は同じ。遺構面まではかなり深い。台風接近。 | 9.14 器材等搬出。 |
| 9. 8 2004-3地区全景撮影。深掘区設定掘削。粘土探査 | 9.17 バックホーによる埋め戻し。ユニットハウス等搬出。すべての作業が完了。 |

2005年度

- | | |
|---|---|
| 10. 3 2005-1地区設定、掘削開始。粘土探査坑検出。 | 10.25 粘土探査坑は10~20cmの掘り下げで止める。 |
| 10. 6 掘削継続。粘土探査坑検出面で掘削を止める。 | 10.26 遺構廻転。井戸0525は近世？ |
| 10. 7 掘削継続。午後雨天により中止。 | 10.27 遺構掘削。 |
| 10.12 前日までの雨による水の排水後掘削継続。 | 10.28 遺構掘削。溝0528検出。瓦器出土。 |
| 10.13 2005-2地区設定、表土掘削。 | 10.31 遺構掘削。溝0528から瓦器とともに和同開跡出土。勅元興寺文化財研究所挾川氏来訪。 |
| 10.14 2005-2地区排水溝等掘削、バックホー搬出。2005-1地区人手による掘り下げ。 | 11.1 調査区西半の遺構掘削開始。土坑0519掘削。溝状になる。中世か？ |
| 10.17 2005-1地区掘削継続。褐色土は中世の遺物包含層か。調査資材搬入。 | 11. 2 遺構掘削。土坑0519全体の形状が不明瞭。調査区遠景空中写真撮影。 |
| 10.18 掘削継続。粘土探査坑上部と中世包含層掘削。 | 11. 4 粘土探査坑上部を掘り下げ。 |
| 10.19 中世包含層厚く硬くしまっているため、掘削作業難航。地表面確認。 | 11. 7 土坑掘削。大部分が粘土探査坑。 |
| 10.20 地表面で奈良時代の遺構検出。 | 11. 8 粘土探査坑上部掘削、中世包含層の把握に努める。 |
| 10.21 遺構検出懸念。地区杭設定。遺構の掘り下げ開始。 | 11. 9 粘土探査坑上部掘削。断面観察用アゼの設定。 |
| 10.24 土坑0501より和同開跡出土(2枚重ね)。地鎮？ | 11.10 粘土探査坑、中世包含層掘削。包含層硬くしまって |

- 厚い。
- 11.11 溝0629は溝0528と一連か？地山上面で柱穴検出。土坑0519西半検出。
- 11.14 土坑0519黒色土器出土。溝0529中世の土器出土。
- 11.15 土坑0519黒色土器引き続き出土。
- 11.16 土坑0519西脇の確認。2005-2地区、地区杭設置。
- 11.17 2005-2地区平面精査して遺構検出。
- 11.18 同地区東半の落ち込みを掘削。
- 11.21 西地区再び遺構精査。
- 11.22 2005-1地区写真撮影に備えて掃除。
- 11.24 西地区掃除。
- 11.25 西地区全景写真撮影。
- 11.28 西地区電子平板測量。(~11.30)
- 12.1 建物0521柱穴掘削。周辺の土坑も掘削。(~12.2)
- 12.8 掘り下がった土坑の図化。
- 12.9 柱穴等の断面図化後完掘。各土坑図化作業継続。
- 12.12 溝0528掘削。土坑0519断面図化。
- 12.13 調査区土層図作成。井戸0525掘削。土坑半掘。
- 12.14 調査区土層図作成。井戸0525掘削継続。整地土0531掘削。
- 12.15 土層図作成。2005-2地区土坑半掘。斑鳩町教育委員会荒木氏来訪。
- 12.16 2005-2地区土坑掘削、図化。2005-1地区整地土0531掘削継続。
- 12.21 資材等撤収準備。電子平板補足測量。
- 12.22 一部資材撤収、安全柵解体。
- 12.24 ブレハブ等搬出。
- 12.25 パックホー搬入、埋め戻し開始。
- 12.27 埋め戻し。
- 12.28 資材等完全撤収。本日にて現地調査終了。

2006年度

- 8.17 調査地と周辺の草刈(~8.22)。調査資材、ブレハブ等搬入。
- 8.23 2006-1地区設定。パックホー(0.45)と人力で西から掘削開始。湧水著しい。
- 8.24 同地区遺構検出。
- 8.25 同地区遺構検出、中世以降の堆積層掘削。
- 8.28 同地区遺構検出状況で全景写真撮影。2006-2地区設定、西から掘削開始。
- 8.28 2006-2地区遺構で中世の溝検出、掘削。遺構検山確認。湧水かなりある。基準点測量設置。
- 8.30 同地区遺構検出。地区的南半は東西方向の溝(中世)にある。北壁から激しく湧水。
- 8.31 東西方向の溝検出、掘削。南壁崩落の危険があるため、断面図実測後養生。2006-1地区電子平板測量。
- 9.1 2006-2地区、地区西端の壁が朝からの雨により崩落。復旧後養生。2006-1地区遺構掘削。
- 9.4 2006-2地区東西溝検出、掘削。2006-1地区図面補足。
- 9.5 2006-2地区東西溝掘削、地区東端で重複する新しい溝検出、掘削。2006-1地区図面補足。
- 9.7 2006-2地区、新しい溝を完掘。東西溝に先行する溝を検出、サブレンチを設定して各溝の重複関係を追認。
- 9.8 同地区溝掘削。東西溝掘り残し確認、掘削。宋銭出土。
- 9.9 同地区全景写真撮影。パックホー(0.25)搬入。
- 9.11 2006-3地区設定、東から掘削開始。粘土探査坑がひろがる(検出のみ)。
- 9.12 同地区遺構検出。地区中央付近で他の粘土探査坑埋上と異なる比較的きれいな土を検出。確認のため周辺から粘土探査坑の掘削を開始する。結果、その土も粘土探査坑埋土と判明。また、粘土探査坑埋土から残存状況の良い瓦質擂鉢や羽釜が出土し始める。
- 9.14 同地区粘土探査坑検出、掘削。2006-2地区図面。先日からの雨によって地区内各所で壁崩落、復旧後養生。
- 9.15 2006-3地区粘土探査坑検出、掘削。シルト質の地山確認、粘土探査は及ばない。2006-2地区図面作業。台風の接近に備えて葦重慶養生。
- 9.19 2006-3地区粘土探査坑掘削。地区西端のシルト層の地山上面で遺構検出。2006-2地区電子平板測量。
- 9.20 調査区全景写真撮影。2006-3地区、遺構(往穴)全体が検出できる範囲まで地区抜張。全景撮影。2006-4地区設定、南から現代造成土掘削。
- 9.21 2006-3地区電子平板測量。2006-2地区遺構掘削。2006-4地区掘削。安定した面に達しない。
- 9.22 2006-2地区遺構掘削、図面補足。2006-3地区遺構掘削。西端の遺構は奈良時代。2006-4地区掘削、安全面を考慮して比較的安定した面で掘削を中止し、北に掘り進める。
- 9.25 2006-2・3地区遺構掘削、図面補足。2006-4地区状況に変化なし。
- 9.26 2006-2・3地区遺構掘削、図面補足。2006-4地区掘削区下止面に遺物包含層を改めて確認。比較的広い面積を確保できる北端でサブレンチを設定することにする。
- 9.27 2006-3地区粘土探査坑部分埋め戻し。2006-4地区サブレンチ掘削。瓦器小片を含む流水堆積を確認。安全を考慮して地山検出を断念。全景撮影。
- 9.28 2006-3地区、西へ調査区拡張。2006-4地区図面。
- 9.29 2006-3地区遺構検出。柱穴、大きな土坑(井戸?)検出。2006-4地区図面。
- 10.2 2006-2地区、溝部分断面掘り確認。2006-3地区遺構検出。2006-4地区図面補足。
- 10.3 2006-1地区、埋め戻し。東へ拡張。2006-2地区西へ拡張。2006-4地区図面補足、電子平板測量。2006-3地区遺構検出、一部掘削。拡張部分電子平板測量。
- 10.4 2006-1・2地区拡張部分の写真・図面補足。埋め戻し。2006-3地区拡張部分全景撮影。掘立柱建物1棟検出。
- 10.6 2006-3地区遺構掘削。大きな土坑底から遺物出土。柱材が見ていなか井戸と判断。
- 10.10 2006-1・2・4地区埋め戻し。2006-3地区井戸完掘。底面に不明土製品、図面・写真撮影。建物柱穴掘削。
- 10.11 2006-4地区埋め戻し。2006-3地区遺構掘削。井戸遺物取り上げ。
- 10.12 2006-4地区埋め戻し。2006-3地区遺構掘削。建物と井戸完掘状況の写真撮影。
- 10.13 2006-4地区埋め戻し。パックホー(0.45)搬出。2006-3地区図面補足。ブレハブ、調査資材等搬出。
- 10.16 2006-3地区埋め戻し。パックホー(0.25)搬出。本日を持って現地調査終了。

第IV章 遺 跡

第1節 遺跡の概要

調査地は平城京右京八条二坊五・六・十一・十四坪に該当する。4つの坪にまたがっているが、実際に設定した調査区はその中の限られた範囲で、広く面的に調査区を設定できた部分は少ない。本節では、各調査区の調査成果の概要を坪ごとに述べる。

a. 五・六坪（2004-1・2・3、2006-4地区）

五・六坪に該当する範囲では、大部分が調査前に既に盛土造成されていた。造成前の旧表土から造構面までの深さが1m以上あるだけでなく、十分な調査面積の確保が困難な状況も重なったため、今回の調査では遺構を検出することができなかった。ここでは当坪内の層序について報告する（図6）。

2004-1・2・3地区は五坪に設定した調査区である。現代造成土（a層、厚さ1.1～1.3m）除去後に標高54.8～55.0mで旧地表面になる。旧地表（b層）下約0.5～0.6mには水田耕作に伴うと考えられる、遺物をほとんど含まない淡灰褐色土が堆積する。その下層には中世の遺物を含む灰色系の色調を呈する硬くしまった包含層（c層）が0.4～0.5mの厚さで堆積している。c層下は、2004-1・3地区では粘土探掘坑埋土である。2004-2地区では粘土探掘がみられず、標高約53.8mで緑灰色シルトの地山に達する。深掘区での断面観察という部分的な調査成果であるが、当坪内においても周辺での既往の調査にあった粘土探掘が広範囲でおこなわれたことが判明した。

2006-4地区は八条条間南小路の想定位置に設定した調査区だが、該当する遺構の検出はできなかつた。厚さ1mの現代造成土（a層）下、標高54.9mで旧地表面に達する。旧表土（b層）と床下土には遺物をほとんど含まないオリーブ色系の粘質土が約0.6mの厚さで堆積する。以下は灰色～青灰色の粘土と細砂、シルトによる流路堆積が2.2m以上堆積し、安定した地山の検出はできなかつた。この流路堆積は、掘削できた最も深い埋土（標高51.5m付近）から瓦器片が出土することから、中世以降に形成されたものと判断できる。調査区の東方に流れる秋篠川の旧流路である可能性もあるが、規模や範囲が不明であり、南に位置する調査区で同様の堆積がみられないことからも断定はできない。

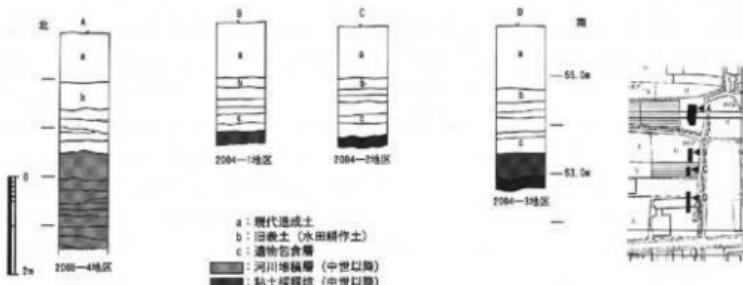


図6. 五・六坪 土層柱状図 (1/100)

b. 十一坪（2006-1・2地区）

十一坪に該当する部分では、事業地の中央に農業用水路が流れており、これを避けて調査区を設定しなければならなかった。そこで、東西に細長い地割が奈良時代の「堀河」の地割痕跡である可能性⁽¹⁾が指摘されていた水田で、2箇所の調査区を設定した。

2006-1地区は東西に細長い調査区で、面積は90m²（図7上）。水田耕作土・床土以下の層序は、I. 遺物量が少なく形成時期不明のやや粘性のある青灰～灰色の砂質土、II. 近世以降の遺物包含層に大別できる（図8上）。II層は暗灰色砂質土（上層）と暗褐色シルト（下層）の2層に細分することができ、奈良時代の土器細片を包含する。しかし、この層を除去後に検出できる遺構（後述する2006-2地区溝0615）の出土遺物から、形成時期は17世紀以降と判断できる。また、この層は調査区の南半のみに、南に向かって次第に厚さを増して堆積している。最も厚い部分は調査区の南端で、約40cmである。調査当初は東西方向の溝の北半の埋土と考えていたが、東隣の2006-2地区で広い範囲に堆積していることがわかったため包含層と判断した。II層の下で地山である青灰色シルトに達する。遺構は地山上面（標高54.8～55.1m）で検出した。検出遺構には土坑や溝があるが、確実に奈良時代と判断できる遺構はなく、時期を確定できるものは15世紀代のものに限られる。

2006-2地区は2006-1地区の東に設定した東西に細長い調査区で、面積は208m²（図7下）。水田耕作土・床土以下の包含層（図8下、I・II層）は2006-1地区と対応する。II層除去後に青灰～暗緑灰シルトの地山に達し、この上面で遺構を検出した。遺構検出面の標高は54.3～54.7mである。遺構は、溝、土坑がある。調査区内の南半分が東西方向の溝の北半部分に相当し、他に主だった遺構はない。なお、溝の埋没は中世以降である。「堀河」の有無に関する成果は得られなかった。

両地区とともに遺物の大半が奈良時代の須恵器・土師器・瓦の細片であり、中世以降の遺物はほとんどみられない。

以上のように十一坪内の調査区では、シルト質の地山が広範囲を占めていたため粘土探掘は及んでいないかった。しかし、中世以降の変更が大きく、それ以前の様相を明らかにすることはできなかった。

c. 十四坪（2005-1・2、2006-3地区）

十四坪に該当する部分はロータリー広場の計画地にあたり、現況は大部分が水田・養魚池で、比較的広い調査面積を確保することができた。当坪は4坪を占める西市からは外れているが、市周辺における坪内の土地利用状況を明らかにするためロータリー部分で2箇所、進入路部分で1箇所の調査区を設定した。

2005-1地区は坪のほぼ中央に設定した調査区である。東西約27m、南北約15mの長方形の調査区で、面積405m²と今回の調査で最も広い（図9）。層序（図12②・③）は、厚さ約30cmの表土（水田耕作土）・床土下に、調査区全域に中世の遺物包含層がひろがる（I層）。包含層は褐色～赤褐色の粗砂層と細砂層からなる。この上面から粘土探掘坑が掘り込まれており、中世の遺構埋没後から粘土探掘がおこなわれるまでに形成された層であることがわかる。包含層除去後に暗灰色礫、黒褐色シルト・粘土、明褐色シルト層からなる地山に達する。奈良時代から中世にかけての遺構はこの上面で検出され、検出面の標高は56.6～56.8mである。また、調査区の南東隅周辺は地山上に奈良時代の遺物を含む暗褐色粗砂層がみられる。この上面で奈良時代の遺構が検出できることから、奈良時代の整地造成による層と判断できる。調査区内の大部分に粘土探掘坑がひろがっており、中世以前の遺構はほとんど破壊されていた。しかし、調査区の東辺付近は比較的破壊を免れていたため、奈良時代の遺構を多く検出することができた。奈良時代の遺構には掘立柱建物や土坑がある。特に土坑は底面が熱を受け

图 7. 十一坪 调查区平面图 (1/200)

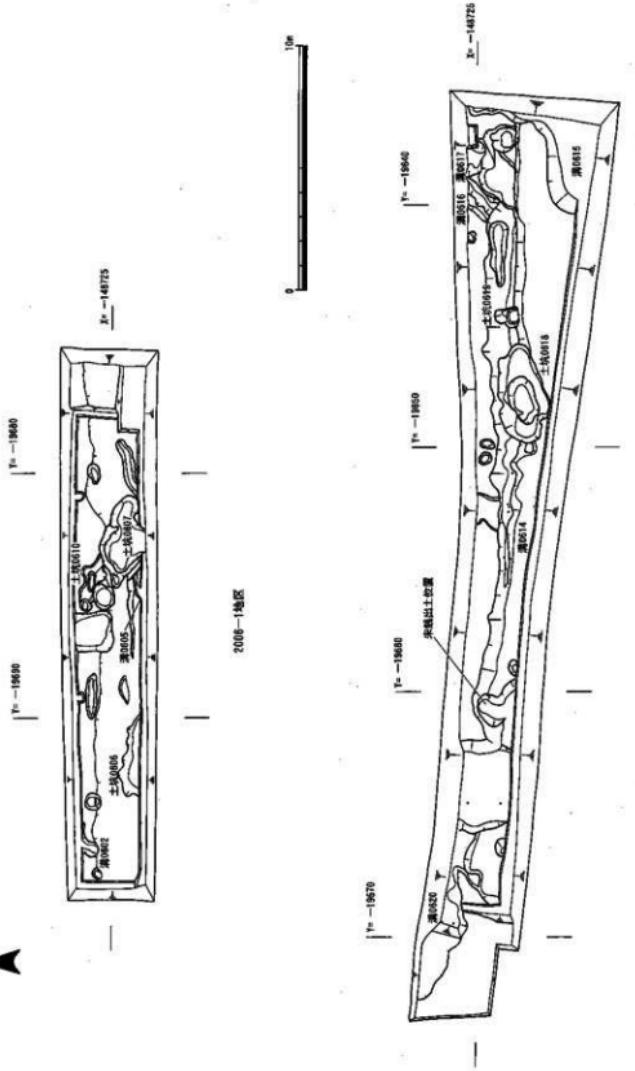
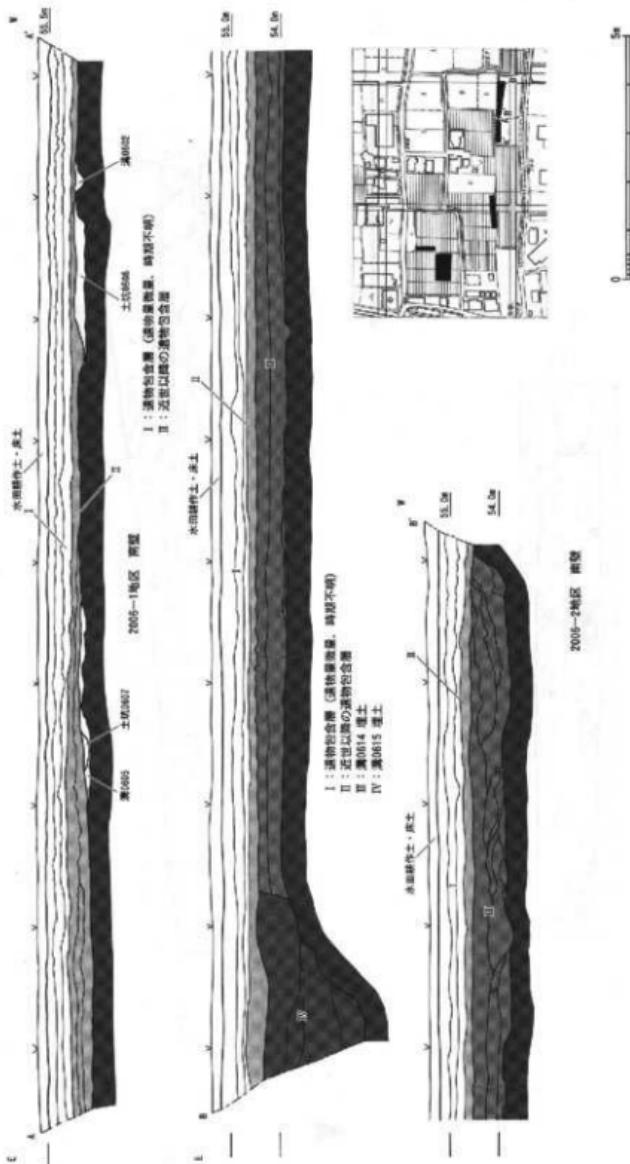


図8. 十一坪調査区 土層断面図 (1/100)



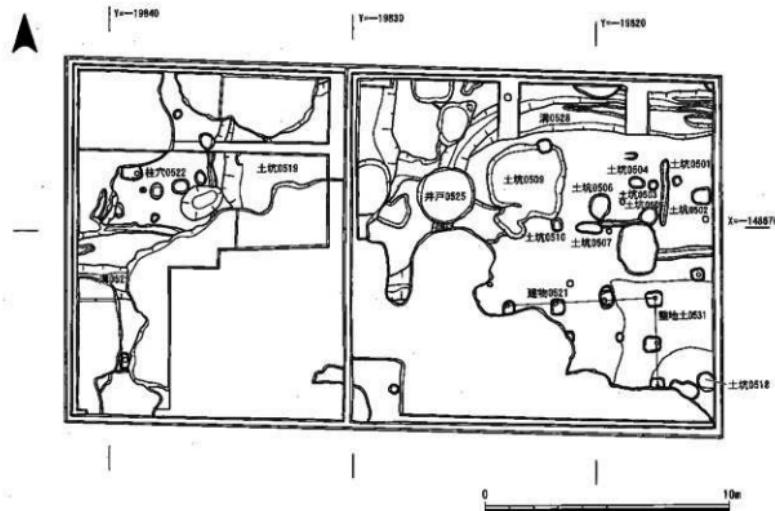


図9. 十四坪（2005-1地区）平面図（1/200）

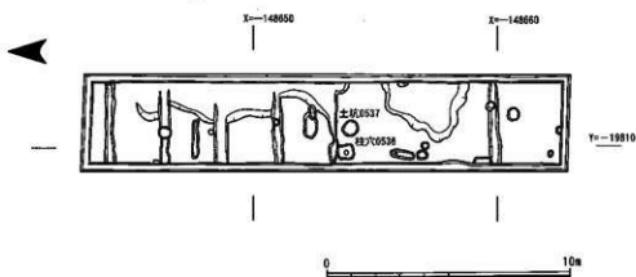


図10. 十四坪（2005-2地区）平面図（1/200）

て硬化したものや、埋土に炭化物を多く含むものといった特徴的なものが集中して分布していた。平安時代以降の遺構には溝や土坑、井戸がある。周辺では奈良時代以降、粘土採掘がおこなわれるまでの間に属する遺構の様相がほとんど明らかでなかったことから、断片的な検出ではあるが大きな成果となった。

2005-2地区は、2005-1地区東方に設定した南北方向に細長い調査区である。調査面積は80m²（図10）。層序は2005-1地区と同様で、表土下に中世以前の遺物包含層があり、その直下で褐灰色シルトの地山に達する（図12④）。遺物包含層形成前後の各時期に素掘り溝が掘られ、当地が長く耕作として利用されていたことがわかる。この調査区には粘土採掘が及んでおらず、中世以前の遺構面が良好に残存していた。前述の底面が焼けしまった土坑や柱穴等を検出したが、遺構密度はきわめて希

薄であった。2005-1地区の状況から当地が大幅な削平を受けたとは考えられず、当初から地下を掘り込むような土地利用が希薄であったと考えられる。

2006-3地区は西二坊坊間西小路の検出を目的として設定した調査区である（図11）。東西に細長い調査区で、面積は129m²。層序は、水田耕作土・床土下にI. 灰褐色砂質土の遺物包含層、II. 黒褐色・オリーブ褐色の砂質土の遺物包含層があり、標高55.9～56.3mで地山に達する（図12①）。地山は調査区東半では黄褐色粘質土、西半では青灰色シルトが主となる。地山が粘土質の調査区東半では全面に粘土探掘が及び、遺物包含層はI層が粘土探掘後、II層が粘土探掘以前に形成されている。II層除去後に奈良時代から中世の遺構を検出できることから、II層の形成も中世以降となる。各包含層には奈良時代の土器や瓦の小片が多く含まれるが、中世以降の遺物は少ない。粘土探掘はちょうど粘質土下のシルト層に達する地点で振削をやめている。遺構は粘土探掘の及んでいない調査区西半で、奈良時代の井戸、掘立柱建物や土坑、中世の溝を検出した。土坑には土師器皿を埋納したものがあるが、北西の調査区で検出したような底面が焼けしまったものはみられない。粘土探掘坑埋土からは残存状況の良い、瓦質土器擂鉢や土師器羽釜が出土している。調査の主目的であった条坊遺構については、想定位置の遺構面が粘土探掘によって破壊されていたため資料を得ることができなかった。

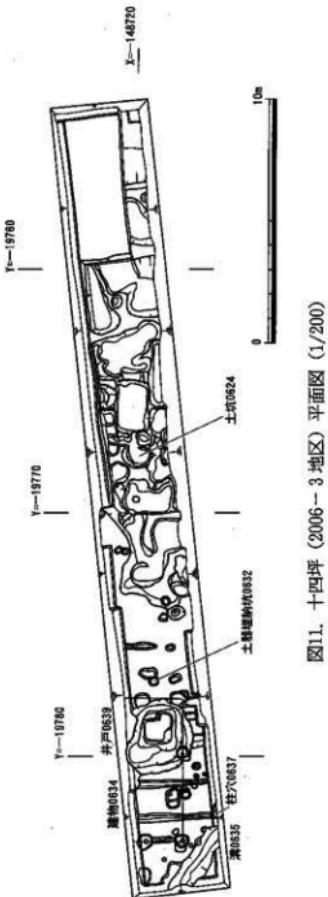


図11. 十四坪(2006-3地区)平面図(1/200)

註

(1) 『平城京西市跡—右京八条二坊十二坪の発掘調査』

県教委1982

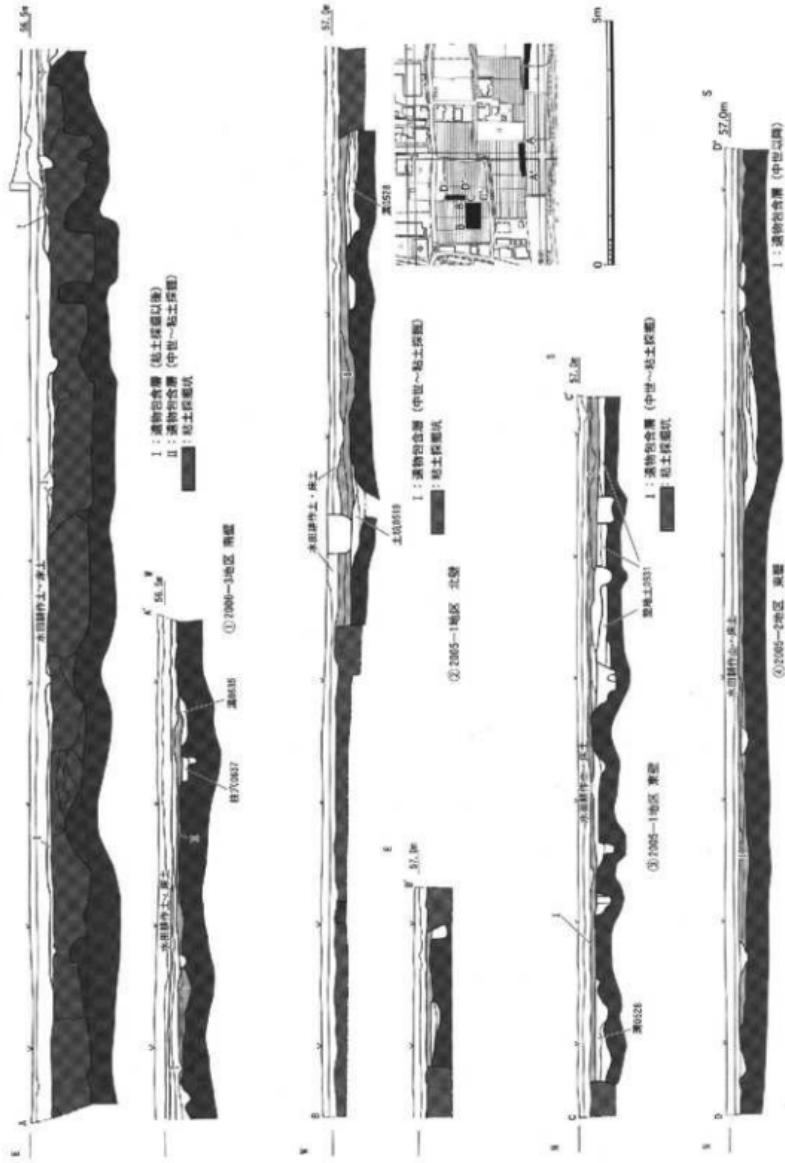


图12. 十四坪调查区土壤断面图 (1/100)

第2節 奈良時代の遺構

奈良時代の遺構には掘立柱建物、土坑、井戸がある。

a. 掘立柱建物

掘立柱建物は、十四坪のみで検出した。多くの柱穴を検出しているが、建物として復元できたものは2棟である。それらも後世の破壊や、調査区の制約によって必ずしも十分な調査ができたとは言えない。

建物0521 2005-1地区（図9、13）

南と西が粘土採掘坑によって破壊され、北東隅周辺のみが残存する。桁行3間（6.1m）以上、梁行2間（3.7m）以上の東西棟の掘立柱建物と考えられる。柱間は桁行が7尺、梁行が6尺。方位は北で $3^{\circ} 2'$ 西に振れる。ほとんどの柱穴に柱根が残存し、柱根が残存していない柱穴にも柱痕跡が残る。柱の直径は約15cm。柱掘りかたは、平面形が一辺約0.6mの隅丸方形で、検出面からの深さは0.4から0.7mと一定でない。整地土0531の上面を掘り込んで建てられる。

建物0634 2006-3地区（図11、14）

建物の北半が調査区外になる。南北1間（1.5m）、東西3間（5.9m）を検出した。2間×3間の東西棟掘立柱建物になる可能性がある。柱間は桁行6尺で東端間のみが8尺、梁行5尺。方位は北で $1^{\circ} 45'$ 西に振れる。東側柱を除いた他の柱穴には柱痕跡が残る。東から2本目の南側柱には、柱材の断片が残存していた。柱痕跡から推定される柱の直径は10から15cm。柱掘りかたは、平面形が一辺約0.5mの隅丸方形で、検出面からの深さは40cm前後である。東側柱のみ柱間が若干広く、柱も抜き取られている。南東隅の柱穴が井戸0639抜き取り時の掘りかたと重複しており、南東隅柱の抜き取りが井戸0639抜き取りよりも古い。

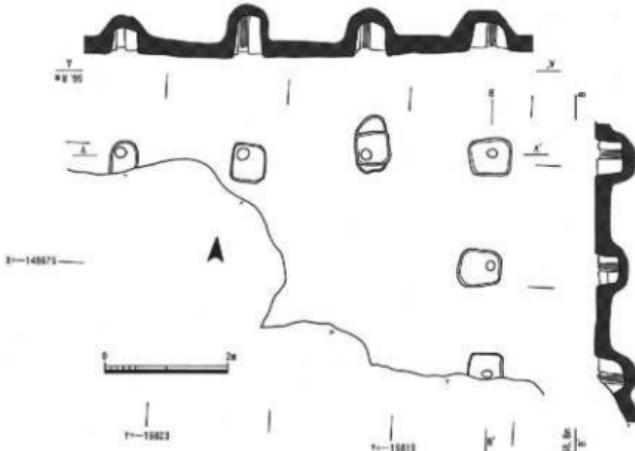


図13. 建物0521 (1/80)

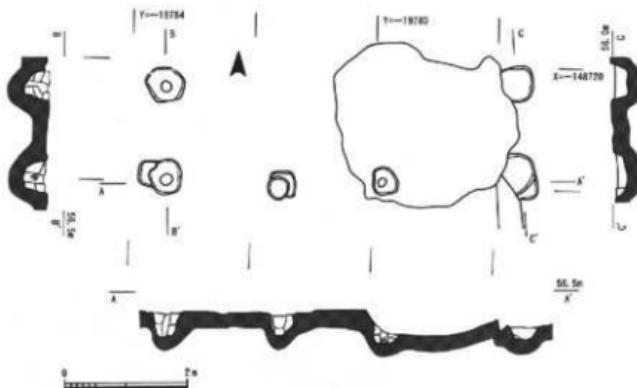


図14. 建物0634 (1/80)

柱穴0522 2005-1地区 (図9、15)

建物0521の北西で、密集する粘土探掘坑の間で検出した柱穴。他の組み合う柱は粘土探掘により不明であるが、特徴的な遺物の出土状況があった。柱掘りかたは、平面形が一辺0.7mの隅丸方形で、北辺が粘土探掘によって破壊されている。検出面からの深さは約20cm。柱痕跡が残っており、柱の直径は20cm前後と推定できる。掘りかたの底に厚さ10cmの木材があり、柱はその上に据えられたと考えられる。底には他にも軒丸瓦6282G型式⁽¹⁾や丸瓦、須恵器壊の破片、石が詰め込まれていた。

b. 土坑

土坑は調査区全域で多数検出したが、ここでは帰属時期が明確に奈良時代と判断でき、特徴的なものを報告する。

土坑0501 2005-1地区 (図9、16)

一辺約35cmの平面形が隅丸方形の小規模な土坑。検出面からの深さは約16cmで、断面形状は逆台形である。埋土の東半に炭化物を若干含む。和同開称2枚が重ねられた状況で出土した。土器は微量の土師器と須恵器の小片が出土したのみである。

土坑0502 2005-1地区 (図9、16)

平面形は長辺約0.8m、短辺約0.6mの隅丸長方形で、検出面からの深さは約33cm。断面形状は逆台形を呈する。埋土は上下2層あり、下層の黒褐色細砂層は炭化物を多く含んでいる。また、下層には土師器、須恵器が多く含まれる。出土土器は平城宮土器IIIに属し、同規模の他の土坑と比べて遺物量

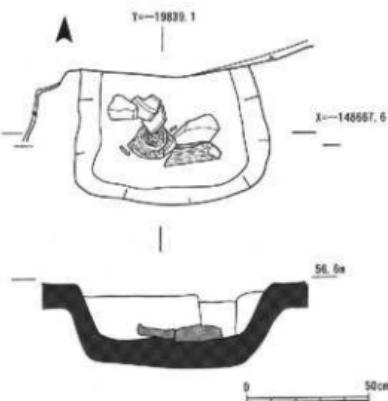


図15. 柱穴0522 (1/20)

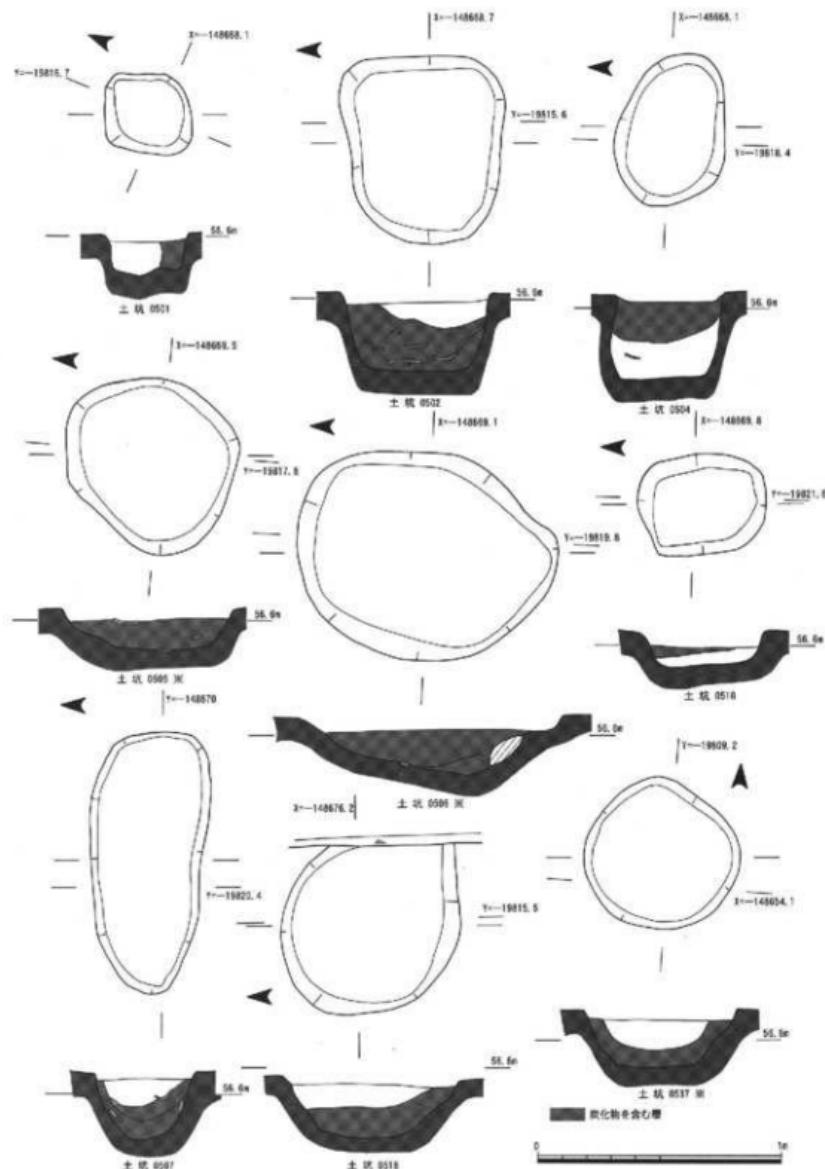


図16. 奈良時代の土坑 (1/20) ※は熱を受けて底面が硬化

が最も多い。

土坑0504 2005-1地区 (図9、16)

平面形は長径約0.6m、短径約0.45mの楕円形で、検出面からの深さは約35cm。ほぼ垂直に掘り込まれ、底面は平坦である。上下2層の埋土のうち、上層の茶褐色シルト層に炭化物を若干量含む。遺物は土師器、須恵器の小片が少量出土した。

土坑0505 2005-1地区 (図9、16)

平面形は直径約0.7mの円形で、ゆるやかに窪むような断面形状を呈する。検出面からの深さは約17cm。埋土は灰褐色粗砂で、炭化物を少量含む。底面が火を受けて硬く焼けしまり淡茶褐色に変色していることから、底直上で直接火を用いたと考えられる。遺物は平城宮土器II～IIIに属する土師器、須恵器の小片が少量出土した。

土坑0506 2005-1地区 (図9、16)

平面形は長径約1.1m、短径約0.8mの楕円形で、ゆるやかに窪むような断面形状を呈する。検出面からの深さは最も深い部分で約25cm。埋土は灰褐色細砂（上層）と黒褐色粗砂（下層）の2層あるが、どちらにも炭化物を多く含んでいる。また、土坑0505と同様に底面が火を受けて、硬く焼けしまり淡茶褐色に変色している。熱を受けた程度は土坑0505より甚だしいようだ。遺物はあまり多く含まないが、出土土師器は平城宮土器IIIに属する。

土坑0507 2005-1地区 (図9、16)

平面形は長径約1.1m、短径約0.5mの東西に細長い楕円形である。断面形状はU字形で、検出面からの深さは約30cm。レンズ状に3層が堆積する。上層は灰褐色粗砂、中層は黒褐色細砂、下層は黒褐色シルトで、中・下層に炭化物を大量に含む。上層には地山ブロックが少量混入するのみで炭化物を含まない。埋土からは平城宮土器IIIに属する土師器、須恵器が比較的多く出土した。

土坑0510 2005-1地区 (図9、16)

平面形は長辺約0.5m、短辺約0.4mの隅丸長方形で、検出面からの深さは約14cm。断面形状は逆台形。埋土は灰褐色粗砂層だが、炭化物を大量に含む上層と、全く含まない下層とにわけられる。下層には礫を多く含む。重複関係から土坑0509より新しい。遺物は土師器、須恵器の小片を少量含むのみである。

土坑0518 2005-1地区 (図9、16)

平面形が直径0.7～0.8mのやや不整な円形で、断面形はゆるやかな逆台形状を呈する。検出面からの深さは約25cm。埋土は灰褐色土（上層）と灰色粘質土（下層）からなり、下層に炭化物を多く含む。土師器、須恵器の小片が少量出土した。

土坑0537 2005-2地区 (図10、16)

平面形は約0.6mの円形で、検出面からの深さは約25cm。ゆるい逆台形状の断面形を呈する。埋土はレンズ状に堆積した2層にわかれる。上層は灰褐色細砂、下層は黒褐色粗砂で炭化物を多く含む。

土坑0505や土坑0506と同じように底面が火を受けて硬化し、淡茶褐色に変色している。平城宮土器II～IIIに属する土器が少量出土している。

土坑0509 2005-1地区 (図9、17)

平面形は不整形で、一辺約3mの隅丸方形の南辺に長さ1m、幅1mの張り出しが取り付くような形状である。検出面からの深さは約25cm。埋土は淡灰褐色土の単層で、一部に炭化物片が混入する灰褐色土がみられる。淡灰褐色土からは、平城宮土器IIIに属する土師器、須恵器が大量に出土した。遺物はすべて破片であり、残存率が高いものは少ない。壊れた土器を廃棄した土坑だろうか。

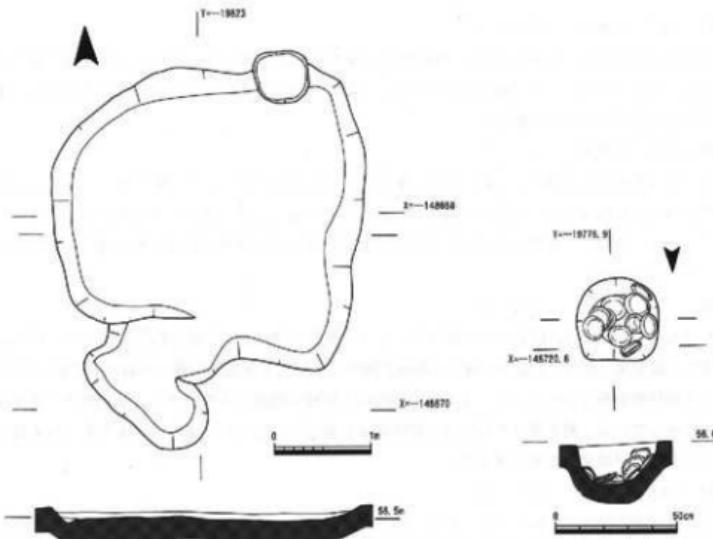


図17. 土坑0509 (1/50)

図18. 土器埋納坑0632 (1/20)

土器埋納坑0632 2006-3地区 (図11、18)

平面形が直径約35cmの不整円形で、検出面からの深さが約15cm。断面形がU字形で、底から側面にかけて土師器皿を10枚掘え置く。皿は正位が3枚、逆位が3枚、垂直に詰め込まれているものが4枚で、正逆の方向や重ね方に特に規則は認められない。これらの皿を覆うように炭化物を含む黒褐色土が2~5cmの厚さで堆積していた。

奈良時代の遺物のみを出土するが、当該時期の遺構であると断定できないものがいくつもある。

土坑0624 2006-3地区 (図11)

粘土探掘坑埋土除去後に検出した。上部40cm以上が粘土探掘によって破壊されていて、底付近の約20cm程度が残存していた。検出時の平面形は一辺約1mの不整円形だが、当初の形状は不明である。埋土は灰褐色砂質土で、須恵器、土師器の小片を密に含む。

土坑0610 2006-1地区 (図7)

短辺1m、長辺1mの不整形な掘りこみで、重複関係から室町時代の土坑0607より古い。深さ約10cm程度で、埋土は青灰色砂質土で、須恵器、土師器の細片を多く含む。本来の形状は溝状か。

土坑0619 2006-2地区 (図7)

直徑約1mの不整橢円形の土坑で、室町時代に埋没した溝0614埋土除去後に溝の北法面で検出した。埋土は粘性の強い黒色粘質土で、須恵器、土師器の小片と硯片、拳大の礫を含む。残存していた深さは15~30cmだが、少なくとも上部15cm以上は削平されている。

c. 井戸

今回の調査で検出した奈良時代の井戸は1基のみである。

井戸0639 2006-3地区 (図11、19)

井戸枠はすべて抜き取られており、底付近だけが当初の形状を残している。検出面以下1.3mは井戸枠抜き取り後の埋土で、土質から3層に大別することができる。上層(Ⅰ層)は暗青灰色や褐灰色の砂質土を主体とし、中層(Ⅱ層)は黒褐色の粘質土を主体とする。平城宮土器Ⅲの土器細片を多く含み、両層間で接合する個体が認められることから、土質が異なるものの短期間で形成された層と判断できる。下層(Ⅲ層)は黒褐色粘土層で、同じく平城宮土器Ⅲに属する須恵器、土師器を含む。上の2層と比べて、比較的大きな破片がみられるが完形はない。下層の上面からは多量の丸瓦、平瓦が出土した。すべて破片で平瓦が圧倒的に多い。井戸枠抜き取り後に周辺で不要になった瓦を投棄したものと考えられる。下層の下にはにぶい暗青灰色砂質土(IV層)が堆積しており、抜き取り以前の堆積と考えられる。底の平面形は1m四方の方形で、これが井戸当初の形状となる。この方形の範囲内で、掘りかたの底直上から完形の遺物が出土している。遺物は、南西隅に土師器小型壺(111)、須恵器壺(113)、円板状の蓋(木5)、人頭大の石が、北西隅に土師器小型壺(112)が、北東隅よりやや南に円板状の蓋(木5)が、東辺中央に不明土製品(114)が置かれていた。意図的に配置したものと考えられ、特に隅を意識して置かれた土師器小型壺は井戸に関わる祭祀に伴うものであろう。抜き取り跡の形状から、井戸枠は北西方向に大きく抜き取られたと推定できる。この抜き取り跡が建物0634の柱穴を破壊していることから、建物の廃絶より抜き取りが新しいことがわかる。

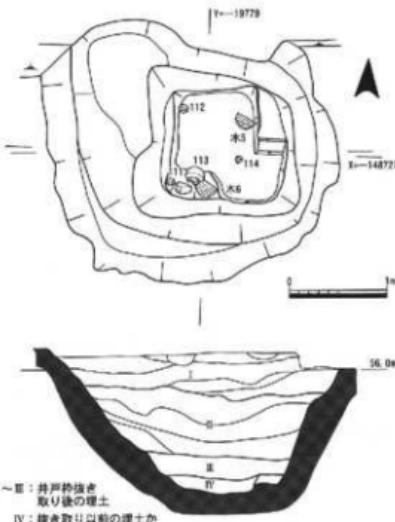


図19. 井戸0639 (1/50)

註

(1) 本誌での瓦や土器の型式等の記載については次章を参照されたい。

第3節 平安時代以降の遺構

奈良時代の遺構の他に平安～江戸時代の遺構を検出した。これらも大部分が粘土採掘によって破壊されていたため、部分的な検出となったものが多い。以下、時代順に述べる。

a. 平安時代の遺構

平安時代の遺構には土坑、溝がある。

土坑0519 2005-1地区 (図9、20)

土坑というよりは東西幅約7m、南北長5.5m、検出面からの深さ約40cmの溝状の落ち込みと言える。北は調査区外へひろがり、南は粘土採掘によって破壊されている。法面には細かい凹凸がある。埋土は褐色土を主体とする上層と、灰色砂質土を主体とする下層の2層に大別でき、上下層ともにまんべんなく遺物を含む。遺物は奈良時代の土師器、須恵器の細片が主体であるが、下層から黒色土器が出土している。11世紀代の遺構。



図20. 土坑0519 (1/80)

溝0528 2005-1地区 (図9、21)

調査区の北東隅から西に直線的にのび、調査区の中央付近で南に方向を変える溝。調査区の南半では粘土採掘により破壊されているが、南に延長した西側に東西方向の同一埋土の溝があることから、西に向きを変えるか、二股にわかれると思われる。調査区の北東隅周辺で二股にわかれるが、埋土から埋没は同時と考えられる。幅は1～2m以上と場所によって異なる。断面形状は緩やかなV字形で、検出面からの深さは約30cm。埋土は灰褐色土とその下で部分的に灰色砂質土がみられる。遺物は奈良時代の土師器、須恵器の細片が多いが、瓦器碗も出土することから、11世紀末に埋没した溝と判断できる。

b. 鎌倉・室町時代の遺構

鎌倉～室町時代の遺構には土坑、溝がある。

溝0529 2005-1地区 (図9)

幅1.3mの東西方向の溝。検出面からの深さは約22cm。断面形状や埋土が溝0528と似ていたことから、調査当初は両者が同一の溝であり、粘土採掘で破壊された部分で連結すると判断していた。しかし、出土瓦器碗が細かい破片ではあるが、確実に溝0528よりも新しい様相を示すものだけであることから、異なる溝と考えられる。

溝0635 2006-3地区 (図11、12)

幅約1mで深さ約20cmの溝。北西～南東方向の直線的な溝で、両端はそれぞれ調査区外にのびる。埋土は明褐色砂質土で、瓦器の小片を含む。

土坑0607 2006-1地区 (図7)

平面形が長径4m、短径2mの不整形円形の土坑。ゆるやかな窪み状の土坑で、検出面からの深さ

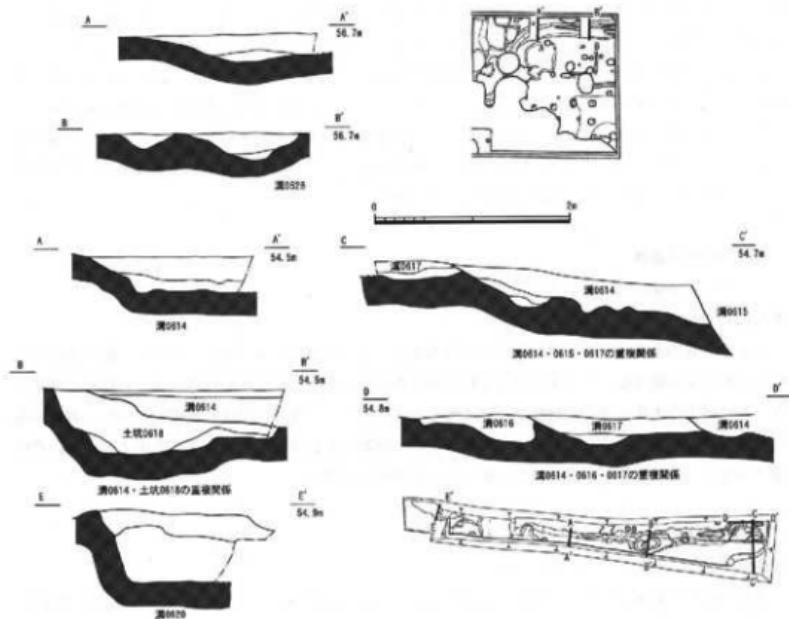


図21. 平安時代以降の溝 土層断面図 (1/50)

は最も深い部分で約45cm。埋土は灰色～灰白色のシルトだが、底直上に遺物を大量に含む厚さ5cmの砂礫層がある。遺物は奈良時代の土師器、須恵器、瓦の小片が大半を占めるが、瓦質土器が少量出土し、14世紀代の遺構と判断できる。

溝0614・0620 2006-2地区 (図7、8、21)

調査区内の大部分を占める大溝で、形状はやや複雑である。溝の幅は4.5m以上、検出面からの深さは0.6～0.8m。調査区の南半を、東西方向の流れの北半部分が占めている。平面形は直線的であるが、東に向かって幅を徐々に北側へとひろげ、調査区の北東隅で北方向に向きを変える。調査区の西では幅約4mの南北方向の一段深い流れと合流する。この合流地点では、調査区北西隅から南東方向に向かってくる流れ(溝0620)も合流し、堆積状況が複雑に入り乱れている。合流地点以西では流れを南西方向に変え、西隣に設定した2006-1地区では延長を検出していない。調査区内東方の幅が北へひろがる部分では、法面の傾斜がゆるくなり、幅約50cmのテラス状の平坦面をもつ。埋土は2層に大別できる。上層は暗褐色砂質土、下層は黒褐色粘質土で、東西方向の流れの部分ではこの2層のみがみられる。西方の合流地点付近では下層直下に灰白色粗砂層がみられ、特に合流地点では砂層やシルト層による複雑な堆積を呈するようになる。上層、下層ともに奈良時代の土師器、須恵器の小片を大量に含むが、その直下の粗砂層から瓦質土器や宋代初鉄の銅錢が出土する。銅錢は、合流地点のやや東で出土した(図7)。激しい湧水により出土状況を正確に確認できなかったが、20枚の銅錢(図42・4～23)が一箇所に置かれていたようだ。

溝内には杭が打ち込まれている。杭の位置には特に規則性がないが、いくつかの分布の偏りがある。

杭は、①合流地点の底に0.4～0.9m間隔で南北方向、②溝0620底で流れに直交する方向に0.5m間隔、③調査区中央付近の北法面テラス上に0.1～1.9m間隔で東西方向、④東方の北に幅がひろがる部分の法面と底との傾斜変換点で0.1～1.9m間隔の東西方向、の4箇所に大別できる。①、②、④は溝の合流地点とその周辺や幅が変わる部分、③はテラス上といった、水の流れに変化がある地点に設置されている。杭は特に表面を加工した痕跡がなく、自然木をそのまま垂直に打ち込んでいる。杭の残存高は5～28cm、太さも5～15cmと一様ではない。用途は不明であるが、水の流れを制御する目的と推定する。上層出土土器から溝の埋没は14世紀代と判断できる。

c. 江戸時代の遺構

江戸時代の遺構には溝がある。

溝0615 2006-2地区 (図7、8、21)

北東から南西方向に流れる溝で、西肩のみを検出した。幅3m以上で深さ2m以上。最上層は灰色粘土で木片を少量含む。その下には厚さ約40cmの木屑層があり、以下灰白色のシルトや粘土が堆積する。木屑層中の木片には加工痕跡が明瞭に残るものもあり、大きさや形状も多様であるが、劣化が進行し残存状況が悪く、取り上げができなかった。土師器羽釜や漆器が木屑層下から出土したが、遺物量は少ない。重複関係から溝0614より新しい。17世紀代に埋没か。

d. 時期不明の遺構

土坑0618 2006-2地区 (図7、21)

溝0614埋土除去後に検出した土坑。平面形が長径4m、短径2mの楕円形で、底の中央が一段窪む。断面形は逆台形状で、検出面からの深さは一段窪んだ深い部分で約55cm。底直上に部分的に青灰色シルトのブロックを含む黒色土が堆積する他は、黒色粘土層と粗砂層が互層状に堆積している。遺物は出土しなかった。

井戸0525 2005-1地区 (図9)

溝0528埋後につくられた井戸である。平面形が直径2.4mの円形。井戸枠が抜き取られ、当初の形状等は不明である。抜き取りの深さは約1.2m。埋土は灰色土で底直上に灰白色砂がみられる。井戸枠の部材と思われる木の断片が出土している。

溝0616 2006-2地区 (図7、21)

北東から南西方向に流れる溝。幅約1.2m、検出面からの深さ約30cm。東法面はほぼ垂直に落ち、部分的にオーバーハングする。北端は調査区外にのび、南端は溝0614によって破壊されている。長さは1.5m分を検出した。埋土は黒色粘土で奈良時代の土器小片を少量含む。重複関係から溝0617より古い。

溝0617 2006-2地区 (図7、21)

溝0616の東に位置する。幅約1.5m、深さ約25cm。南北方向の溝の一部を検出したもので、溝0616と同様に北は調査区外にのび、南は溝0614に破壊されているため長さ1m分しか検出していない。埋土は硬くしまる灰色砂質土(上層)と灰色シルト(下層)にわかれる。底直上には黒色シルトが薄く帯状に認められた。遺物は奈良時代の土師器、須恵器の小片が少量含まれていたが、時期は確定できない。

第V章 遺 物

第1節 瓦塊類

奈良時代の瓦塊類が少量出土している。遺構からまとまって出土したものは、井戸0639抜き取り後に投棄されたと考えられる一群があるのみで、他は各遺構や包含層、粘土採掘坑の埋土、後世の溝からまばらに出土している。種類には軒丸瓦、丸瓦、平瓦、埠がある。丸瓦と平瓦の出土位置と量は表3にまとめた。

a. 軒丸瓦（図22）

軒丸瓦は2点出土した⁽¹⁾。1は複弁8弁蓮華文で6282G型式。柱穴0522から出土した。中房は、圓線の内側に凹部を置いて中心が凸レンズ状に高まり、1+6の蓮子を配す。中心の蓮子が他の蓮子よりも大きい。外区は珠文、外縁は凸鋸歯文をもつ高い傾斜縁。外区と外縁の界線が太く高い。瓦当厚は3cm前後。接合式で、丸瓦の接合位置は高く、接合粘土が少ない。焼成が若干不良で、全体的に摩耗しているため、瓦当裏面や側面の調整は不明である。平城宮内や左京三条二坊出土瓦に同範瓦がある⁽²⁾。範の乱れは少ない。2は2005-1地区包含層出土。外縁の一部のみが残存。外縁は凸鋸歯文をもつ傾斜縁。焼成やや不良。型式不明。

b. 丸瓦（図22）

丸瓦は調査地全体からまばらに出土していて、出土量も平瓦と比べると圧倒的に少ない。小片が大多数を占めており、部位がわかる4点を図示した。いずれも凸面は繩タタキ後ナデ。

3は玉縁部周辺の破片である。凸面のナデは横方向の後、一部縦方向に施す。側面と凹面側縁は粗いケズリ。成形材は粘土紐か。凹面の側縁よりに布綴じ目がある。布目は7×9本／1cm²。井戸0639下層上面出土。4は凹面の側縁を不徹底なケズリ。また、凹面の布目（6～7×6～7本／1cm²）を部分的にナデ。凸面下半には回転を利用した横方向の凹線が1条入る。整地土0531出土。5は広端部のみ残存。凸面はヨコナデ後不定方向にナデ。側縁の面取りは凹凸両面ともしない。凹面の布目は8×8本／1cm²。井戸0639下層上面出土。6は広端部片。側面のケズリが部分的に2面になる。凹面の布目は7×8本／1cm²。焼成不良。井戸0639下層上面出土。

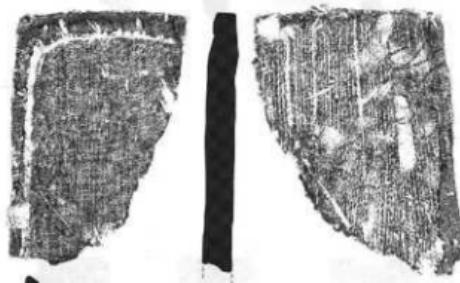
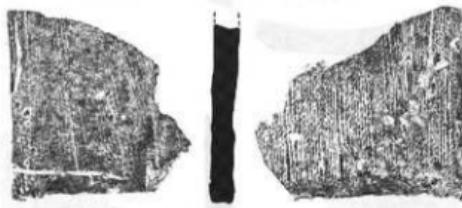
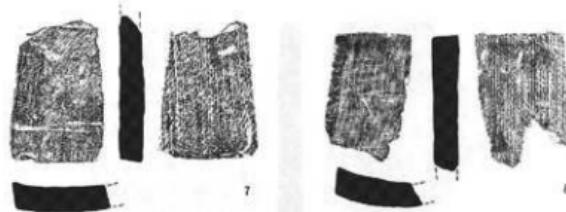
c. 平瓦（図23、24）

平瓦も調査地全体からまばらに出土している。小片が多く、中には熨斗瓦が混入している可能性もある。すべて凸面縦繩タタキの平瓦である。ここでは比較的まとまった量が出土した井戸0639下層上面出土のものを図示した。全形がわかる例がないため、側縁の面取りによって分類して報告する。

7～9は、側縁を面取りしないものである。7は広端部片。凹面布目（6×6本／1cm²）の大部分をナデ消す。8は狭端部片。布目（8×8本／1cm²）は狭端部まで及ぶ。9は広端部片。広端面は無調整。凹凸両面の広端縁の一部をケズリ。凸面には指頭痕跡が明瞭に残る。凹面の布目は9×8本／1cm²。凹面には糸切り痕跡が明瞭である。10～12は、凸面側の側縁を面取りするものである。10は狭端部片である。狭端面は無調整だが、凹面側の狭端縁はケズリ。凸面には一部に指頭痕跡が明瞭に残る。また、凸面側縁の面取りはかなり粗い。11、12は凹面側の狭端縁を面取りする。布目は7×6～



図22. 軒丸瓦・丸瓦 (1/4)



0 20cm

図23. 平瓦① (1/4)

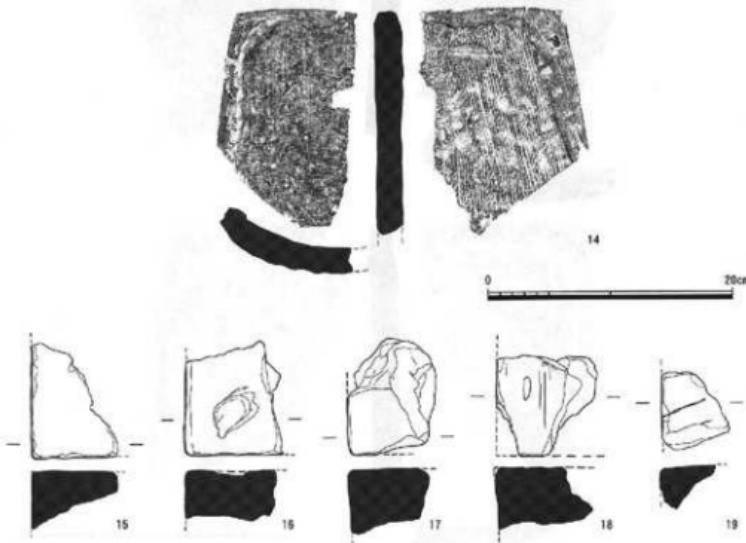


图24. 平瓦②・堵 (1/4)

8本／1cm²。凹面には布端がある。焼成や不良。11は凸面に多くの指頭痕跡が明瞭に残る。13、14は凸凹両面の側縁を面取りするものである。13は広端部片で、凸面には指頭痕が残る。広端面は無調整で凹面側の広端縁がケズり。凹面には糸切り痕跡が明瞭に残る。布目は7×8本／1cm²。14は凸面に指頭痕跡を明瞭に残す。凹面には布端が残り、糸切り痕跡が明瞭である。布目は8×11本／1cm²。

d. 塙

埠は溝0614と、2006-3地区の粘土探掘坑等から破片で出土している。幅、長さ、厚さを測ることのできる例はなく、出土量も少ない。

15は3面が残存。焼成やや不良。胎土は粗で、1cm大の石を含む。溝0614に混入。

16は3面が残存し、焼成が堅緻。胎土も密である。17は3面が部分的に残存する。焼成不良で全体が摩耗している。胎土は密。

18は3面が残存し、焼成が堅緻。一部指によるナデの痕跡が残る。胎土は密。16～18は粘土探掘坑への混入。19は2面が残存。

粘土の継ぎ目が明瞭に残る。焼成がやや不良で全体が摩耗している。井戸0639下層出土。

地区名	出土遺構	層序	平瓦	丸瓦	不明	計(kg)
2006-1	包含層 土坑0607 その他の遺構		2.4 2.0 0	2.2 0.3 0.3	1.3 0.3 0.1	5.9 2.6 0.4
	包含層 溝0614	上層 下層	1.9 3.7 2.7 0.5 0.3	0.7 1.7 0.8 0.1 0.1	1.0 2.3 0.4 0.1 0.1	3.6 7.7 3.9 0.6 0.5
	溝0615 土坑0619 溝0620 その他の遺構		0.4 0.1	0.2 0	0.2 0	0.8 0.1
2006-3	包含層 粘土探掘坑 土坑0624	上層 中層 下層	2.7 4.1 0 3.3 2.8 10.5	0.8 1.6 0 1.0 0.7 3.5	0.6 0.5 0.1 0.3 0.4 0	4.1 6.2 0.1 4.6 3.9 14.0
	井戸0639		0 0 0	0 0 0	0 0 0.1	0 0 0.1
	建物0634 溝0635 その他の遺構		0.1	0	0	0.1
	包含層		0.3	0	0.1	0.4
			8.2 0 0.2 0.6 0.1 0 4.0 0.2 2.0 4.6 0 0.6 0.1	3.4 0 0 0 0 0 0.4 0.9 0.5 1.4 0.9 0.6 0	2.5 0.1 0 0.1 0 0 0 2.3 0.5 1.0 0.5 0.3 0.2 0.1	14.1 0.1 0.2 0.7 0.1 0.4 7.8 1.6 3.3 7.0 1.2 1.4 0.2
2005-1	包含層 土坑0501 土坑0502 土坑0504 土坑0506 土坑0507 柱穴0522 粘土探掘坑 土坑0509 溝0528 溝0529 溝0531 井戸0525 溝0529		58.8	23.5	16.2	98.5
	包含層 土坑 糞掘り溝		0.2 0.2 0	0 0 0	0 0 0.4	0.2 0.2 0.4

表3. 丸瓦・平瓦重量

註

(1) 軒丸瓦の型式番号は、奈文研・奈良市教委編『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』奈良市教委1996によった。瓦の形態などの記述は毛利光俊彦・花谷治「第VI章 考察 1屋瓦」『平城京発掘調査報告XIII』奈文研学報第50冊 奈文研1991を参考にした。

(2) 『奈良国立文化財研究所基準資料Ⅷ 瓦編7』 奈文研1980

『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告—長屋王邸・藤原麻呂邸の調査—』奈文研学報第54冊 奈文研1996ほか

第2節 土器、土製品

3年度の調査で整理用コンテナ約100箱の遺物が出土しているが、そのほとんどが土器類である。種類は土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、瓦質土器、陶鏡、土馬がある。出土した土器の大部分が奈良時代に属するもので、他は平安時代以降のもの、特に中世に属するものが多い。土器の大半は破片であり、図化にあたっては特徴的なものを除いて、口縁部や底部が1/8以上残存していることを基準とした。本節では奈良時代の土器とそれ以降の時期の土器とで小節を設け、出土遺構ごとに報告する。また、奈良時代の土器類の時期は、資料数や特徴からある程度明確にできるものについてのみ言及する⁽¹⁾。

a. 奈良時代の土器、土製品

建物・整地土（図25）

建物の柱穴からは土師器や須恵器が少量出土しているが、ほとんどが図化できないような小片である。建物0521が掘り込まれる基盤層である整地土0531出土遺物とあわせて報告する。

1～3は建物0521出土土器で、2は整地土0531を掘り込んでいる柱穴からの出土である。1は土師器壺Bの小型品である。底部は狭い平底になると思われる。焼成があまく、口縁部をヨコナデする他は特に器面調整をせず、外面には粘土紐の痕跡も明瞭である。2は土師器壺Aで、復元口径が15.2cmと小ぶりである。体部は外面をハケ、内面をナデ調整し、口縁部内面にはハケ調整が残る。焼成があまい。胎土は粗で、2mm大の砂粒を多く含む。3は須恵器壺の底部である。外方に強く張る高台をもつ。底部内面の中心に緑色の自然釉が降着する。

整地土0531出土土器には土師器は杯A、杯B、杯C、碗C、甕A、甕B、壺が、須恵器は杯A、杯B、蓋、皿、鉢D、壺、甕がある。残存状況が良好でなく、図示したのは5点である。4、5は土師器杯Aである。どちらも口縁端部が内側に丸く肥厚する。底部外面は4がヘラケズリ、5がナデ。どちらも全体的に摩耗しており、特に内面の調整は不明瞭であるが、5は内面に密な間隔の斜放射暗文が一部残存している。6、7は須恵器杯Bである。ともに底部外面は回転ヘラ切りの後、外方に強く張る端面が平坦で水平な高台をつける。6は色調が青灰色で焼成が堅緻。7は色調が灰白色で焼成がややあまい。8は須恵器皿である。口縁部はまっすぐ外方にのびて、端部が大きく外反する。底部外面は回転ヘラ切り。焼成不良でにぶい青灰色の色調を呈する。

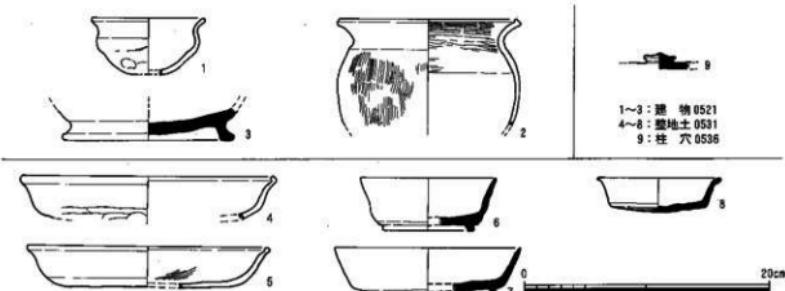


図25. 建物・整地土出土土器 (1/4)

9は須恵器蓋で、つまみが残存する。柱穴0536出土。

整地土0531出土土器は平城宮土器Ⅲよりは新しくならないと考えられる。

土坑0502（図26-10~23）

埋土の下層から多量の土器が出土した。土師器の量が圧倒的に多く、須恵器はほとんどない。また、出土量が多いが完形はない。土師器は杯A、皿C、皿X、椀C、甕A、甕C、高杯A、瓶が、須恵器は杯A、杯B蓋、壺、甕がある。14点を図示した。

10~14は土師器杯Aである。いずれも外表面が摩耗している。10~13は口縁端部を内側に肥厚させて丸く仕上げるが、14はあまり肥厚がない。10は底部内面に螺旋暗文、口縁部内面に斜放射暗文と連弧状暗文を施す。底部外面はヘラケズリで、口縁部外面にやや粗いヘラミガキを施す。11は暗文を施さず、外面にもヘラミガキを施さない。底部外面のヘラケズリは口縁部との境周辺では密だが、中心部分では粗くなり調整が及ばない範囲が広くなる。12は内面がかなり摩耗しており、暗文の有無が不明。底部外面はヘラケズリで、外面にヘラミガキを施さない。13は口縁部の外反が強く、暗文がない。底部外面をヘラケズリする。14は内外面の摩耗が特に甚だしく、暗文の有無だけでなく底部外面の調整も不明である。15は土師器皿Cである。口縁部をヨコナデで仕上げ、底部外面は無調整。16、17は土師器皿X。平底からゆるやかに外反する口縁部をもち、端部は丸くおさめる。どちらも内外面ともに摩耗。16は口縁端部に煤が付着する。口縁部をヨコナデし、底部外面は無調整で成形時の凹凸を残す。17は口縁部をヨコナデ、底部外面は丁寧なナデ。口縁部内面に左上がりの斜放射暗文がわずかに観察できる。18は椀Cである。内面が摩耗。口縁部が外反し、端部を丸くおさめる。底部外面は無調整で成形時の凹凸が残る。口縁部外面には粘土紐痕跡も残る。19、20は土師器甕Aである。どちらも体部外面はハケ、口縁部は内外面ともにヨコナデで、小ぶりな甕。19は口縁端部が内側に屈曲する。二次的に火熱を受け器面の残存状況が悪い。口縁部内面に煤が付着する。20は外反する口縁部で端部を丸くおさめる。体部内面にハケの痕跡が残る。色調は灰白色で他の土師器と異なる。21は土師器甕Cである。大きく外方にひろがる口縁部で、端部を内側に屈曲させる。体部外面と口縁部内面にハケ調整がみられる。口縁部外面はヨコナデ。体部内面は丁寧にハケの痕跡をナデ消している。体部外面には黒斑がある。22は須恵器壺の底部である。平底。23は紡錘車。土師器の転用と考えられるが、特徴的な痕跡がなく元の器形は不明。

これらの土器は、土師器杯Aの底部外面調整や暗文の特徴から平城宮土器Ⅲに属すると判断する。

土坑0504（図26-24~27）

土師器、須恵器の小片が少量出土した。量の割合をみると、土師器が多く須恵器はほとんど無い。

24は土師器杯A。口縁部と底部の境が特にゆるやかである。内外面ともに摩耗がひどく、器表面の観察がほとんどできない。外面は口縁部をヨコナデ、底部をヘラケズリ。暗文の有無は不明。25は土師器皿B。底部のみ残存。外方に張り端面がやや傾斜する高台をもつ。26は土師器甕Aである。体部外面を縱方向のハケ、口縁部内面を横方向のハケ。体部内面は丁寧にナデ。体部外面に黒斑がある。27は須恵器壺で、つまみが残存。つまみの中央は小さく突出する。図示した4点の他には、須恵器杯、土師器甕の破片がある。

遺物量が少なく、残存状況が悪いことによって時期の断定はできないが、土師器杯Aの調整から土坑0502とあまり時期が離れないものとしておく。

土坑0505（図27-36・37）

土師器と須恵器の小片が出土しているが、土師器の方が多い。土師器は特に小片化している。土師器は杯A、杯C、高杯A、甕が、須恵器は杯A、鉢A、壺蓋、甕がある。比較的残存状況の良い須恵

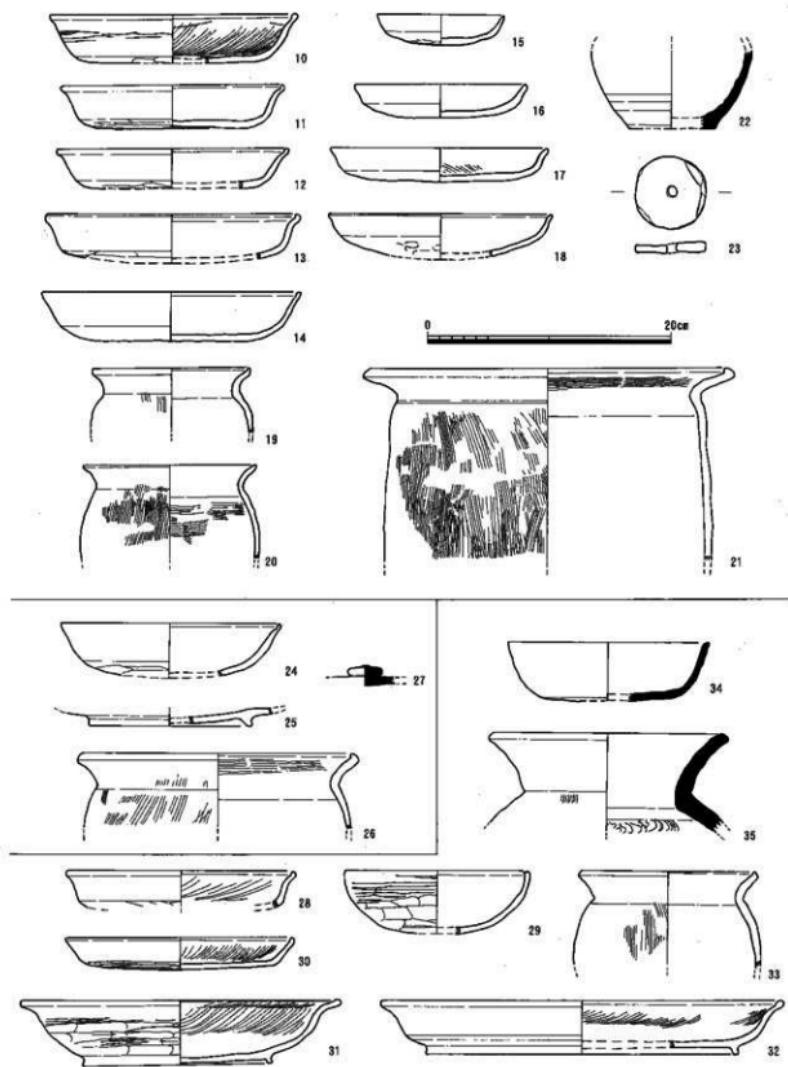


図26. 土坑出土土器① (1/4)
(10~23: 土坑0502, 24~27: 土坑0504, 28~35: 土坑0507)

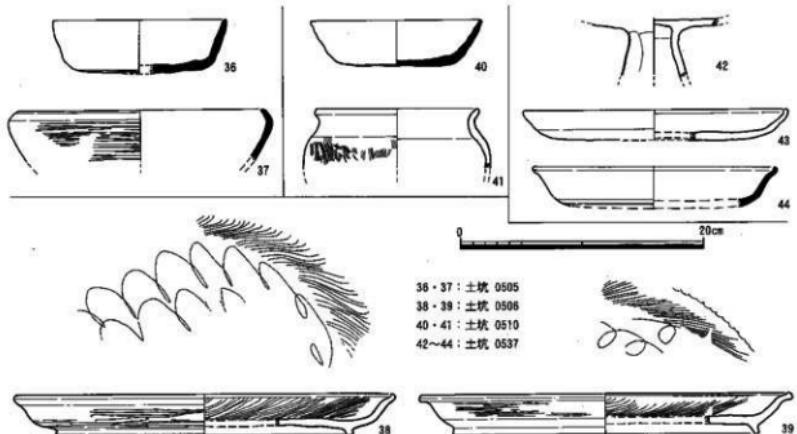


図27. 土坑出土土器② (1/4)

器2点を図示した。

36は杯Aである。底部は粗い回転ヘラ切り。焼成がややあまく、灰白色の色調を呈する。37は鉢A。口縁部外面を丁寧にケズリ調整し、ヘラミガキ状に見える。内面は丁寧な回転ナデ。焼成堅緻。

残存率が悪いため図示していないが、2段の斜放射暗文がみられる土師器杯の小片があることや、鉢の特徴から平城宮土器II～IIIに属すると考えられる。

土坑0506 (図27-38・39)

土師器と須恵器が出土しており、土師器の方がやや出土量が多い。土師器は杯A、皿B、甕B、甕が、須恵器は杯A、杯B、杯B蓋、鉢A、甕がある。土師器2点を図示した。

38、39は土師器皿Bである。どちらも焼成が良好だが内外面が摩耗している。口径、器高はほぼ同じ。38は口縁端部を内側に肥厚させて丸くおさめる。底部外面はヘラケズリ。口縁部外面はやや粗いミガキ。底部内面には剣菱形暗文を、口縁部内面には斜放射暗文を施す。底部内面中央付近に煤が付着する。39は口縁端部を外方へつまみ出すようにしてひろげ、丸くおさめる。外面は底部がナデ、口縁部がヘラミガキ。底部内面には螺旋暗文、口縁部内面には斜放射暗文と端部の周辺に密な連弧暗文を施す。

平城宮土器IIIに属するか。

土坑0507 (図26-28～35)

土師器と須恵器が出土したが、出土量は土師器の方がやや多い。土師器は杯A、杯C、鉢B、皿A、皿B、甕が、須恵器は杯A、杯蓋、甕がある。8点を図示した。

28～33は土師器である。28は杯A。口縁部と底部の境が明瞭である。底部外面はヘラケズリ。口縁部内面にはやや間隔の広い斜放射暗文を施す。29は鉢Bである。内湾する口縁部で、端部を内側に肥厚させる。外面は底部をヘラケズリし、口縁部を丁寧にヘラミガキする。内面はナデ。30は皿Aである。口縁部が直線的に外方にのびる。底部外面は丁寧なヘラケズリ。内面は摩耗していく特に底部での調整の観察が困難であるが、口縁部に施した斜放射暗文が一部残存している。31、32は皿Bである。31は器高がやや高く、皿とするか躊躇したが、形の特徴が32と類似することから皿として扱う。どち

らも大きく外反する口縁部をもち、底部に高台を付す。内外面は摩耗し、特に底部内面の器表は調整の観察が困難である。31はほぼ完形である。底部外面をヘラケズリし、底部から口縁部にかけての外面に粗いヘラミガキを施す。口縁部内面に斜放射暗文を2段施す。32は底部外面に回転を用いたと思われるヘラケズリを施し、外面のヘラミガキがみられない。口縁部内面に斜放射暗文が一部残存している。高台の貼り付け痕跡が明瞭である。33は壺A。残存率が低いが、小ぶりで、内面に煤が付着している。34、35は須恵器である。34は杯Aである。底部外面は回転ヘラ切り。ゆるやかに外方にひろがる口縁部をもち、口縁端部は平坦に仕上げる。焼成不良で、灰白色の色調を呈する。35は壺で口縁部のみが残存する。

土師器杯や皿の特徴から平城宮土器Ⅲに属するものと考えられる。

土坑0510（図27-40・41）

少量の土師器小片、須恵器がある。40は須恵器杯Aで、ほぼ完形。焼成がややあまい。底部外面は回転ヘラ切り。41は土師器壺。短く外方につまみだすような口縁部で、端部を丸くおさめる。体部外面がハケ、内面は粗いナデ。外面のハケは小さな工具で密に施す。

土坑0537（図27-42～44）

42は土師器高杯Aである。脚部との接合部分のみ残存。脚部の面取りは5面が残存する。焼成があまく、全体的に摩耗している。43は土師器皿A。焼成があまく器表面が摩耗しているため、暗文の有無は不明。底部外面はナデで成形時の凹凸が残る。44は須恵器杯Cである。内側に巻き込んで肥厚する口縁短部をもつ。底部は回転ヘラケズリ。

図示したものの他に土師器杯A、杯C、壺、須恵器壺がある。平城宮土器Ⅱ～Ⅲか。

土坑0509（図28、29）

土坑0509からは整理用コンテナ5箱分の土器が出土した。土器は破片が多く、完形はほとんどない。土師器と須恵器が出土したが、土師器の方がやや量が多い。土師器は杯A、杯B、杯C、皿、鉢B、碗、高杯A、壺B、壺A、壺B、鍋B、竈が、須恵器は杯A、杯B、杯C、杯B蓋、皿、鉢A、鉢D、壺H、壺L、壺A、壺Cがある。また、器種不明の脚台付土器がある。

45～57は土師器である。45、46は杯A。どちらも外面は口縁部がヨコナデ、底部がナデである。45は内外面が摩耗によって調整を観察できない。46は焼成良好。暗文、外面のヘラミガキを施さない。底部外面には成形時の凹凸が多少残る。47は皿である。底部から口縁部はゆるやかに湾曲しながら立ち上がり、口縁端部をやや鋭く仕上げる。底部外面には成形時の凹凸が残る。焼成良好。48は鉢Bである。平底からゆるやかに口縁部が立ち上がり、口縁端部を内側に巻き込む。外面は底部から口縁部下半までヘラケズリ。内面はナデ。焼成良好。49はやや外反する口縁部で端部を内側に肥厚させるもの。碗か。底部はやや丸みをもった平底になると推定できる。口縁部をヨコナデ。底部は内外面ともにナデ。50～52は高杯Aで、いずれも口径30cm前後の大型のものである。50と51は杯部のみ、52は脚部との接合部のみが残存する。50は杯部外面に密にヘラケズリを施した後、口縁端部周辺を鋭くヨコナデで仕上げる。口縁端部には煤が付着する。内面に暗文はみられない。51は外面調整が50と同様で、内面に放射暗文と螺旋暗文を施す。52は杯部外面に密にヘラミガキを施す。内面には放射暗文と6重の螺旋暗文を施す。脚部は外面をヘラケズリによって13面に面取りし、内面もヘラケズリする。脚柱部は心棒成形による。53～56は壺Aである。53、54は口径15cm前後の小型品、55、56は口径23cm前後の大型品である。53は口縁部が内湾し、口縁端部がやや内傾する。焼成があまく、内外面が摩耗する。体部内面にハケの痕跡が明瞭に残る。色調は灰白色を呈する。54はほぼ完形。口縁端部は内側に鋭く巻き込む。体部外面のハケは、底部では縦方向、体部中央では横方向、体部上半では縦方向である。

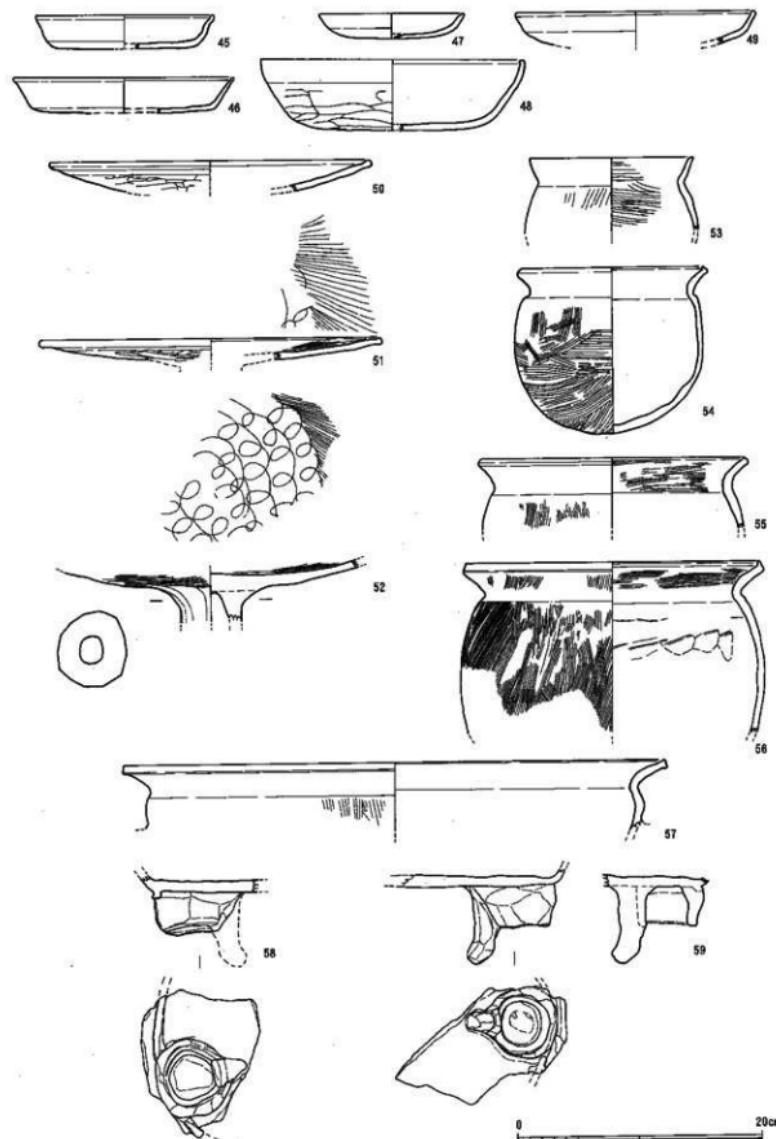


图28. 土坑0509出土土器① (1/4)

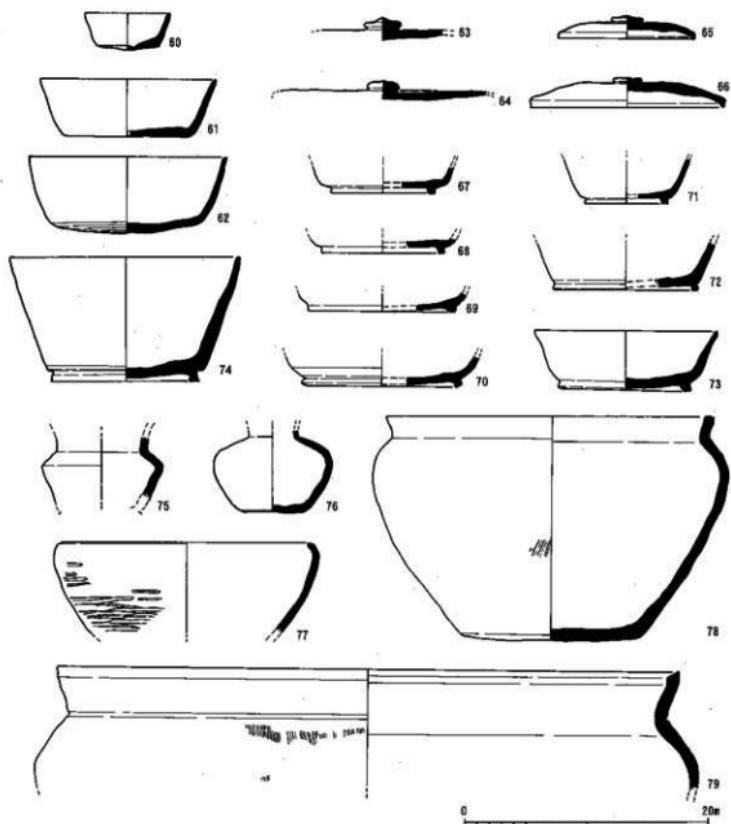


図29. 土坑0509出土土器② (1/4)

内面は粗いナデ。55は体部上半の外面に縦方向のハケ、口縁部内面に横方向のハケがある。体部内面は丁寧なナデ。56は体部に縦方向のハケ。口縁部はヨコナデだが、内外面ともにハケ調整が残る。体部内面には粘土紐痕跡が残り、板状の工具でナデ上げた痕跡がある。57は鍋Bである。外方に大きく外反する口縁部をもち、肩部分に把手の接合痕跡がわずかに残存する。

58、59は器種不明土器で同一個体である。色調は暗青灰色で、焼成があまい瓦質のような質感を呈する。高台を付す皿または盤状で、底部にさらに脚を付ける。口縁部下半は回転ヘラケズリで、浅い沈線が一条残存する。底部内面はナデで、あまり平滑でない。脚の製作手順は、①まず大型の高台を付す皿または盤をつくり、②その底部に手づくねの円筒状の脚をつける。その際、高台も埋め込む。③その後、円筒状の脚の内側に、内側に向かって屈曲する棒状の脚を取り付ける。棒状の脚も手づくねで、端部を特に平坦にしたりはしない。この脚は今回の調査では2本分が出土したが、本来は3本

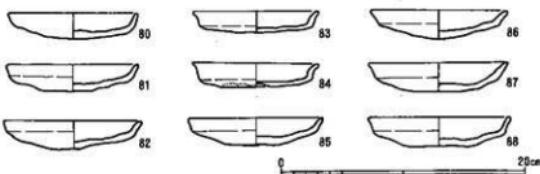


図30. 土器埋納坑0632出土土器 (1/4)

以上あると思われる。完成品は棒状の脚のみで自立する構造になっており、高台や円筒状の脚は実際には機能していないことになる。破片数は少ないが、かなり大型の土器になる。胎土は精良。

60~79は須恵器である。60~62は杯Aである。60、61は底部外面を回転ヘラ切りで、62は回転ヘラケズリで仕上げる。60は焼成が堅緻で青灰色の色調を呈するのに対して、61、62は焼成があまく灰白色の色調を呈する。60は小型の個体で、底部と口縁部の境が明瞭である。焼成堅緻。内面に降灰がみられ、口縁部外面には漆がわずかに付着する。62はゆるやかに内湾する口縁部をもち、口縁端部に面をもつ。口縁部上半と内面が黒色に焼された状況で、重ね焼きの痕跡を残す。ほぼ完成形。63~66は杯B蓋である。全て扁平な宝珠形のつまみをもつ。つまみの中央は63が高く突出し、64と65がやや小さく突出、66がくぼむ。65は頂部から縁部までがゆるやかに丸みを帯びた形状で、端部をわずかに屈曲させる。66は頂部と縁部の境が明瞭で縁部がゆるやかに屈曲する。端部の屈曲がやや鋭い。64は頂部と縁部の境が無く扁平で器高が低い。頂部の調整は64が回転ナデで仕上げ、他は回転ヘラケズリ。焼成は66がややあまいが、他は堅緻。67~73は杯Bである。73はほぼ完成形だが、他は底部片のみの残存で全形がわかるものはない。69と70は腰部の立ち上がりがゆるやかで、67、68、71、72は腰部の立ち上がりが鋭く内湾し明瞭である。73は腰部がやや内湾しながら立ち上がり、口縁部が外反する。高台は67~69がやや外方へ張り、他は外方へ強く張るもので特に72が強くふんばる。高台の端面は70が内傾する他は全て水平である。底部外面は70が丁寧に回転ヘラケズリする他は回転ヘラ切り。69のみ焼成があまい。74は椀Bである。底部外面を回転ヘラ切りし、腰部から口縁部への立ち上がりが鋭く明瞭である。底部内面にはハケ状の工具によるナデの痕跡が不定方向にみられる。焼成堅緻。胎土は5mm大の白色の石が混入し、やや粗い。高台は外方へ強く踏ん張る。75は壺Hで、体部のみが残存。76は壺J。高台を持たない平底で、外面を丁寧に回転ナデする。肩部外面と底部内面に降灰がかかる。77は鉢Aである。口縁部が内湾し、端部に1段小さな段をもつ。外面のヘラケズリは体部下半では密だが、口縁部付近ではやや粗く、ヘラミガキ状にみえる。78は鉢Dで、完形品である。タタキの後全体を回転ナデで仕上げており、体部外面の下半に一部タタキ痕跡が残る。内面は特に丁寧に仕上げる。79は壺C。口縁端部に内傾する平坦面をもつ。タタキ痕跡は丁寧にナデ消し、特に内面を丁寧に仕上げる。口径が50cmを越える大型品。

これらの出土土器は器種構成や杯類の特徴等から平城宮土器Ⅲに属すると考えられる。

土器埋納坑0632 (図30)

土器器皿10枚が埋納されていた。土器の残存状況が悪く、1枚は取り上げ時に破損してしまったため、残りの9枚を図示した。すべて土器皿Cで、口径10.4~11.6cm、器高2.0~2.4cm。口縁部外面がヨコナデで、内面がナデで、底部外面は無調整である。口縁部の形状は、80が内湾気味で他は鋭く外反させる。色調は83が鮮やかな橙色を呈し、他はにぶい淡黄色である。焼成はすべて良好で胎土も密。奈良時代前半か。

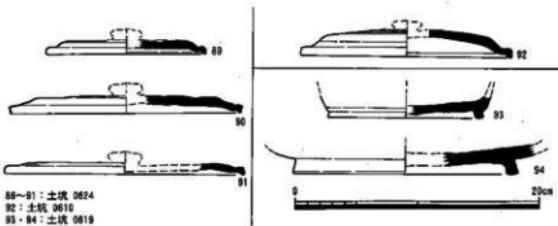


図31. 土坑0624・0610・0619出土土器 (1/4)

土坑0624 (図31-89~91)

ほとんどが小片で、器形が判別できるものは限られている。土師器は碗C、高杯A、壺が、須恵器は杯B蓋、壺がある。89~91は杯B蓋で、いずれも器高が低い。89は扁平な頂部で縁部を明瞭に屈曲させる。90と91は頂部から縁部にかけて扁平である。

土坑0610 (図31-92)

土師器は杯、壺が、須恵器は杯A、杯B、杯B蓋、壺、壺があるが、すべて小片である。92は須恵器杯B蓋。器高がやや高く、やや扁平な頂部に屈曲する縁部をもつ。焼成があまい。

土坑0619 (図31-93・94)

須恵器が主体で、土師器は小片1点のみである。須恵器も大半が壺の破片である。93は須恵器杯B、94は須恵器皿Bの底部片である。94は焼成があまく、器表面が摩耗している。

井戸0639 (図32)

整理用コンテナ5箱分の土師器、須恵器が出土した。土師器は杯A、皿A、壺A、小型壺で、須恵器は杯A、杯B、杯B蓋、皿A、盤、壺、壺蓋、壺である。土師器は細片化したものが多く、器形がわかるものが少ない。図示していないが、きわめて小さな破片には、金属器模倣形態をとる須恵器杯Eや杯Fと思われる個体もある。製塙土器の小片も少量出土している。前章で述べたように、埋土は3層に大別できる。上・中層の土器には層をまたいで接合する個体があるため、上・中層と下層と床面直上とにわけて報告する。

95~104は上・中層出土。95が土師器で他は須恵器。95は壺Aである。口径13.2cmの小型品。内面には粘土紐痕跡が残る。口縁端部外面に煤が付着する。96、97は杯Bである。口縁部の外傾度が低く、特に97はほぼ垂直に立ち上がる。96は底部外面の回転ヘラ調整をナデで丁寧に消す。どちらも高台は外方に張る。98は杯Aである。底部外面の回転ヘラケズリを粗くナデ消す。口縁部外面上半の色調が黒ずんでいて、重ね焼きした様子がわかる。99~101は杯B蓋である。99はつまみの中央がやや高まる。頂部と縁部が明瞭に別れずに丸みを帯びた笠形で、やや器高が高い。器壁も全体的に厚ぼったい。100は頂部が扁平で厚みがあるつまみをもつ。頂部外面には緑色の自然釉が降着する。101は頂部から縁部が扁平。102は平瓶で、口縁部のみ残存。103は盤で、復元口径が30cmを超える大型の土器である。口縁部は外方に直線的にのびて上半で大きく外反する。口縁端部は丸くおさめる。外面は底部から口縁部上半付近までを回転ヘラケズリする。内面の口縁端部付近にのみ煤が付着している。104は壺蓋で、端部は平坦な面とする。

105~110は下層出土。105~107は土師器である。105は杯A。口縁端部は内側に巻き込んで肥厚する。外面調整は底部を粗くヘラケズリし、口縁部をヨコナデ。内面は口縁部に斜放射暗文と底部に螺旋暗文を施す。焼成は良好。106、107は壺Aである。106はほぼ完形。内外面をハケ調整する。ハケ

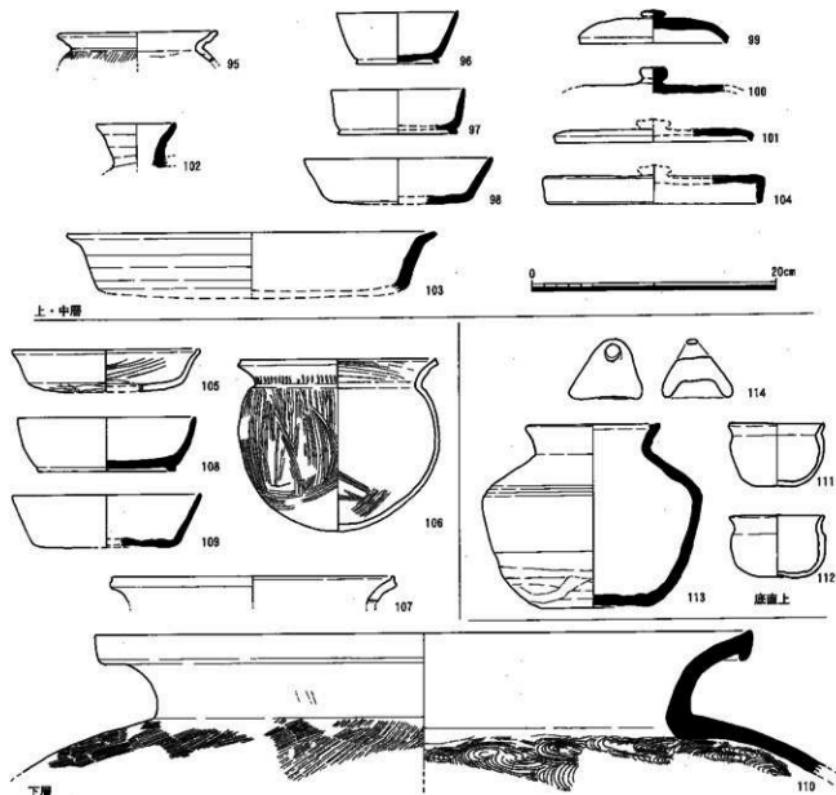


図32. 井戸0639出土土器 (1/4)

は、体部外面下半が横方向、上半を縦方向に施す。外面全体に煤が付着する。体部内面はハケをナデ消しているが、底に向かって次第にナデが粗くなるため、底ではハケがほぼそのまま残っている。108～110は須恵器である。108は杯Bである。底部外面は回転ヘラ切り。底部内面は回転ナデの後、不定方向にナデを加える。高台はやや外方に張る。109は杯Aである。底部外面は回転ヘラ切りの後粗くナデ。口縁部内面は底部と比べると器壁の凹凸がほとんど無く、ハケ状の工具痕跡が明瞭に残る。110は甕。口径50cmを越える大型品である。体部内外面にはタタキが明瞭に残る。口縁部はヨコナデだが、外面の一部にタタキの痕跡が残る。体部外面と口縁部内面に降灰がみられ、外面は白色を呈する。

111～114は底直上からの出土。すべて完形。111、112は土師器小型壺である。口縁部をヨコナデ、他は内外面ともにナデ。112の方がヨコナデによる口縁部の屈曲が鋭い。胎土は密で焼成良好。113は須恵器壺である。明瞭な肩をもつ体部に短く外方に内湾する口縁部をもつ。口縁端部は平坦な面とする。肩部には2条の凹線をめぐらせる。体部外面下半は粗い回転ヘラケズリで、他は回転ナデ。底部外面はナデとする。外面の肩部より上位と、底部内面に自然釉が附着する。114は不明土製品である。

中実の円錐形で、頂部よりやや下に横方向の穿孔がある。底は上げ底状とする。焼成不良の須恵器に似た質感で、色調は灰白色。胎土はやや粗い。全面ナデ。重量は86.82g。右京八条一坊十一坪出土遺物に類例がある⁽²⁾が、用途は不明である。

抜き取り後の埋土である上・中層と下層出土土器は、杯類の特徴から、平城宮土器Ⅲで捉えられると考える。底直上土器類は時期の特定が困難な器種ではあるが、ほぼ同時期か、そこから大きく遡らないものとしておきたい。

後世の遺構や包含層からも多量の奈良時代の土器が出土している。以下、混入して出土した土器類について報告する。

粘土探掘坑出土土器（図33）

粘土探掘坑埋土からの出土遺物は奈良時代の土器類が大半を占める。これらの土器類は周辺にあった奈良時代の遺構を破壊した際に移動したものである。2次的な資料ではあるが、中には調査区周辺の奈良時代の実態を探る手がかりになるものも含まれるとと思われる。

115～123は土師器である。115は椀Aで、口縁端部を軽く内側に巻き込む。底部から口縁部までの外面全体をヘラケズリする。平城宮土器VIか。116は杯で、口縁端部を軽く肥厚させ、内傾させる。外面はやや粗いヘラミガキ。117は皿Bで底部のみ残存。焼成不良で摩耗により器表面の調整不明。118、119は皿である。ともに口縁部は外反する。口縁端部は118が外傾する面をもち、119が丸くおさめる。底部外面は無調整。120は鉢Bで、口縁端部を内側に軽く巻き込む。焼成不良で摩耗により内外面の調整は不明。121、122は小型の壺B。口縁部をヨコナデで外反させ、他は外面ともにナデ。123は甕で、口縁部のみが残存する。

124～151は須恵器である。124は皿A。口縁端部は丸くおさめ、底部外面は丁寧な回転ヘラケズリで仕上げる。125は皿C。口縁端部をやや平坦に仕上げ、底部は回転ヘラケズリの後粗いナデで仕上げる。126は杯Aである。底部外面を回転ヘラ切りの後ナデで仕上げる。底部と口縁部の境が明瞭である。127～138は杯Bである。破片が多く、器高や口径がわかる個体は少ない。ここでは底径をもとに大きく分類して述べる。127は底径4.6cmで他と比べて小さい個体である。復元口径も7.8cmと非常に小さい。器壁は厚ぼったい。ミニチュア製品か。128は底径7cm大、復元口径が10cm前後の小型品。129、130は底径9～10cmの中型品。底部から口縁部にかけての立ち上がりがややゆるやかである。129は口縁部上半が外反する。131～138は底径11～13cm大の大型品。131と132は全形がわかるが、他は底部のみが残存する。底部外面の調整はすべて回転ヘラ切り。焼成はすべて堅緻。136は底部から口縁部にかけての外面全体に降灰がみられる。139、140は杯B蓋である。139は中央がやや高まるつまみの破片で、頂部外面全体に降灰がみられる。140は縁部が屈曲する低い器高で、扁平な個体である。141～146は高台を付す壺の底部である。141～144は底径が7～8cmで小型。高台は、143が外方に強く踏ん張り内傾し、他が水平な端部をもつ。145と146は底径が10cmを越えるやや大型品。高台はどちらも強く外方に張り、端面が内傾する。すべて体部の外面下半を回転ヘラケズリ、底部の外面を回転ヘラ切りする。146を除いて底部内面中央に自然軸が降着する。147は壺蓋である。口縁端部は平坦で内傾する。外面全体に降灰がみられる。148は壺である。短く外反する口縁部をもち、肩部と体部の境が明瞭である。内面にはシボリ痕跡が残る。器壁が薄く、胎土も緻密である。ミニチュア製品か。口縁部外面に漆が付着する。149は高杯で、杯部と脚部の接合部分が残存する。杯部内面はナデ。脚部は外面が回転ナデ、内面は回転ヘラケズリ。150、151は甕の口縁部。口縁端部を平坦に仕上げ、150は外傾、151は内傾させる。151は焼成やや不良。

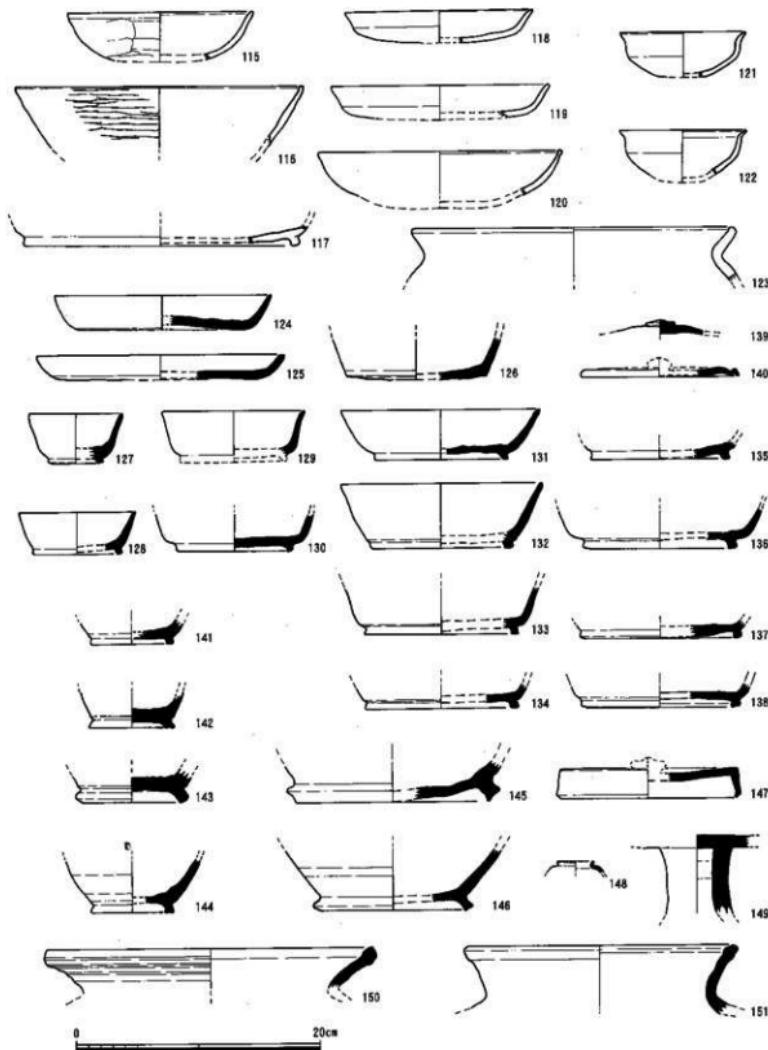


図33. 粘土探掘坑出土土器（奈良時代）(1/4)

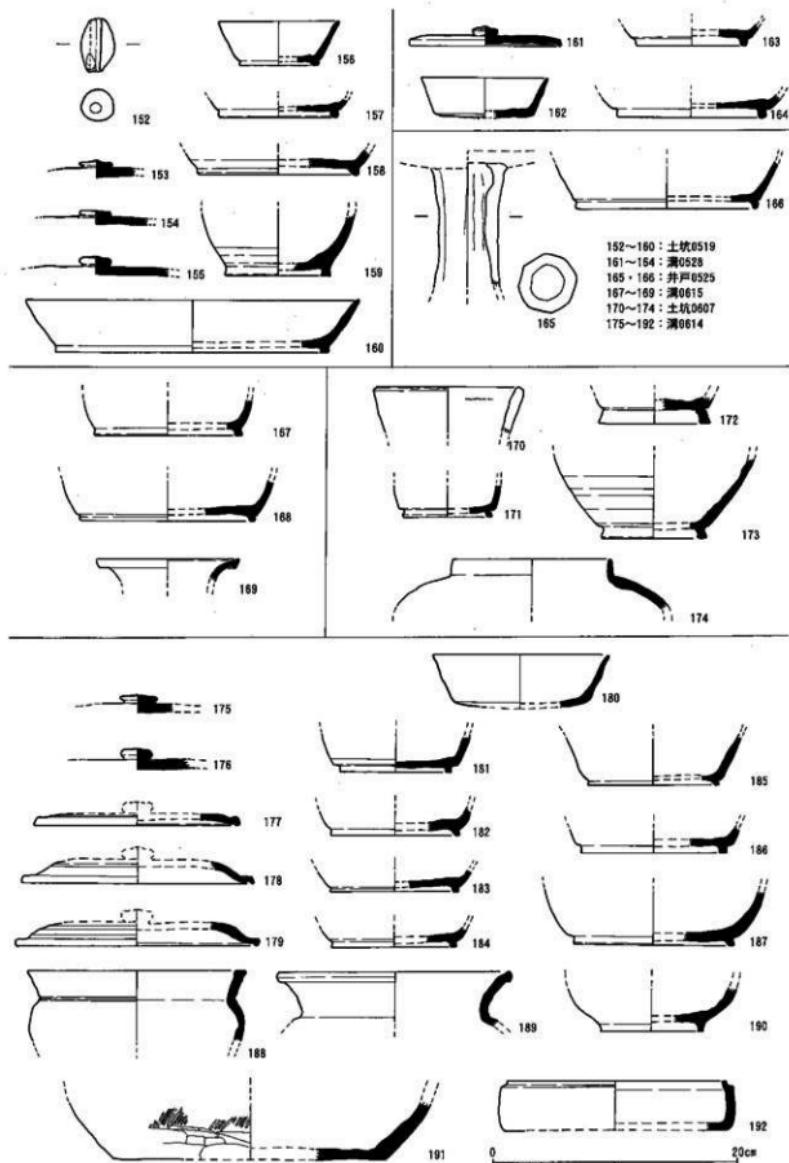


図34. 後世の遺構への混入土器 (1/4)

土器のほとんどが破片資料であるため個々の厳密な時期についての判別は難しいが、平城宮土器Ⅲ～VIに属すると考えられる。

後世の遺構への混入（図34）

平安時代以降の遺構から出土した奈良時代の土器類を報告する。

152～160は平安時代の土坑0519の出土土器類で、153～160が須恵器である。152は土壺である。焼成は土師質で、中心を貫通させた孔を穿つ。外面には黒斑がある。153～155は杯蓋のつまみである。つまみには中央が突出するもの（153）と凹むもの（154）とやや高まるもの（155）の各種がある。156～158は杯Bで、全形がわかるものは156のみ。158は底部外面を丁寧に回転ヘラケズリする。159は高台をもつ壺の底部である。底部外面に糸切り痕跡が残存するが丁寧にナデ消している。平安時代まで下る可能性が高い個体であるが、後述する遺構本来の所属時期までは下らないものと判断できるため、ここに図示しておく。160は皿Bである。高台が底部と口縁部のちょうど境に付く。

161～164は平安時代の溝0528の出土須恵器である。161は杯B蓋で、扁平な頂部とやや屈曲した縁部からなる。つまみの中央がやや突出する。162は杯Aで、底部外面が回転ヘラ切り。焼成不良。163、164は杯Bで底部が残存。163は高台がやや高い。

165、166は平安時代以降の井戸0528出土。165は土師器高杯Aで脚柱部のみ残存する。外面はヘラケズリで8面を面取り。内面はシボリ痕跡が明瞭である。166は須恵器杯B底部である。

167～169は江戸時代の溝0615出土須恵器である。167と168は杯Bの底部。168は底部と口縁部の境が明瞭である。169は壺の口縁部。大きく外反して、端部を肥厚させる。

170～174は室町時代の土坑0607出土土器で、170を除いてすべて須恵器である。170は製塙土器の口縁部。胎土は粗く3mm大の大きな石粒を多く含む。色調は灰白色である。171は杯Bで、口縁部が内湾しながら外方へ傾かず立ち上がる。高台が外方へ強く踏ん張る。172、173は壺の底部である。どちらも外方へ強く張る高台を付し、端面は平坦で水平である。体部下半が回転ヘラケズリ。174は壺Aである。肩部と口縁部との境から約2cm外側の肩部に降灰がみられ、蓋を重ねた状態で焼成されたことがわかる。内外面ともに丁寧な回転ナデ。

175～192は室町時代埋没の溝0614出土土器で、図示したものはすべて須恵器である。175～179は杯蓋である。175、176は中央がやや高まるつまみで、176はやや厚手。177～179は縁部が屈曲し、177は器高が低く、178と179は高い。178は胎土が精良で頂部の回転ヘラケズリも丁寧である。180は杯Aで、口縁部がやや外反する。底部外面は回転ヘラ切り。181～187は杯Bだが、底部片のみで全形がわかる個体はない。底部径が10cm未満のもの（181）、10cm大のもの（182～185）、12cm以上のもの（186、187）に大きくわけることができる。183は底部と口縁部の境が鋭く明瞭である。口縁部は187が内湾気味に立ち上がり、186がやや外反する。187は器壁が厚く、内面にハケ状の工具によるナデの痕跡が残る。183は外面全体に降灰がみられる。185は焼成不良で全体が摩耗している。188は鉢Dである。口縁端部が平坦で水平。口縁部と体部の境に2条の凹線があぐる。189は壺Aである。口縁部は大きく外反し、口縁端部を肥厚させる。190は高台を付す壺の底部で、底部外面は回転ヘラ切りである。191は鉢の底部と思われる。底部は平底で外面無調整。体部外面にクタキ痕跡がある。体部外面下半はヘラケズリ。内面は回転ナデ。192は平底から短い体部が内湾気味に立ち上がり、肩部を鋭く屈曲させさらに短く内傾する口縁部をつくる土器で、壺か盤であろう。口縁端部は平坦に仕上げる。底部外面を回転ヘラケズリする他は回転ナデ。体部外面に降灰がみられる。

これらの土器類の時期は上限が定かではないが、平城宮土器VIの特徴をもった個体が目立つことから、奈良時代末期に属するものが中心であろう。

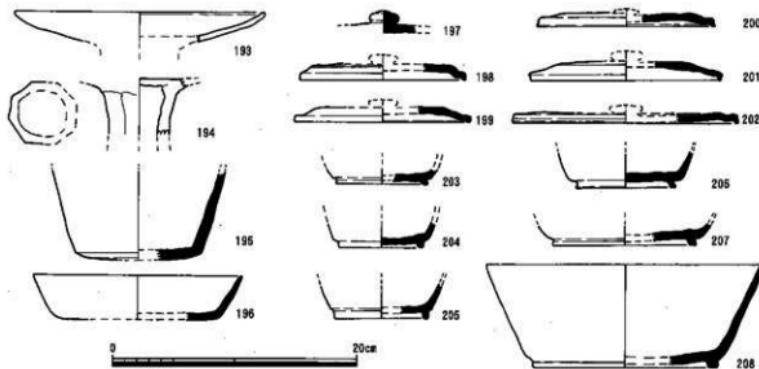


図35. 包含層出土土器① (1/4)

2006年度調査区包含層（図35）

包含層からも多数の土器が出土した。包含層の形成は中世以降だが、出土土器のほとんどが奈良時代に属するものであった。

193と194は土師器高杯Aである。193は杯部のみが残存する。摩耗によって器表面調整の観察ができない。194は脚部との接合部分。脚部外面をヘラケズリで面取りする。面取りは8面に復元できる。脚部の内面や杯部が特に摩耗している。

195～208は須恵器である。195は椀A。底部外面を丁寧に回転ヘラケズリする。口縁端部が残存していないが、本来の器高についても、残存高よりも極端に高くはならないと考えられる。196は杯Aである。底部外面は回転ヘラ切り。外面の口縁端部周辺にだけ降灰がみられる。重ね焼きの痕跡であろう。197～202は杯蓋である。197はつまみで、他は縁部の破片。197はやや厚ぼったい宝珠形のつまみである。198～202は縁部が屈曲する。200と202は器高がきわめて低い。201の頂部が丁寧な回転ヘラケズリで、他は回転ヘラ切り。199、200、201の縁端部外面には降灰がみられる。198は焼成やや不良。203～208は杯Bである。208は全形を知ることができるが、他はすべて底部の破片である。203～206は底部径が7～8cm大で小型、207は底部径12cmで中型、208は大型と大きく3群に分けることができる。小型の一群は底部と口縁部との境が明瞭である。206は色調が灰白色を呈する。底部外面は206と208が回転ヘラケズリで、他は回転ヘラ切り。205は外面全体に降灰がみられる。

出土位置は、193～195、201、203～205が十一・十四坪境周辺（2006-3地区）で、他が十一坪（2006-1・2地区）である。これらの土器は奈良時代後半が主体と考えられる。

2005年度調査区包含層（図36）

図示したものはすべて2005-1地区出土土器である。中世以降に形成された包含層であるが、残存率が高い奈良時代の土器が多い。

209～216は土師器である。209、210は杯Aである。209は口縁部が外方にまっすぐ開いて、口縁端部を内側にやや肥厚させる。210は口縁部の外方への屈曲や口縁端部の内側への巻き込みが強い。底部外面は209がナデ、210がヘラケズリ。どちらも口縁部内面に斜放射暗文を、底部内面に螺旋暗文を

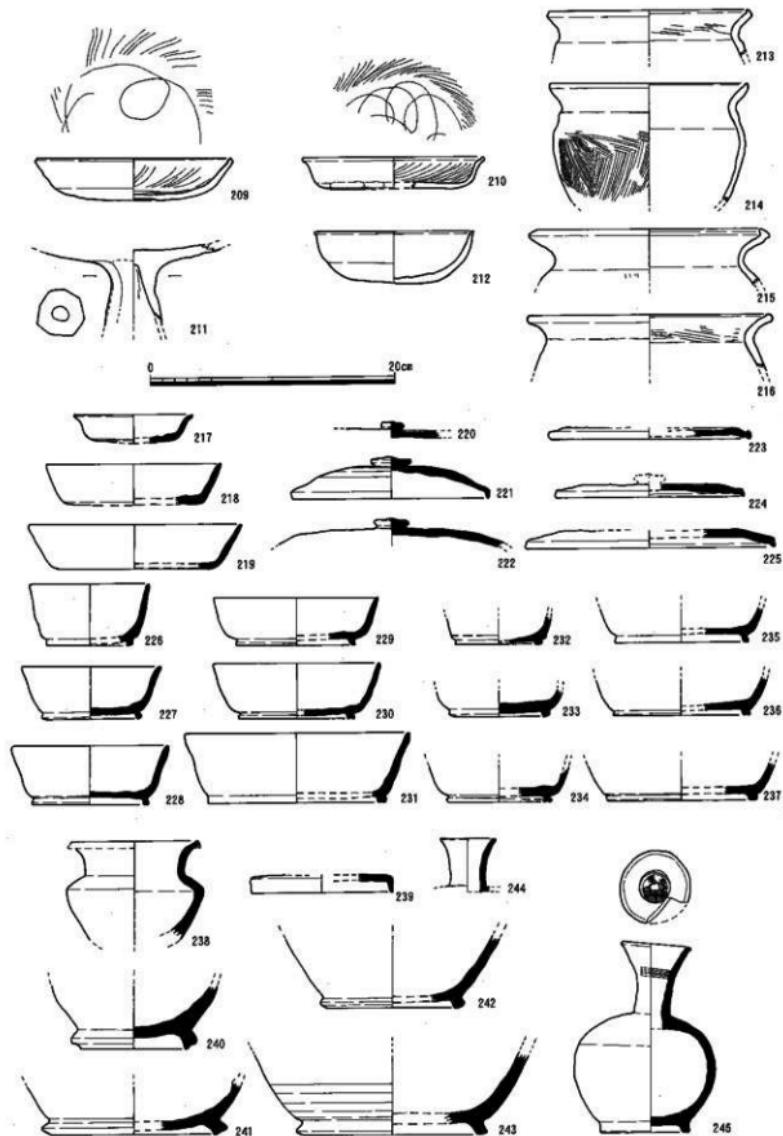


图36. 包含层出土土器② (1/4)

施す。暗文は口縁部、底部のどちらも210の方が密である。211は高杯Aで、杯部と脚部の接合部分である。杯部は摩耗のため器表面の調整が不明。脚部は外面をヘラケズりで8面に面取りして、内面はシボリ。212は碗である。口縁部は底部から内湾しながら立ち上がり、口縁端部を内傾させる。外面は、口縁部をヨコナデ、底部をナデ。焼成がやや不良で器表面は摩耗している。ほぼ完形。213～216は壺Aである。213と214は口縁部の外方への開きがやや弱く、口径が16.5cm前後。口縁部のヨコナデが強く、体部との境が明瞭である。215と216は口縁部の開きが大きく、口径20cmを越える。すべてが口縁端部を内側へ巻き込むが、214と216は巻き込みがやや弱い。体部外面はハケ、口縁部内面は213と216でハケの痕跡が残る。214は体部外面中央に黒斑がある。

217～245は須恵器である。217は皿Eである。口縁部上半が大きく外反する。底部外面は回転ヘラ切り。218、219は杯A。底部と口縁部の境が比較的明瞭である。どちらも底部外面は回転ヘラ切り。また、どちらも焼成がやや不良である。220～225は杯蓋である。220～222は頂部、223～225は縁部が残存する。全形が復元できるものは221のみである。220は中央がやや高まる厚手のつまみで、221と222は中央がやや突出する扁平なつまみである。221と222は器高が高く、他は低い。縁部はすべて屈曲するが、224と225は屈曲が弱い。225は頂部を丁寧に回転ヘラケズりする。端部は221が鋭く仕上げ、他は丸みをもつ。221と224は縁部に降灰がわずかにみられる。226～237は杯Bである。226～231は全形が復元できるが、他は底部のみである。227はほぼ完形。口径の大きさから分類しながら述べる。226は口径9.8cmで、口縁部の外方へのひろがりがほとんどなく、最も小さい。232も底径からほぼ同じ大きさになると思われる。227は口径が11.5cmで、口縁部がゆるやかに外方にひろがる小型品。233の底径が近い。228～230は口径が13～14cmの中型品で、229のみ器高が低い。231は口径18.7cmの大型品。底部のみの破片は底径でみると、235～237は底径11～12cm大、234は9cm未満のものに分類される。229、233、234が底部から口縁部の立ち上がりがゆるやかで、他は境が明瞭である。226、228、229、233は口縁部外面に降灰がみられる。底部外面はすべて回転ヘラ切り。238は壺Hで、底部と口縁端部を欠く。239は壺蓋で、頂部の外面全体に降灰がみられる。240～243は高台を付す壺の底部である。高台の端面は、240と241が凹状で外傾し、242と243が平坦で外傾する。241と243は底部と体部下半の外面を回転ヘラケズりする。240は体部外面と底部内面に緑色の自然釉が降着する。243は焼成不良で、内面が暗赤褐色の色調を呈する。244は壺の口頸部である。長く立ち上がる頸部に外反する口縁部をもつ。口縁端部は丸くおさめる。外面と口縁部内面上半に降灰がみられる。245は須恵器壺Mで完形。平底の底部に高台を付す。まっすぐに立ち上がる頸部から口縁部が外反する。口縁端部は丸くおさめる。体部から口縁部にかけての外面を回転ナデ、底部の外面を回転ヘラケズりする。頸部内に和同開珎4枚を重ねて詰め込んでいる。和同開珎は、確認できるものでは「開」の門構え上端が開く「新和同」である。銘の表裏の向きは統一されていない。当初は地鎮等の目的で埋納されていた土器である可能性がある。

これらの出土土器は杯の形状や器種組成等から平城宮土器Ⅲ～Vに属するもので、平城宮土器Ⅲが主体である。

陶硯（図37-246～251）

陶硯は6点が出土した。すべて破片で、全形がわかるものはない。また、今回の調査では転用硯と確認できる土器は出土していない。

246～250は圓足円面硯である。246は外堤と脚部を欠く。外堤下端には突帯が1条めぐる。陸部が丸く膨らみ、海部との境がない。脚部の透かし等は不明。外堤と突帯に降灰がかかる。溝0615に混入。247は外堤とその下端にある突帯が残存する。外堤はやや内湾しながら立ち上がり、端面が凹状にな

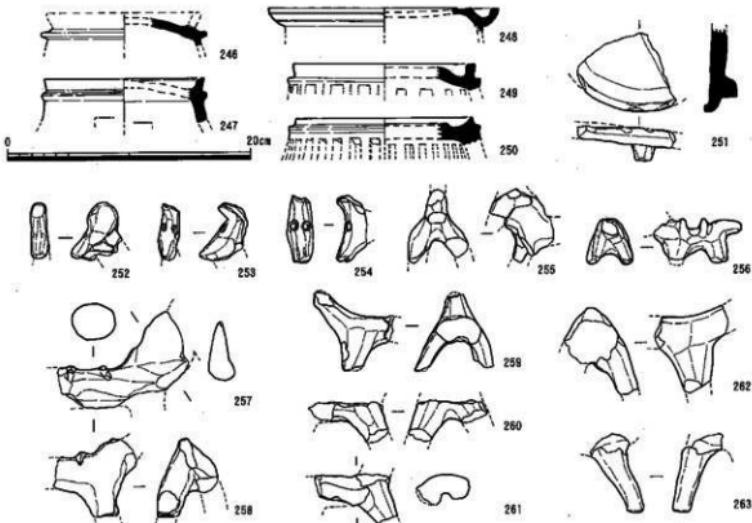


図37. 研・土馬 (1/4)

る。突帯は1条で、上部を1条の凹線がめぐる。脚部には方形の透かしの上端が残存しているが、数は不明。2005-1地区包含層出土。248は硯面の端部が残存する。内湾する外堤で、堤の端面は平坦。外堤の外面には2条の凹線がめぐる。陸部と海部は段をもって明瞭にわかれる。外堤の上端と陸部端の高さがほぼ等しい。脚部の透かし等は不明。胎土が精良で焼成も堅緻。土坑0519出土。249は硯面端部が残存。外堤は内湾気味に立ち上がり、端面が平坦である。突帯をもたない。陸部と海部はゆるやかな段で区別する。方形の透かしが20方に復元でき、透かしの間には縦方向の線刻を入れた痕跡がある。2005-1地区包含層出土。250は硯面端部の破片。外堤は短くまっすぐ上方に立ち上がり、端部を鋭く仕上げる。外堤の下端に低い突帯が1条めぐる。陸部と海部は低い内堤で区画される。脚部には方形の透かしの上端が残存し、30方に復元できる。硯面の裏に降灰がかかる。土坑0619出土。

251は低く立ち上がる縁と短い脚をもつ。風字硯か。外縁はまっすぐ上方に立ち上がり、底部との境が明瞭である。硯面は、外縁付近を除いた脚台より内側が使用によって研磨されている。脚は断面形が不整円形で、設置面が摩耗する。底面に緑色の自然釉が降着する。

土馬 (図37-252~263)

土馬は小片が調査地全域からまばらに出土していて、総数は35点である。ほとんどが包含層や後世の遺構からの出土で、2006-3地区粘土探掘坑から最も多く出土している。出土したもののはほとんどが脚部の破片であるが、ここではある程度大きさや特徴がわかる破片を図示した。

252~254は頭部である。側面からみると253と254が大きく彎曲している。252は頭部が一部残り、手綱がみられる。目は竹管で刺突し、254は籠で鼻と口を表現する。頭部はすべて板状にした粘土を頭部に折り曲げて貼り付けたものだが、後頭部からみてしっかりと貼りあわせてあるのは252のみである。252は2006-3地区粘土探掘坑、253は2006-1地区包含層、254は溝0528出土。255は頭部であ

る。手綱がみられるが、頭部は部分的にしか残存していない。粘土塊から脚部を引き伸ばして、中央で折り曲げてつくる。2005-1地区粘土探掘坑出土。256は特に小さい個体で、頭部を欠く。尾部はやや下方に向く。粘土をひねり出して鞍を表現する。2005-1地区包含層出土。257、258はやや大型品の胸部から頸部である。257は1本の粘土紐を折り曲げてつくった脚部を胸部に接合しているようで、前足が接合する部分で大きく窪み状に剥落している。胸部には小さく鞍を表現している。2005-1地区包含層出土。258は胸部にそれぞれ別につくった四肢を接合するもの。鞍の表現がみられる。2006-3地区包含層出土。259～263は胸部と脚部の接合部分である。262は大型品。259と261は脚部を引き伸ばした粘土塊を中心で折り曲げるもので、他は四肢を別につくって接合するもの。259には鞍の表現がみられる。263のみ暗褐色の色調を呈する。259と260は2005-1地区包含層出土、261は土坑0519出土、262は2005-1地区粘土探掘坑出土、263は井戸0639出土。

b. 平安時代以降の土器、土製品

平安時代以降の時期に属する土器類について述べる⁽³⁾。

包含層（図38-264・265）

2005-1地区の包含層からは平安時代の土器が出土している。264は黒色土器皿である。断面形状が逆三角形の高台をもち、口縁部が外反する。内面は密にヘラミガキして、黒色処理する。9世紀代。265は土師器杯である。大きく外反する口縁部をもつ。器壁がきわめて薄い。底部外面は無調整。10世紀代か。

土坑0519（図38-266）

266は黒色土器碗である。内外面の画面を黒色処理している。内湾気味に立ち上がる口縁部で、口縁端部に小さな段を設ける。底部には、やや高く外方に張る高台を付す。内外面ともに全面を密にヘラミガキする。11世紀代。

溝0528（図38-267～270）

267は土師器皿である。口縁部をヨコナデし、底部外面は無調整。口縁端部は退化した「て」字状を呈する。268～270は瓦器碗である。いずれも大和型で、内湾する体部にやや外反する口縁部をもつ。口縁端部は270が明瞭な段を設ける。外方に張る、高い高台を付す。内面は圓線ヘラミガキ、外面は全面をヘラミガキする。底部内面の暗文は268が連続輪状文で、他は平行線文。269の外面は、体部と口縁部との境に粘土紐痕跡が残る。

これらの土器は11世紀末に属すると判断する。

土坑0607（図38-271）

271は瓦質土器羽鉢である。体部はやや内湾気味で、平坦な口縁端部をもつ。平面形は小片であるため断定はできないが、ゆるやかではあるが弧を描いていることから円形と考えられる。焼成不良で、摩耗のため内外面の調整は不明。口縁部に菊花文のスタンプを押印する。14世紀前半か。

溝0614（図38-272～274）

272と273は土師器羽釜で大和型。口縁部は内側に屈曲させ、口縁端部は丸くおさめる。272は鰐を一部つぶしている。273は鰐の一部と口縁部に布目の痕跡が残る。ナデ調整に布を用いたのか。ほぼ完形。274は瓦質土器羽鉢である。ほぼ直線的に立ち上がる口縁部で、外面に菊花文のスタンプを押印する。平面形がやや鋭利な屈曲をもつ破片である。焼成不良で、摩耗により内外面の調整不明。

図示した土器はすべて上層からの出土である。下層からは12世紀代初鉄の宋銭が一括出土しており、この溝の埋没開始時期の一端を知ることができる。溝が完全に埋没するのはこれらの土器類から14世

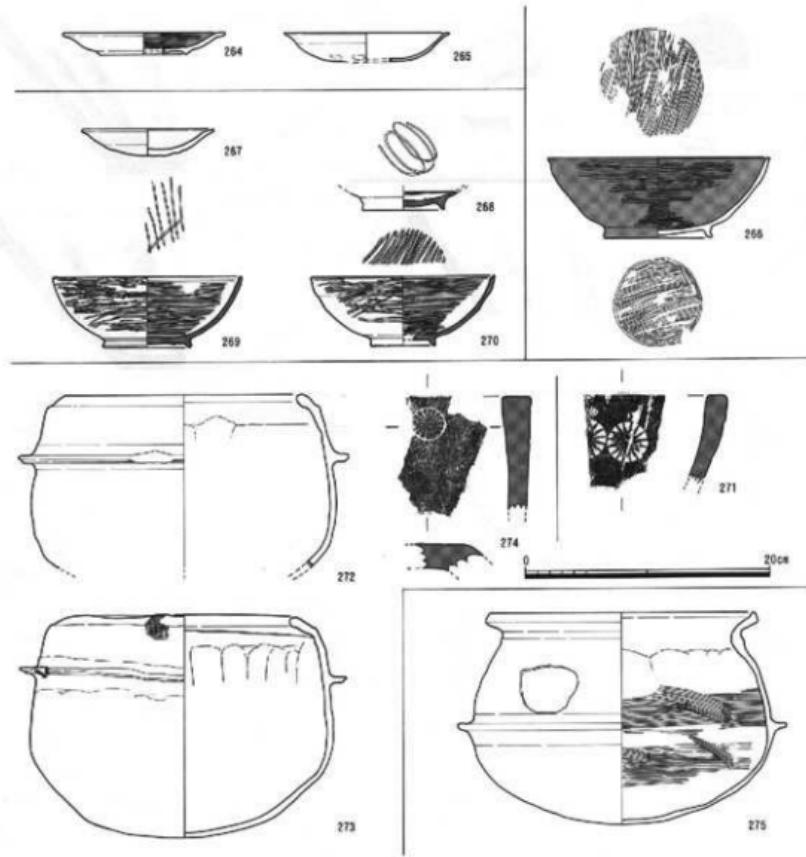


図38. 遺構出土土器（平安時代以降）（1/4）

（264・265：包含層、266：土枕0519、267～270：溝0528、271：土枕0607、272～274：溝0614、275：溝0615）

紀代以降であろう。

溝0615（図38-275）

275は大和I型の土師器羽釜である。ほぼ完形。口縁端部を上方に屈曲させる。体部中央よりやや下に低い跨がめぐる。体部内面にはハケが残る。跨より上の体部中央に円形の焼成後穿孔がみられる。この他の出土遺物が漆器椀（図41-8）のみで時期の判断は難しいが、17世紀代か。

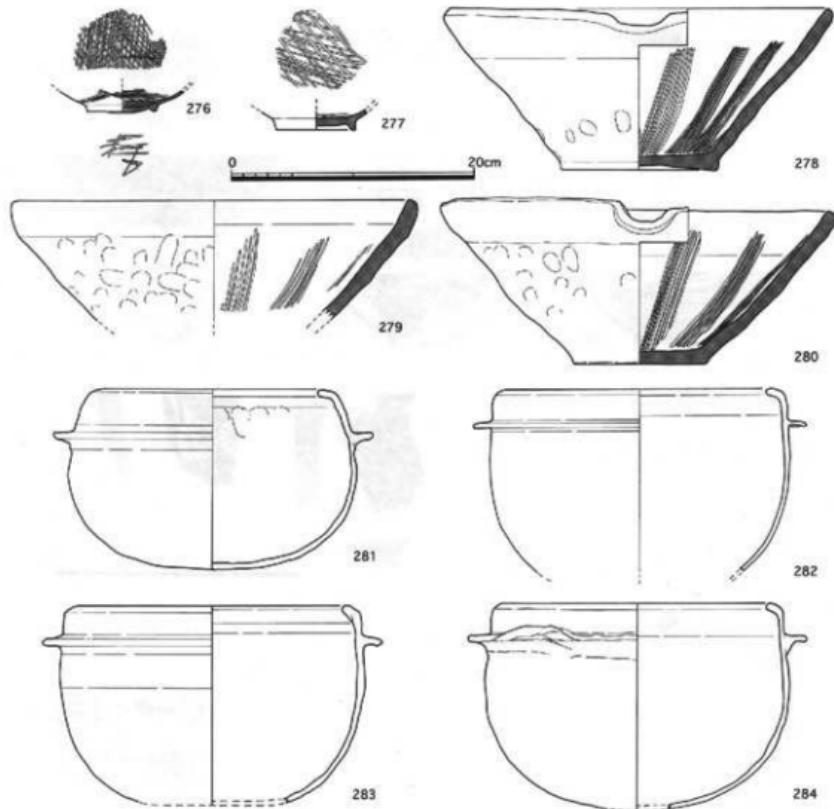


図39. 粘土探掘坑出土土器（平安時代以降）(1/4)

粘土探掘坑（図39）

粘土探掘坑からも平安時代以降の土器が出土している。特に擂鉢や羽釜は残存率が高い。これまでの周辺の調査でも同様の出土状況がみられることから、注意しておきたい。276と277が2005-1地区出土で、他は全て2006-3地区出土である。

276、277は瓦器碗である。どちらも底部片で、外方に強く張る高台を付す。276は外面全体にヘラミガキを施す。底部内面の暗文はどちらも斜格子文で、276は特に密に施している。また、276は底部外面の高台の内側にも粗いヘラミガキを施す。どちらも11世紀後半か。278~280は瓦質土器擂鉢である。278、280はほぼ完形。まっすぐに外方にひろがる体部と口縁部をもち、口縁端部は丸くおさめる。口縁部を広くヨコナデし、体部外面は粗いナデで指頭痕跡が明瞭である。280が焼成やや不良で、他は焼成良好。いずれも使用による摩耗がみられない。擂目は7~9条。14世紀末~15世紀初頭か。281~284は大和日型の土器羽釜である。281がやつぶれた球形の体部には直角に屈曲した口縁端部

をもち、他はやや胴長な球形の体部にやや上方に屈曲した口縁端部をもつ。低い鈴が口縁部の直下をめぐる。すべて胎土が精良で焼成良好。284は鈴の一部がめぐれ上がり、体部外面に黒斑をもつ。281は鈴の下半と体部外面に煤が付着する。いずれも約1/2が残存するが、完形はない。14~15世紀代か。



10cm

図40. 古墳時代の土器 (1/4)

c. 古墳時代の土器

1点ではあるが、古墳時代の土器が出土している(図40)。

285は須恵器杯である。奈良時代の土器0509に混入。外面は底部から体部中ほどまでを回転ヘラケズリする。口縁部の立ち上がりはやや短く、口縁端部に小さな平坦面をもつ。TK23型式の特徴をもつ⁽⁴⁾。

註

(1) 奈良時代の土器については下記を参考にした。

土器等、須恵器の器種分類…『平城宮発掘調査報告XVI—兵部省地区の調査一』奈文研学報第70冊 奈文研2005
土器の時期…西弘海「平城宮の土器」「土器様式の成立とその背景」真陽社1986(初出は『平城宮発掘調査報告V』奈文研学報第26冊 奈文研1976)
玉田芳英「第V章 考察 3 土器 A 平城宮土器編年の細分」「平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告—長屋王邸・藤原麻呂邸の調査一」奈文研学報第54冊 奈文研1995
前掲『平城宮報告 XVI』

『古代の土器 I 都城の土器集成』古代の土器研究会1992

各時期の土器の略年代は平城宮土器I: ~715、平城宮土器II: 716~734、平城宮土器III: 730~750、平城宮土器IV: 753~767、平城宮土器V: 762~784、平城宮土器VI: 長岡京期、平城宮土器VII: 平安時代初期、とされている。

平城宮土器IIIは、更に細分することが可能とされる。今回の報告では、後述するように造構からの出土土器の多くのことが時期に属している。しかし、点数が少なく、破片資料が多いことや摩耗により外表面の調整の観察が困難な個体が多いことから、今回は平城宮土器IIIとして捉えることができても、それ以上の細分は妥当ではないと考える。

(2) 『平城京右京八条一坊十一坪発掘調査報告』大和郡山市1984

(3) 平安時代以降の土器については下記を参考にした。

川越俊一「大和地方出土の瓦器をめぐる二、三の問題」「文化財論叢」同朋舎出版1983

菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」「文化財論叢」同朋舎出版1983

森下恵介・立石堅志「大和北部における中近世土器の様相—奈良市内出土資料を中心として—」「奈良市埋蔵文化財調査センター紀要1986」奈良市教委1987

中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社1995

三好美穂「南都における平安時代前半期の土器様相—土瓶器の供應形態を中心とした編年試案一」「奈良市埋蔵文化財調査センター紀要1995」奈良市教委1996

佐藤亞聖「大和における瓦質土器の展開と周期」「中近世土器の基礎研究」 XI 日本中世土器研究会1996

(4) 田辯昭三「須恵器大成」角川書店1981

第3節 木製品、漆器

有機遺物がある程度まとめて出土した遺構は井戸0639と溝0615で、他の遺構からはほとんど出土していない。溝0615の埋土には有機物を大量に含む層があったが、残存状況が悪く取り上げができなかつた。また、掘立柱建物の柱根が一部残存していたが、これらも残存状況が悪い。本節ではある程度形を判別することができる井戸0639出土の木製品及び漆器と、溝0615出土の漆器について報告する(図41)。

1～7は井戸0639出土である。5と6が底直上の出土で、他は井戸枠抜き取り後の埋土からの出土である。

1はもえしである。薄い棒状に粗く加工したもので、先端が焼け焦げている。先端から10.2cmが残存する。同様の遺物は他に無く、この1点のみである。

2と3は板状の木製品である。2は厚さ4mmで幅2.3cm以上、長さ7.2cm以上。直線的に加工された一辺のみが当初の形状を残す。この辺に対して直行方向に5～10mm間隔で浅い直線の切り込みを入れ、斜方向にも1.5～2cm間隔で同様の切り込みを入れる。両端はこの斜方向の切り込みに沿って折損している。切り込みは片面のみに入る。同様の破片は他に無いが、曲物の側板片か。3は厚さ1cmとやや厚手で、端部を斜方向に切り込んで仕上げる。長辺の一辺と斜方向になる端部の一部のみが残存する。幅3cm以上、長さ11.5cm以上。全体の形状が判明せず用途不明である。板状木製品の残片は他にも多数出土している。それらは木簡や斎串の一部と考えられるが、端部が残存するものはほとんどない。

4は棒状の木製品で、両端部を欠失している。ほぼ未加工の枝状の材で、樹皮がほぼそのまま残っている。全長は21.2cm以上。中央に長さ約10cmの刺りこみを設ける。刺りこみは深さ5mm程度で、断面形状がゆるやかな逆台形を呈する。刺りこみの底は特に平滑に仕上げている。何らかの部材の一部と考えられる。

5、6は蓋板である。どちらも円形で、直径約21cm、厚さ約1cm。約1/3が欠失する。6は中央に1箇所の小円孔を穿つ。どちらも井戸0639の底直上から出土している。同じ場所で出土した他の土器が完形であったのに対して、この2点だけが完形でない。

7は漆器皿である。小片のため口径が復元できないが、器壁の厚さが5mm、器高が1.7cmである。底部からゆるやかに内湾する口縁部をもち、口縁端部は丸くおさめる。軸轆調整の痕跡が明瞭に残る。内外面両面で黒漆を木地に直接かける。縦木取り。

8は江戸時代の遺構である溝0615から出土した漆器椀である。完形。体部から口縁部は内湾しながら立ち上がり、口縁端部をやや平坦に仕上げる。高さ約3cmの輪高台をもち、底部の器壁が1.5cmと厚い。横木取りで心材を用いる。内外面両面で黒漆を木地に直接かける。体部外面と底部内面に朱漆でひょうたんを描く。17世紀代か。

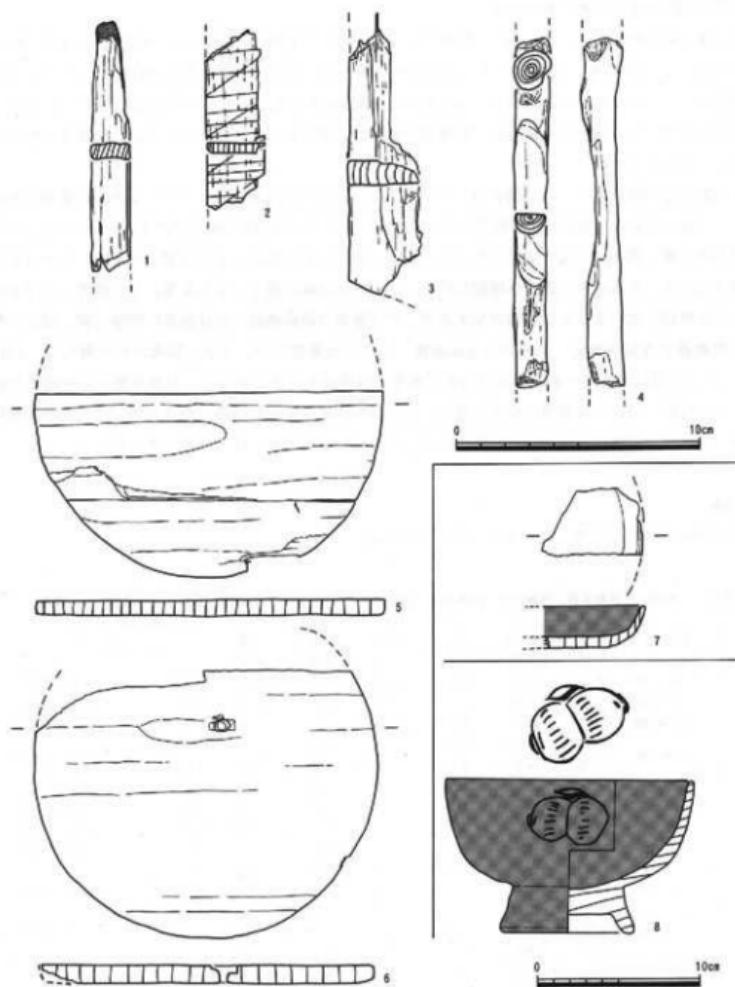


図41. 木器・漆器 (1~4・7:1/2, 5・6・8:1/3)

1~7:井戸0639 8:溝0615

第4節 錢貨

錢貨は23点出土した(図42)。皇朝錢が3点、中国錢が20点である。包含層出土須恵器(図36-245)にも和同開珎が4点納められている。

1~3は和同開珎。すべて「開」の門構えの上端が開く「新和同」である。(須恵器245埋納の和同開珎も同じく「新和同」である。) 1は平安時代の溝0528への混入。鑄上がりは良好。2と3は土坑0501出土。2点それぞれの字面が表になるように、裏面同士が接して重なった状況で納められていた。残存状況が悪いが、鑄上がりは良好。織維質の痕跡が一部付着していることから、2枚を重ねあわせて布でくるんだのか。

4~23は中国錢である。全て溝0614からの出土で、一括して投棄してあった。全体的に裏面が摩耗している傾向がある。各錢の初鑄時期は表4に示した。ここでは各錢の特徴的な部分のみを記述する。4は周通元寶。裏面に月文や星文があるものが多く知られているが、本点は裏面が摩耗しているものの無文である。5は咸平元寶で外縁幅が広い。7、8は景祐元寶で、7が篆書、8が真書。8は字面がかなり摩耗している。9は篆書の聖宋通寶。10は篆書の嘉祐通寶。11は真書の熙寧元寶。12は行書の元豐通寶で背面が無文。13~15は元祐通寶。13と14は篆書だが、文字の特徴がやや異なる。13は「元」の上に湯口の痕跡がある。15は行書で裏面の内外縁が大きくずれる。16は篆書の元符通寶で鑄上がりが良好。17、18は篆書の聖宋元寶で、字体がやや異なる。18は鑄上がりが悪い。19~23は政和通寶。19~21は篆書。21は「和」の部分が鋤つぶれる。22と23は字体の特徴がやや異なる。

参考文献

永井久美男編『日本出土錢総覧 1996年版』兵庫埋蔵錢調査会1996

番号	錢種	外縁外径	外縁内径	内郭外径	内郭内径	外縁厚	文字面厚	重量	出土遺構	備考
1		24.45	20.55	7.70	6.75	1.08	0.90	1.75	溝0528	
2	和同開珎	(24.90)	(21.00)	7.55	6.70	(1.40)	(0.98)	—		
3		(24.70)	(21.10)	7.80	6.45	(1.20)	(0.80)	—	土坑0501	
4	周通元寶	25.40	19.15	7.20	6.25	1.15	0.80	3.90		後周, 955年
5	咸平元寶	25.05	18.85	7.25	5.90	1.23	0.88	4.01		北宋, 996年
6	祥符元寶	25.80	18.55	6.80	5.85	1.15	0.83	3.86		北宋, 1009年
7	景祐元寶	25.60	21.00	8.75	6.95	1.25	0.90	4.16		北宋, 1034年
8		25.50	19.25	8.10	6.55	1.03	0.68	3.16		北宋, 1038年
9	聖宋通寶	24.65	20.55	8.55	7.60	1.20	0.98	3.45		北宋, 1063年
10	嘉祐通寶	24.75	20.10	8.35	7.95	1.20	0.83	3.56		北宋, 1066年
11	熙寧元寶	23.85	19.25	7.65	6.06	1.33	0.98	3.77		北宋, 1068年
12	元豐通寶	24.60	19.95	8.60	7.05	1.15	0.70	3.21		北宋, 1078年
13		25.05	18.95	8.35	6.60	1.13	0.63	3.60	溝0614	
14	元祐通寶	23.50	18.00	7.10	5.95	1.25	0.83	3.31		北宋, 1086年
15		24.75	20.65	8.50	7.00	1.20	0.88	3.33		
16	元符通寶	24.40	19.75	7.75	6.75	1.28	0.80	3.47		北宋, 1098年
17	聖宋元寶	24.55	19.15	6.90	5.85	1.23	0.98	3.72		北宋, 1101年
18		23.60	19.95	8.10	6.75	1.25	1.00	3.61		
19		24.65	21.65	8.20	6.35	1.35	1.05	3.86		
20		24.40	20.70	7.30	5.75	1.43	0.95	3.33		
21	政和通寶	24.65	21.60	7.95	6.35	1.30	0.93	3.80		
22		24.00	20.85	7.85	6.10	1.28	0.93	3.29		
23		24.75	21.70	7.90	6.15	1.33	0.93	3.80		北宋, 1111年

表4. 錢貨計測表

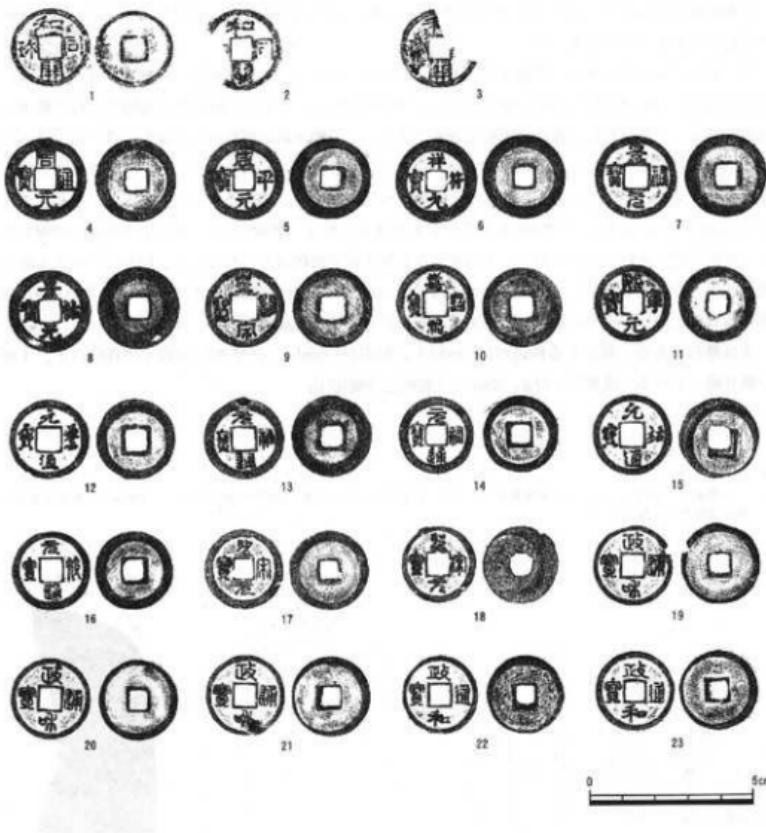
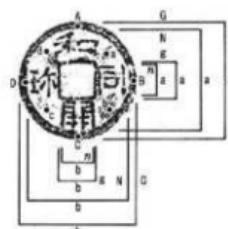


図42. 錢貨 (2/3)

$$\text{外縁外径} = \frac{Ga + Gb}{2}, \quad \text{外縁内径} = \frac{Na + Nb}{2}$$

$$\text{内郭外径} = \frac{ga + gb}{2}, \quad \text{内郭内径} = \frac{na + nb}{2}$$

$$\text{外縁厚} = \frac{A + B + C + D}{4}, \quad \text{文字面厚} = \frac{a + b + c + d}{4}$$



錢貨の計測位置

第5節 石器・石製品

石製遺物は図示した3点のみである(図43)。これらはすべて遺構からの出土ではないため、厳密な時期を判断することが難しい。

1、2は石製鉄具の製作に関連すると考えられる破片である。1は淡緑色の片岩製。板状で、残存する長辺は4.6cm、短辺は3.3cm、厚さは1.4cm。重量15.24g。1面に2mm程度の間隔で平行な筋状の痕跡が残っており、石挽き鋸の使用痕と判断できる⁽¹⁾。石挽き鋸の痕跡がある面から深さ3~7mmの直線の切り込みを入れて、折り取っている。切り込みが2辺だけであることから、分割作業で生じた端材と考えられる。溝0614出土。2は1と同様に板状の被片で、濃緑色の片岩製である。残存する長辺が3.7cm、短辺が1.8cm、厚さが0.6cmで、1より薄手である。重量8.10g。深さ2~3mmの直線の切り込みを2辺に入れて、折り取る。1のような石挽き鋸の痕跡はみられないが、切り込みが入る面が裏側と比べるとやや滑らかである。これも端材か。2005-1地区包含層出土。どちらも切り込みが直線であることから、巡方の製作に関連するものである可能性が高い。

3は磨石である。残存する長辺が13.5cm以上、短辺が7.6cm以上、厚さ5.1cm以上の花崗岩で、1面が磨り減っている。重量703.30g。2005-1地区包含層出土。

註

(1) 石製鉄具の製作については、平尾政幸「平安京の石製鉄具とその生産」『研究紀要』第7号 財團法人京都市埋蔵文化財研究所2001を参考にした。

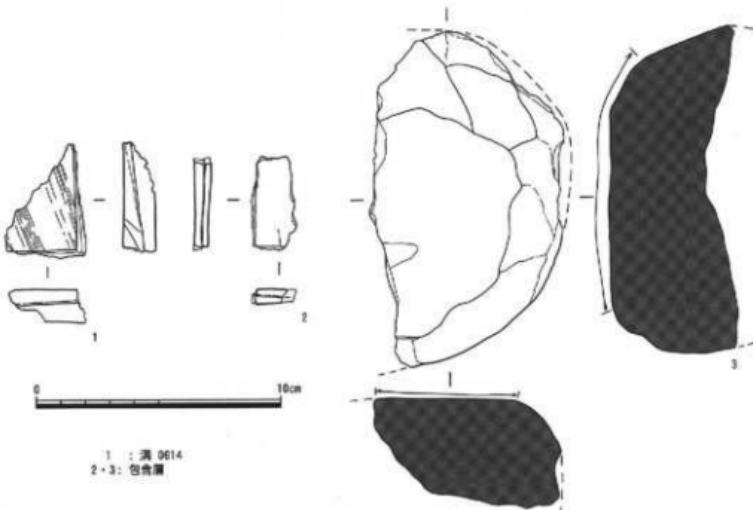


図43. 石器・石製品 (1/2)

第VI章 まとめ

調査地では近世以降の粘土採掘によってそれ以前の時期に属する遺構の大部分が破壊されていたが、奈良時代を盛期として近世以前の各時期にわたる遺構・遺物を確認した。本章では、奈良時代以前、奈良時代、それ以降の時代とで節を設けて事実関係を整理して課題を抽出することでまとめとしたい。奈良時代については調査成果が多岐にわたるため、小節を設けて記述する。

第1節 奈良時代以前

遺構は検出してないが、古墳時代の須恵器が1点出土した。土器は奈良時代の土坑0509からの出土で、2次的に移動したものである。しかし、過去の周辺の調査でも当該時期に属する遺構や遺物の報告事例はない。調査地一帯の奈良時代以前の土地利用状況については、発掘調査では自然流路が検出されるばかりで、遺物もほとんど出土せず不明な部分が多い。出土した須恵器は、調査地一帯でこれまで確認された人間活動の痕跡の中でも最も遡ることができる事例と位置付けることができる。

第2節 奈良時代

出土遺物の大半が奈良時代に属する。残存する遺構面がわずかだったことから、決して十分な調査成果が得られたとは言えないものの、検出した遺構や出土遺物の評価をしたい。

平城京における調査地の位置

調査地は平城京右京八条二坊五・六・十一・十四坪に該当する。ただし、五・六・十一坪に設定した調査区では奈良時代の遺構が検出されなかった。十一坪と十四坪にかかる位置に設定した調査区（2006-3地区）でも十一坪側は粘土採掘によって遺構面が徹底的に破壊されていた。つまり、奈良時代の遺構が検出できたのは十四坪のみとなる。十四坪内でも、実際に調査した範囲は、坪のほぼ中央と南東隅のみであり、坪全体の3.5%程度である。しかも、調査区内でも粘土採掘による遺構破壊が広範囲に及んでいたため、実際に調査ができる面積はさらに限定される。このような条件下ではあるが、検出した遺構の配置等を考察するために、四周の条坊の復元を試みて⁽¹⁾、平城京内における調査地の位置を明確にしたい。ここでは十一・十四坪を取り上げる⁽²⁾。

十一・十四坪周辺の条坊は、八条条間路、八条条間南小路、西二坊坊間路、西二坊坊間西小路、西二坊大路である。まずは周辺でのこれらの条坊道路の位置を復元したい。復元には発掘調査で検出された各道路の道路心座標を用いることとする⁽³⁾（図44、表5）。尺度は、平城京での既往の調査成果より使用されていたとされる1大尺=0.355m、1小尺=0.296mを用いることとする⁽⁴⁾。

八条条間路は、地点1～3の3地点で道路心が検出されている。3点の座標値から単回帰分析で求めた回帰式が式1である。回帰式の予測値と実測値との残差は-21～25cm。道路側溝の心心間距離は、朱雀大路を挟んで東西に位置する地点1と3が9～9.38mで、25大尺（8.88m、=30小尺）に復元できる。地点2は東市の北を限る東西道で、4.4～4.8m（15小尺）と地点1・3と比べ極端に幅員が狭い。ここでは上記の3地点のうち、調査地に近い地点1・2の幅員25大尺を復元に用いる。八条条間南小路は地点4～6の3箇所で道路心が検出されている。各地点で道路の拡幅が確認されている。地点4は側溝心心間距離を3.5mから6.8mに拡幅しているが、当初の道路中軸をそのまま踏襲して側溝

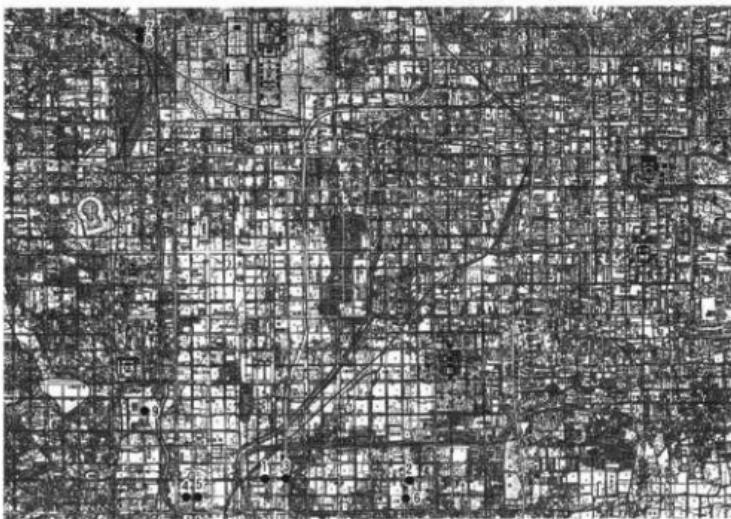


図44. 関係条坊検出位置図

番号	条坊	種別	X座標	Y座標	調査機関・次数	造構名	文献
1	八条条間路	道路心	-148946.123	-18380.000	奈文研160次	SF796	1
2	八条条間路	道路心	-148941.410	-17187.000	奈良市東市4次	SF015	2
3	八条条間路	道路心	-148945.000	-18207.000	奈文研1972年		1
4	八条条間南小路	道路心	-149082.617	-19012.000	奈文研168次	SF2000(新)	3
5	八条条間南小路	道路心	-149081.780	-18960.000	大和郡山市1988年	SF01(新)	4
6	八条条間南小路	道路心	-149072.045	-17220.000	奈良市東市6次	SF022(抜幅前)	5
7	西二坊間路	道路心	-145287.000	-19389.135	奈文研142次	SF813	6
8	西二坊間路	道路心	-145338.000	-19389.125	奈文研183-14次	SF813	7
9	西二坊間路	道路心	-148412.000	-19375.500	奈文研124次	SF04	8

表5. 関係条坊一覧 (座標値は日本測地系による)

表5 文献

- 『平城京左京八条一坊三・六坪発掘調査報告書』 奈文研1985
- 『平城京東市跡推定地の調査II 第4次発掘調査概報』 奈良市教委1984
- 『平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告』 奈文研学報46冊 奈文研1989
- 『平城京右京八条一坊十一・十二坪発掘調査概要報告書』 郡山市概要13 大和郡山市教委1989
- 『平城京東市跡推定地の調査IV 第5次発掘調査概報』 奈良市教委1986
- 『右京一条二坊六・十一坪の調査 第142次』『昭和57年度平城宮概報』 奈文研1983 (数値は文献3から)
- 『右京一・二坊六坪の調査 (第183-14次)』『昭和56年度平城宮概報』 奈文研1988 (数値は文献3から)
- 『右京七条二坊の調査 (第124次)』『昭和56年度平城宮概報』 奈文研1981

を等しい距離だけ中軸から離して掘削することで道路幅を拡幅している。地点5は側溝の波瀬を同じ場所で繰り返していて、最終的な側溝心間距離は5.2m。地点6は南側溝のみを南方に新たに掘削することで道路幅を拡幅していて、当初の道路中心計画線を踏襲していない。側溝心間距離は5.3mから6.8mに拡幅している。復元には、地点4・5は道路中心計画線が変わっていないことから拡幅後の数値を用い、地点6は本来の道路計画中心線と考えられる拡幅前の数値を用いる。この3点の座標値から単回帰分析で求めた回帰式は式2である。予測値と実測値との残差は-26~27cm。道路幅

式1	八条条間路道路心回帰式	X=tan ^{0°} 13' 04" Y-148876.042
式2	八条条間南小路道路心回帰式	X=tan ^{0°} 19' 47" Y-148972.916
式3	西二坊坊間路道路心回帰式	Y=tan ^{0°} 15' 05" X-20027.008

表6. 関係条坊の推定式（表5の数値より）



図45. 周辺の条坊復元（案）

は、2つの地点で拡幅後の数値が6.8mと一致していることから、今回は仮に20大尺(7.100m)と復元する。西二坊坊間路では地点7～9の3地点で道路心の座標値がある。単回帰分析による回帰式は式3のとおりで、予測値と実測値との残差は-8～8cmである。道路の側溝心心間距離は、京北部の地点7と8で8.5～8.625m、調査地に近い地点9で5.7mと大きく異なる。京の北部については25大尺の設計寸法を読み取れるが、京の南部については様相が異なるようだ。復元には調査地に近い地点9から20小尺(5.92m)を用いる。西二坊大路は三条以北で、西二坊坊間西小路は二条以北での検出事例が多い。この二つの道路に関しては、西隆寺境内での検出事例から、右京二条以北について朱雀大路から導かれる計画線よりも西にずれていることが指摘されている⁽¹⁾。また、右京六条周辺では薬師寺周辺の調査等から、西二坊大路の側溝は京内の北部と南部で東西にずれがあることが指摘されている⁽²⁾。よって、調査地周辺での成果がほとんどない現状では、これら京北部の成果をそのまま復元に用いることは妥当でないと考える。そこで、今回はまず式1～3より、八条条間路、八条条間南小路、西二坊坊間路の3本の道路中心線の交点座標を求める。西二坊大路と西二坊坊間西小路は、復元した西二坊坊間路より平城京の1坪の計画寸法である133.125m西の平行線を求めて各交点の座標を求める。道路の幅員は、北部の事例をそのまま準用することには課題を残すものの西二坊大路が45大尺(15.975m)⁽³⁾、西二坊坊間西小路が20小尺⁽⁴⁾を用いる。

これらの計算から求めた各道路中心線の交点座標を世界測地系に変換したものを表7に、条坊復元図を図45に示した⁽⁵⁾。復元条坊に今回の調査区と既往の調査区を配置したものが図46である。

遺構の変遷と配置

今回の調査で検出した奈良時代の主な遺構には、掘立柱建物2棟、井戸1基、土器埋納坑1基と多数の土坑がある。他にも単独で検出されたため建物や廻に復元できない柱穴がいくつかある。これらの遺構は先述のとおり、すべて十四坪内に位置する。

各遺構の時期は、遺構から出土する土器が平城宮土器Ⅲを主体とすることから、奈良時代の中頃でも前半よりに属するものが多いと考えられる。包含層出土土器には奈良時代後半あるいは末期までのものがあるが、明確に遺構から出土したものは少ない。しかも、各遺構の重複関係が少ないので、遺構の変遷を復元することは困難である。わずかな面積での情報ではあるが、十四坪は平城宮土器Ⅲの段階で坪内の土地利用が活発になったと評価できよう。出土土器からは、土地利用の活性化は遅らせ

点	X座標	Y座標
A	-148603.132	-19634.732
B	-148737.945	-19634.142
C	-148603.637	-19767.857
D	-148738.710	-19767.266
E	-148604.143	-19900.982
F	-148739.475	-19900.990

表7. 復元交点の座標
(世界測地系に変換した数値)

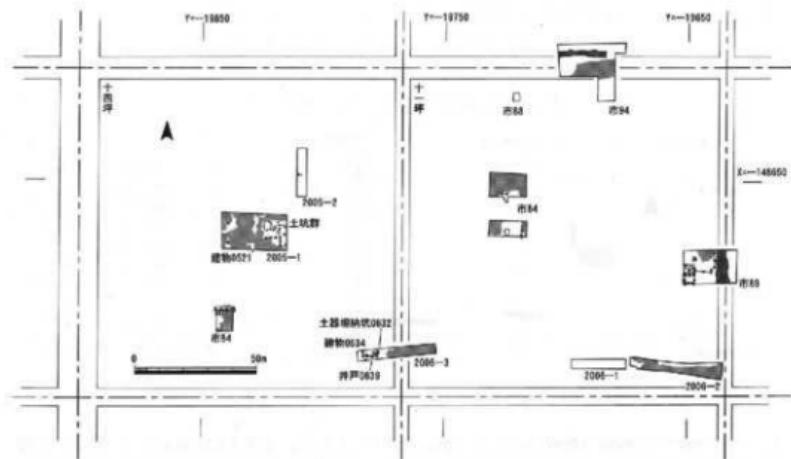


図46. 右京八条二坊十一・十四坪の主な遺構（奈良時代）(1/2000)

■は溝や粘土探査による後世の広範開破壊部分

ても平城宮土器Ⅱまでの時期となろう。確実に奈良時代後半に属すると判断できる遺構は、平城宮瓦編年第Ⅲ期³⁰⁾に属する軒丸瓦6282G型式が出土した柱穴0522のみである。建物が繰り返し建て替えられた痕跡もみられない。後半以降における坪内の土地利用状況は不明であるが、少なくとも今回の調査区内では活発な利用状況を認めることができない。

遺構の配置をみると、遺構が最も多く検出されたのは坪の中央よりやや東側の一帯である。ここには炭化物を含む土坑や底面が硬く焼けしまった土坑（以下、これらを「炭化物土坑」と呼称する。）がまとまっている。炭化物土坑群の南には建物0521が1棟位置する。この土坑群は出土土器からほぼ同時期に一連のものとしてつくられたと推定することができる。坪を南北に2分割するラインが炭化物土坑群の中を通ることから、ここでは明確な土地の分割がなかったと考える。土坑0537は土坑群から離れて単独で位置しているが、形状や内容からも一連の遺構と考えられる。土坑群の性格について後述するが、坪の中央から北東にかけて同様の遺構が散在していた状況も推定できる。

土坑0537が検出された2005-2地区は、遺構の検出状況や土層の堆積状況から、あまり大きな削平を受けていない可能性が高い。そうであるならば、この地区一帯は当初から遺構が閑散とした状況であったと判断できる。地区内の遺物の総出土量が特に少ないと裏付けられる。地下掘削を伴わない土地利用があったのか、この坪の性格とともに今後の課題となる。坪の南東隅には井戸や建物に近接して土器埋納坑がある。出土遺物から、坪中央の土坑群とほぼ同時期に存在していた遺構群と判断できるが、両遺構群の関係までは言及することができない。

十一坪では今回の調査で顕著な遺構を確認することができなかったが、後世の遺構や包含層から大量の奈良時代の土器が出土している。北方で市が1989年におこなった調査では、密に遺構が検出されている。建物も複数棟が重複して検出されていることから、複数の時期にわたる土地利用があったことがわかる。今回の調査区内でも本来は活発な土地利用があったものの、後世の土地開発によってその痕跡が失われてしまったようだ。

過去の調査で検出した遺構をあわせてみても、両坪の土地割りの状況は不明と言わざるを得ない。

最大の要因は粘土採掘等による面的な破壊であることは図46をみると一目瞭然で、検出した柱穴には建物か礫かの辨別ができないものが多い。十四坪南西での市1984年調査区での柱列が東西方向の帯であるならば、この東西ラインは坪内の8分割線に近いと見ることもできる。しかし、部分的な成果であるため、現時点では土地利用状況の復元は困難である。

炭化物土坑群

十四坪の中央では炭化物土坑がまとめて検出された。出土遺物から、これらの土坑はほぼ同時期に掘削されたものと考えられ、重複もない。一部の土坑は底面が硬く焼けしまって赤変しており、この一帯で火を用いる何らかの作業がおこなわれていたことは間違いない。これらの土坑は、埋土に含まれる炭化物の粗密と、底面被熱の有無とで大きく3種に分類することができる。それらは火を用いる一連の作業に由来し、有機的に関連するものと思われる（図47）。しかし、これら3種の土坑は、特に規則的な配置をとることがなく各種の土坑が散在している状況である。また、各土坑の規模や形状と埋土の種別との間には、特に関連性を見出すことができない（表8）。出土遺物は土器器や須恵器といった土器類のみで、生産に関連する遺物のような特徴的なものがない。遺物量は土坑0502や土坑0507が他に比べてやや多いものの、全体的には少ない傾向にある。土坑群には、覆屋となる柱穴が伴っていないことから、作業は露天あるいは深い地下掘削を伴わない簡素な覆屋の下でおこなわれたと考えられる。南隣接する建物0521は土坑群と同時期のものか判断が難しいが、想像をたくましくすれば一連の作業に関連する建物とすることもできよう。土坑群の分布密度は決して高くはなく、特に北東に位置する土坑0537の周辺には全く同種の土坑が存在しない。作業にあたっての空閑地と評価することができるのだろうか。それとも広場のようなスペースなのであるか。

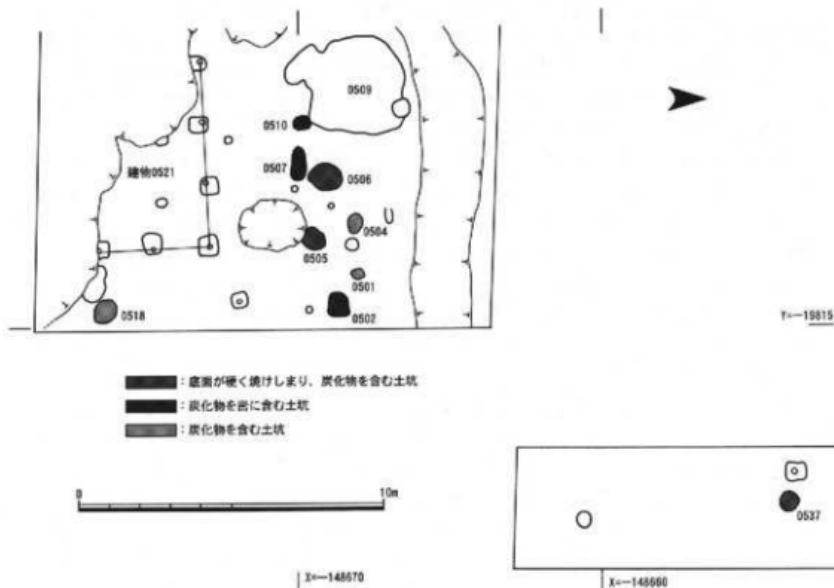


図47. 十四坪の炭化物土坑群 (1/160)

遺構名	平面形	平面規模 (m)	深さ (m)	火熱による 硬化・変色	炭化物	遺物量	備考
土坑0501	隅丸方形	一辺約0.35	0.16		少量	微量	和同開跡出土
土坑0502	隅丸長方形	0.78×0.62	0.33		多量	多量	
土坑0504	椿円形	長0.62, 短0.45	0.35		少量	少量	
土坑0505	円形	径0.7	0.17	○	少量	少量	
土坑0506	椿円形	長1.06, 短0.84	0.25	○	多量	少量	底に石
土坑0507	椿円形	長1.05, 短0.45	0.28		多量	多量	
土坑0510	隅丸長方形	0.52×0.46	0.14		多量	少量	
土坑0518	円形	径0.7~0.8	0.25		少量	少量	
土坑0537	円形	径0.6	0.25	○	多量	少量	

表8. 炭化物土坑一覧

この場所でおこなわれた作業の内容については、出土遺物からは判断することができない。調査地から西市を挟んで反対側に位置する右京八条一坊十三坪では、同様に炭化物を含んで底面や側面が焼けしまった土坑が多く検出されている¹¹⁾。井戸を中心とした遺構の配置や、多量に出土した鋳造関連遺物から、鋳造・漆工の工房と想定され、近接する西市との深い関連が考えられている。十四坪の炭化物土坑群にも、西市との関連が想定できよう。平城京内で同様に炭化物や焼土を混入する土坑が複数まとまって検出されている事例には、塵芥処理の土坑を除くと、鋳造や鍛冶に関連する遺物が出土する例が多いようだ¹²⁾。

以上の状況から、今回の調査成果のみでは、十四坪内の炭化物土坑群の性格を判断することができない。市に隣接した坪の中央での何らかの作業場の痕跡という評価にとどめておきたい。

土器埋納坑

土器埋納坑0632は直徑約35cmの小穴に土師器皿Cを10枚埋納したものである。皿全体の上面を覆うように薄く堆積していた炭化物を含む黒色土は、有機質のもので皿を覆った痕跡かもしれない。土器の他には内容物が確認されなかったが、有機物と一緒に埋納していた可能性もある。皿の向きや配置に特に規則性はないものの、10枚はすべてが一括で埋納されている。時期は奈良時代前半と考えられ、坪内で検出した他の遺構ともあまり大きな時期差がない。この小穴は掘立柱建物0634のすぐ東隣に位置し、坪全体でみた場合では南東隅に位置している。

複数枚の土師器皿を埋納する土坑には、同時に出土した内容物の検討等から地鎮めの遺構と考えられている事例があり¹³⁾、特に内容物が伴っていないものでも同様の性格が想定されている。平城京内で同じように土師器皿を埋納した事例は表9のとおりである。土師器皿のみを埋納するものと土師器甕に土師器皿を埋納するものの2通りに大別でき、後者には正位置に据えた甕内に皿を納めるものと、複数枚の皿に倒立させた甕を覆い被せるものがある。また、少數だが須恵器壺や土師器甕のように異なる器種と一緒に埋納するものもある。和同開跡等の銅鏡複数枚や金箔、ガラス小玉が内容物として確認されるものがいくつかあるが、何も内容物が確認されない例の方が多い¹⁴⁾。建物との位置関係から地鎮めの対象を絞りこめる場合もあるが、坪全体が祭祀の対象と考えられる単独での配置例もある。建物の柱穴に埋納するものには建築時と解体時とのそれぞれがあるが、どちらにしても祭祀の対象はその建物に限定できる。このように埋納土器の構成や、内容物、埋納方法は実に多様である。土器埋納坑0632に特に類似するのは、右京八条一坊十三・十四坪のSX1401やSX1572、SX1589である。中でもSX1572とSX1589は、それぞれが単独で位置していることも共通する。この両坪では、他の坪と比べても、土師器皿埋納遺構の検出数がかなり多いという特徴がある。先述の炭化物土坑群からも、西市を挟んだ東西の土地の利用状況の共通性を指摘したが、この種の遺構でも同様の傾向が指摘できよう。また、京外にも奈良時代の土師器皿を埋納する遺構がある。大柳生ヒロタ遺跡¹⁵⁾のSX44は、土師器皿5枚と和同開跡、鉄滓、木炭が出土した土器埋納坑である。遺跡からは掘立柱建物群が

条坊位置	調査次数	遺構名	容器	内容物	備考	文献	
平城宮東院	奈文研421次	SC19050	土師器皿 A7, 土師器皿 C7		回廊解体時の埋納。 柱穴内。奈良末。	1	
	奈文研423次	SK19121	土師器皿 D2	銅鏡119(和同開跡含む)	奈良末。		
西隆寺	奈文研212次	SK449	土師器皿 C, 土師器皿 (正立)	銅鏡 5 (和同開跡, 萬年通寶、神功開寶)	回廊建立時の埋納。 銅鏡は布で包む。	2	
左京二条六坊十二坪	奈良女子大学 1984年	SK3150	土師器皿 A34, 須恵器壺 L・杯 A・ 甕 B、製塙土器	金箔、 銅鏡以上(萬年通寶、 神功開寶)	銅鏡は布で包む。 奈良末。	3	
	奈良市200次	SB139	土師器皿 I・杯・ 椀計16		南西隅柱穴。建築時。 9世紀初頭。	4, 5	
右京三条二坊十五坪		SX151	土師器皿 C6以上、 土師器皿 (正立)		3基は近接する。 9世紀初頭。	5	
	奈良市443-7次	SX152	土師器皿 C12, 土師器皿 (倒立)				
		SX153	土師器皿 C28以上、 土師器皿 (正立)				
左京四条三坊六坪	権考研1994年	SX15	土師器皿、 土師器皿 (正立)		土坑内に栗石309個。 9世紀。	6	
左京四条三坊十五坪	奈良市522次	SX70	土師器皿 I3		9世紀。	7	
左京四条六坊十坪	奈良市493次	SK93	土師器皿 10		焼成が須直質。	8	
左京六条二坊十四坪	権考研1987年	SX02	土師器皿 8, 土師器皿 2	銅鏡12	銅鏡→壹→皿→錢→皿 →壹の順で掘れる。		
右京八条一坊十三坪	奈文研168次	SX97	土師器皿 I4, 土師器皿、 三彩小壺蓋2	ガラス玉、金箔	土師器皿 2枚の中に 三彩小壺をおさめる。 内容物は小壺の中。	9	
右京八条一坊十四坪		SX1310	土師器皿 C, 土師器皿 (倒立)		近接して土師器皿 (金 箱含む) の埋納坑あり。	10	
		SX1400	土師器皿 C4	和同開跡32以上、 ガラス小玉12、金箔、鉄片	2基が近接する。		
		SX1401	土師器皿 C5以上				
右京八条一坊十四坪		SX1572	土師器皿 C6以上				
		SX1579	土師器皿 C8, 土師器皿 (倒立)				
		SX1589	土師器皿 C5				
		SX1592	土師器皿 C8, 土師器皿 (倒立)				
		SX1593	土師器皿 C21		2基が近接する。		
右京八条二坊十四坪	郡山市2006年	SK0632	土師器皿 C10			本書	

表9. 平城京内の土師器皿埋納土坑

表9文献

- 「東院地区的調査—第421・423次」『奈文研紀要2008』奈文研2008
- 奈文研編『平城東発掘調査報告書』奈良市1993
- 奈良女子大学埋蔵文化財発掘調査会編『奈良女子大学構内遺跡発掘調査概報III』奈良女子大学1986
- 「平城京右京三条二坊十五坪の調査 第200・213-1・2・3次」『奈良市概報平成2年度』奈良市教委1991
- 「菅原東遺跡・平城京東(平城京三条二坊十五坪)の調査 第443-7次」『奈良市概報平成12年度』奈良市教委2002
- 「平城京内の発掘調査報告—1994(平成6)年度」『奈良報1994年度(第一分冊)』権考研1995
- 「平城京東(左京四条三坊七坪)の調査 第522次」『奈良市概報平成16年度』奈良市教委2007
- 「平城京東(左京四条六坊十坪)の調査 第493次」『奈良市概報平成15年度』奈良市教委2006
- 「平城京左京六条二坊十三・十四坪発掘調査概報」『奈良報1991年度(第一分冊)』権考研1992
- 「平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告書」奈文研学報第46冊 奈文研1989

検出され、鉄滓や製塙土器といった生産に関連する遺物が出土している。何らかの作業場と土師器皿埋納という点で、今回の調査地と共通する部分があり注目される。

ところで、遺構からの出土ではないが、本来は土器埋納坑に納められていたのではないかと考えられる遺物に、和同開跡で口を塞いだ須恵器壺(245)がある。同様に口縁部を銅鏡で塞いだものには、藤原宮大極殿院南門に取り付く回廊の下で検出された地鎮遺構 SX10713がある¹⁰。中に水晶を入れて富本銭で口を塞いだ須恵器平瓶を埋納した遺構である。文献にみられる地鎮供養記事とも年代的に近接するという。今回出土した須恵器は口頸部と体部が既に分離していたため、内容物の有無は不明であるが、本資料がSX10713出土土器と同様の性格をもつものであった可能性は高い。土師器皿埋納遺構と共に、十四坪内では多様な地鎮め供養がおこなわれていたと想定できよう。

総括

以上、奈良時代の遺構配置や変遷、特徴的な遺構について概観してみた。遺構出土遺物が平城宮土器Ⅲを主体として比較的まとまっていることから、坪内の土地利用は奈良時代の中頃にかけて非常に活発であったと推定することができる。遺構は重複が少ない上に分布密度も低く、以降に大きな土地利用の変化があった痕跡は認められない。ただし、遺構がまったく存在しない空間が存在することから、広場のような地下掘削をあまり必要としない土地利用があった可能性も考えられ、注意しておきたい。また、周辺での既往の調査成果を含めても、現在ある調査成果では十一・十四坪における土地の区割り等を復元することができず、大きな課題を残した。炭化物土坑群や、土器埋納坑には、右京八条一坊十三・十四坪との共通性を指摘することができる。

ところで、遺構からの出土ではないが、石製鉗具製作に関連すると考えられる遺物がある。出土点数が少數であること、それぞれの出土位置が離れていること、後世の遺構への混入であることから評価が難しいものの、やはり周辺に工房が存在していた可能性が考えられる。京内では西堀河である秋篠川から遠くない右京七条一坊十五坪⁽¹⁾や、東市の東堀河⁽²⁾等から同様の遺物が出土している。今回の調査地も含め、京内における物流の要衝に近い位置で出土する傾向を指摘できよう。石製鉗具の製作技法の変遷だけでなく、長岡遷都以後の平城京を考察する上でも注目すべき遺物である。

以上のように今回の調査では、市周辺の土地利用を考える上で一定の成果を得ることができたと評価できよう。また、一帯には粘土採掘による遺構の破壊が広範囲に広がっていることを改めて確認することとなった。しかし、矮小な調査面積であっても大きな成果を得ることができ、市や市周辺の状況にはまだまだ不明な部分が多いことからも、今後も粘り強い資料の蓄積が必要とされる。

註

- (1) 条坊の復元作業には単回帰分析による回帰式を用いることとする。分析にあたっては下記の文献を参考にした。
入倉徹編『奈良・平城京左京条坊について』『平城京左京四条四坊・四条五坊』櫻考研報告第101冊 櫻考研2007
- (2) 五・六坪は過去にも調査例が多く、奈良時代の遺構が全く確認されていないため、今回は検討から除外する。
- (3) 条間路や坊間路は、坪によって道路の幅員が異なる場合が知られている。よって離れた坪で検出され、かつ検出地点が少ない場合には、道路側溝をそのまま復元作業に用いることは妥当でないと考える。
復元に用いた座標はすべて日本測地系による座標値で報告されている。そこで今回の復元作業では、日本測地系の座標値を用いて調査地周辺の条坊に関する交点の座標値を求め、その数値を国土地理院配布の座標変換ソフト「TKY2JGD」を用いて世界測地系に変換した数値を用いることとする。
- (4) 井上和人「古代都城制創地再考」「古代都城制条里制の実証的研究」学生社2004（初出は『研究論集VII』奈文研学報41）1984
- (5) 『西隆寺発掘調査報告』奈文研編 西隆寺跡調査委員会1976、『西隆寺発掘調査報告書』奈文研編 奈良市1993、『西隆寺跡発掘調査報告書』奈文研編 奈良市教委2001
- (6) 『平城京右京三条三坊十五坪の調査 第200・213-1・2・3次』、『薬師寺跡境内の調査 第5次』『奈良市櫻轄平成2年度』奈良市教委1991
- (7) 西二坊大路の道路幅は、以下の調査事例から求めた。
 - ・右京三条二坊十四坪…側溝心間距離15.2m（『平城京右京三条二坊十三・十四坪・西二坊大路』『県概報2003年（第1分冊）』櫻考研2004、『国道308号線拡幅事業に伴う平城京跡発掘調査概報』『県概報2004年（第1分冊）』櫻考研2005）
 - ・右京二条三坊四坪…側溝心間距離15.6m（『平城京右京二条三坊四坪・菅原東遺跡の調査 第273-1・276次』『奈良市櫻轄平成5年度』奈良市教委1994）
- (8) 右京一条三坊一坪でも両側溝が検出されているが、西側溝の当初幅が不明であり、側溝心間距離も17.3~17.9mと他の調査事例より広いことから課題が残る。（『平城京右京北辻』鶴元興守文化財研究所2005）
- (9) 西二坊坊間西小路の道路幅は、以下の調査事例から求めた。
 - ・右京一条二坊十五坪…側溝心間距離6.8m=6m（註5文献）
 - ・右京二条二坊九・十六坪の調査でも両側溝が検出されている。側溝心間距離は上記の遺構と同程度となるが、側溝の位置や変遷などの評価についてはまだ課題が残されている。（『平城京跡（右京二条二坊九・十六坪）の調査 第503次』『奈良市櫻轄平成15年度』奈良市教委2006）
- (10) 肝心の調査地周辺での調査成果があまりないため、仮の復元案である。多くの誤差を含んでいることは承知しており、今後の調査成果の蓄積によって更に更新されるべきものと考える。
- (11) 軒丸瓦の編年観は、『平城宮発掘調査報告XIII』奈文研学報第50冊 奈文研1991に掲載。
- (12) 『平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告』奈文研学報第46冊 奈文研1989

- (12) 右京二条三坊十一坪〔平城京跡（右京二条三坊十一坪）の調査 第443-1・2・3次〕『奈良市概報平成12年度』奈良市教委2002、右京六条四坊十四坪〔平城京跡（右京六条四坊十四坪）の調査 第543次〕『奈良市年報平成17（2005）年度』奈良市教委2008、左京二条二坊十三坪〔奈文研1982『平城京左京二条二坊十三坪の発掘調査』県教委1984〕、宮式部省東官衛〔式部省・式部省東官衛の調査 第222次〕『平城宮概報1991年度』奈文研1992、『式部省東官衛の調査 第236次』『平城宮概報1992年度』奈文研1993）では炭化物を含む土坑から金属生産に関連する遺物が出土している。左京三条四坊七坪では土坑と接がつた土坑が密集して検出されたが、底面などが熱を直接受けているものはなかった。この遺構群は出土遺物から和同園跡铸造工房の関連施設と考えられている（『平城京左京三条四坊七坪発掘調査概報』奈文研1980）。
- また、宮第2次内裏北方官衛〔推定第2次内裏北方官衛地域の調査（第129次）〕『平城宮概報昭和56年度』奈文研1982や左京二条二坊五坪〔東院南方遺跡の調査 第223-9次〕『平城宮概報1991年度』奈文研1992）では、炭化物を埋土に含み底面が焼けているピットが幾つか検出されているが、今回の調査地と同様に生産関連遺物を伴わない。
- (13) 「土器埋納遺構の性格」註11文献
- (14) 内容物が確認されなかった事例の中には、有機物が内容されていて痕跡が残っていないものも含まれている可能性があり、一概に皿のみの埋納であったかは断定できない。
- (15) 「大鷦生遺跡群 第5次発掘調査概報」『県概報1997年度（第一分冊）』権研考1998
- (16) 「大鷦生遺跡群 第6次発掘調査概報」『奈文研紀要2008』奈文研2008
- (17) 「平城京右京七条一坊十五坪の調査 第349次」『奈良市概報平成8年度』奈良市教委1997
「平城京右京七条一坊十五坪の調査 第427次」『奈良市概報平成11年度』奈良市教委2001
- (18) 「平城京東市跡推定地の調査 II 第4次発掘調査概報」奈良市教委1984

第3節 平安時代以降

平安時代以降に属する遺構を時代順に概観することでまとめとしたい（図48）。

平安時代の遺構は、2005-1地区で検出した土坑0519と溝0528のみである。どちらの遺構も主体的に含まれる遺物は奈良時代のものである。土坑0519は性格が不明だが、出土した黒色土器は11世紀代に属すると考えられる。溝0528出土瓦器碗は11世紀末に該当すると考えられ、当調査区一帯では、11世紀代を通して土地利用があったことがわかる。他の調査区では当該時期の遺物がほとんど出土していないことも注目される。しかし、他に遺構がなく遺物量も多くはないことから、土地利用の実態については不明とせざるを得ない。

鎌倉・室町時代にかけての遺構は調査地全域に分布している。溝0529や溝0635は、遺物量が少なく小片ばかりであるため、厳密な時期を特定することが難しい。ただし、最も新しい様相を示す遺物が瓦器碗で、先述の溝0528出土瓦器碗よりも高台が低く、断面形状が逆三角形のものが中心であることから、古くとも鎌倉時代初頭と位置づけておきたい。どちらの溝も幅1m程度で深さも20cm程度と浅

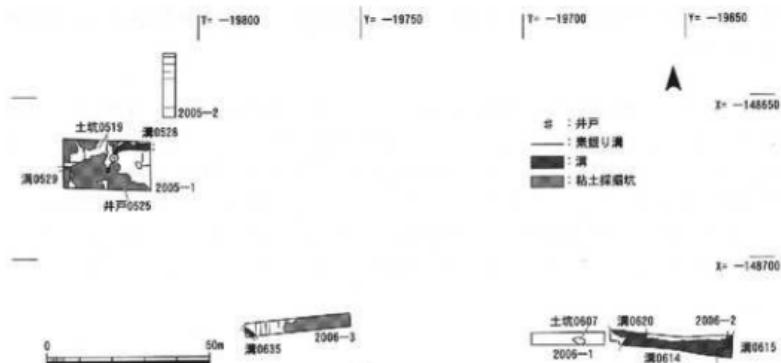


図48. 平安時代以降の遺構配置（1/1500）

い。しかも、部分的な検出であり、性格は不明である。ところで、2005-1地区では溝0528埋没後に井戸0525が掘削される。出土遺物がほとんどないため時期を判断することができないが、瓦器小片よりも新しい時期の遺物がみられないため、同じく鎌倉時代に属する遺構である可能性が高い。さらに溝0529や溝0635の周辺にのみ素掘り溝が分布している。素掘り溝からは出土遺物がほとんどないが、確実に瓦器よりも新しくなる遺物がみられない。以上の状況から、調査地の西側（2005年度調査区や2006-3地区周辺）では、鎌倉時代に農耕地として土地が利用された状況を復元することができる。ただし、秋篠川に近接する2006-4地区やその南方である2004年度調査区でも瓦器小片が少量ながら出土している。農耕地としての土地利用状況は、調査地西部だけではなく調査地全域にひろがっているのであろう。

室町時代の遺構は、溝0614、溝0620、土坑0607があり、分布は2006-1・2地区周辺に集中している。溝は調査区内での部分的な検出であったため、幅等の全容がほとんど不明である。人工的に掘削されたものかどうかも判断できないが、いくつかの地点に杭を打ち込んでいることから、何らかの管理がなされていたことは間違いない。また、溝内には宋錢が一括投棄された場所があることから、祭祀的な行為の対象にもなっていたとも考えられる。埋土の堆積状況からは一定の水流があったと考えられる。今後の調査で溝の延長部分が明らかになることが期待される。溝の埋没は14世紀代と考えられ、他の土坑も時期が大きく離れていない。粘土探査坑からは14~15世紀にかけての瓦質土器擂鉢や土師器羽釜が高い残存率で出土している。これらの遺物は、周辺の既往の調査でも同様の状況で出土しており、特に土師器羽釜は藏骨器として用いられたものと考えられている⁽¹⁾。このような解釈は、これらの土器に使用痕跡があまり認められないことや、日常的な使用には耐えられないような個体が多いためである。今回の出土遺物にも同様の傾向が認められるが、出土状況から2次的に移動したものと考えられるため、性格は不明としておきたい。いずれにせよ、14~15世紀にかけての遺構や遺物は少なく、集落のような生活拠点としての土地利用は考えにくく、当該時期についても農耕地としての土地利用が主だったのであろう。

江戸時代の遺構には溝0615がある。部分的な検出だが、深さから相当大規模な溝と思われる。埋土には大量の木屑が含まれ、中には明瞭な加工痕跡が認められるものもあり、流域での何らかの活動痕跡が確認できる。溝の埋没は17世紀代と考えられるが、南方に位置する郡山城では城主が度々交代し、城の修築や城下の整備が繰り返された時期もある。関連があるかは憶測の域を脱しないものの注意しておきたい。

以上、冗長ではあるがまとめと課題を述べた。明らかになった部分よりも今後の課題となった部分の方が圧倒的に多くなってしまった。特に肝心の西市に関する資料がほとんど得られなかつたことは残念であったが、市に隣接する坪の一端を明らかにすることができた。当地域の歴史の考察のみならず、都城の研究においても一定の成果と評価することができよう。また、今まであまり明らかでなかつた平安時代以降の土地利用状況についても資料を加えることができた。残された課題についても、今後資料を蓄積することで少しづつでも明らかにできればと思う。

註

(1) 『平城京西市跡一右京八条二坊十二坪の発掘調査』県教委1982

なお、瓦質土器擂鉢については周辺に焼成窯があり、不良品を投棄したものとの見解がある。（『平城京右京八条三坊三坪発掘調査報告』大和郡山市概要28 郡山市教委1993）

写真図版



第一工事完了後の調査地（2009年4月）

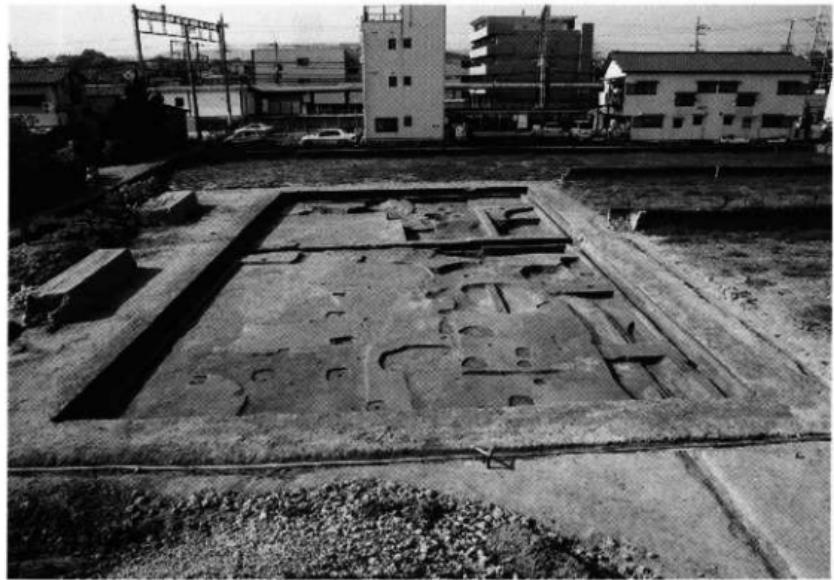


2005年度調査区全景（北西から）



2006年度調査区全景（南西から）

図版2



2005-1地区全景（東から）



2006-3地区西半全景（北西から）



2004-1 地区全景（南から）



2004-2 地区全景（南から）



2004-3 地区全景（北から）

図版4



2005-2 地区全景（北から）



2006-1 地区全景
(北東から)



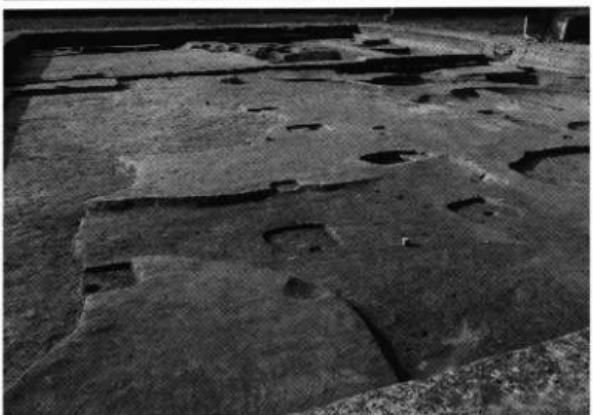
2006-2 地区全景（西から）



2006-3 地区東半全景
(北西から)



2006-4 地区全景 (南から)



建物0521 (南東から)

図版 6



建物0634（北から）



土坑0509（北から）



炭化物土坑群（北東から）



土坑0507（西から）



土坑0502（西から）



柱穴0522（南から）

図版 8



土器埋納坑0632（北から）



井戸0639（北から）



井戸0639 瓦溜まり



井戸0639底面遺物出土状況



溝0528（東から）



溝0614東半（南西から）

図版10



溝0614西半（南東から）



溝0620（北東から）

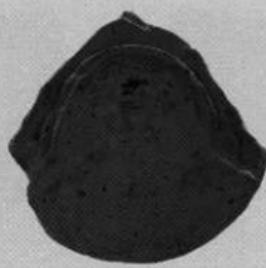


溝0615（南から）

軒丸瓦、
丸瓦



1表



1裏



3



—



4



5



—



6

平瓦①



7



8



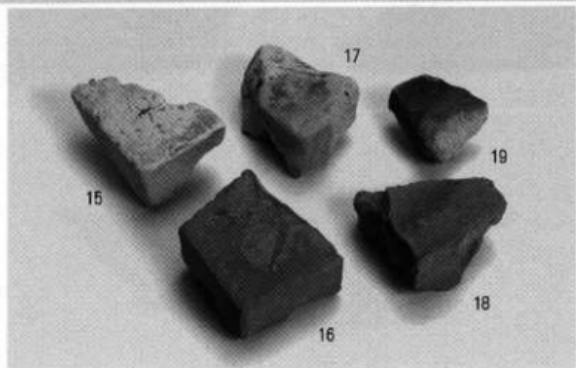
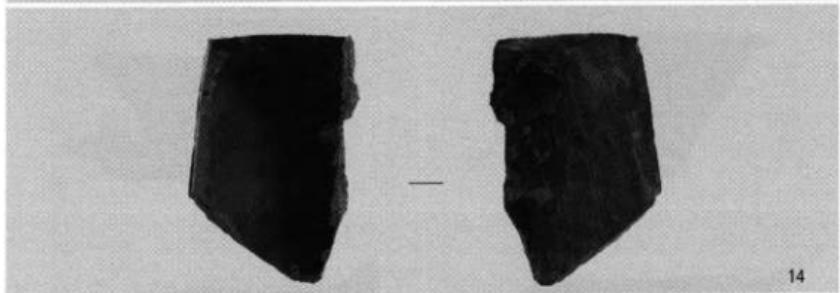
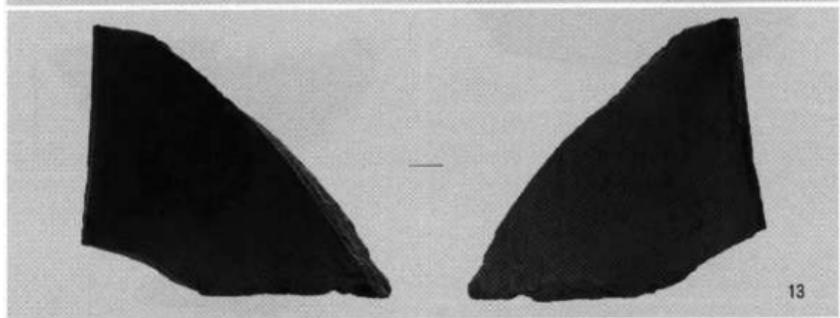
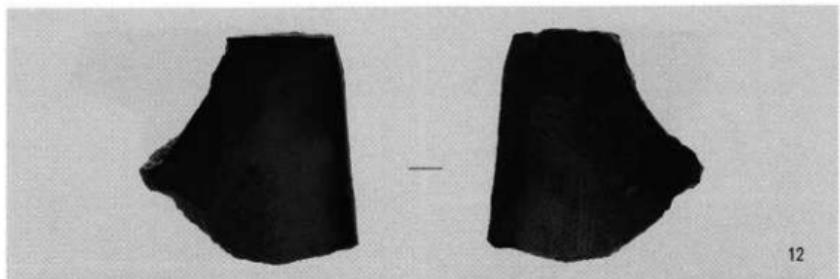
9



10



11



図版14

建物、整地土、土坑0507出土土器



1



2



5



7



6



8



35



34



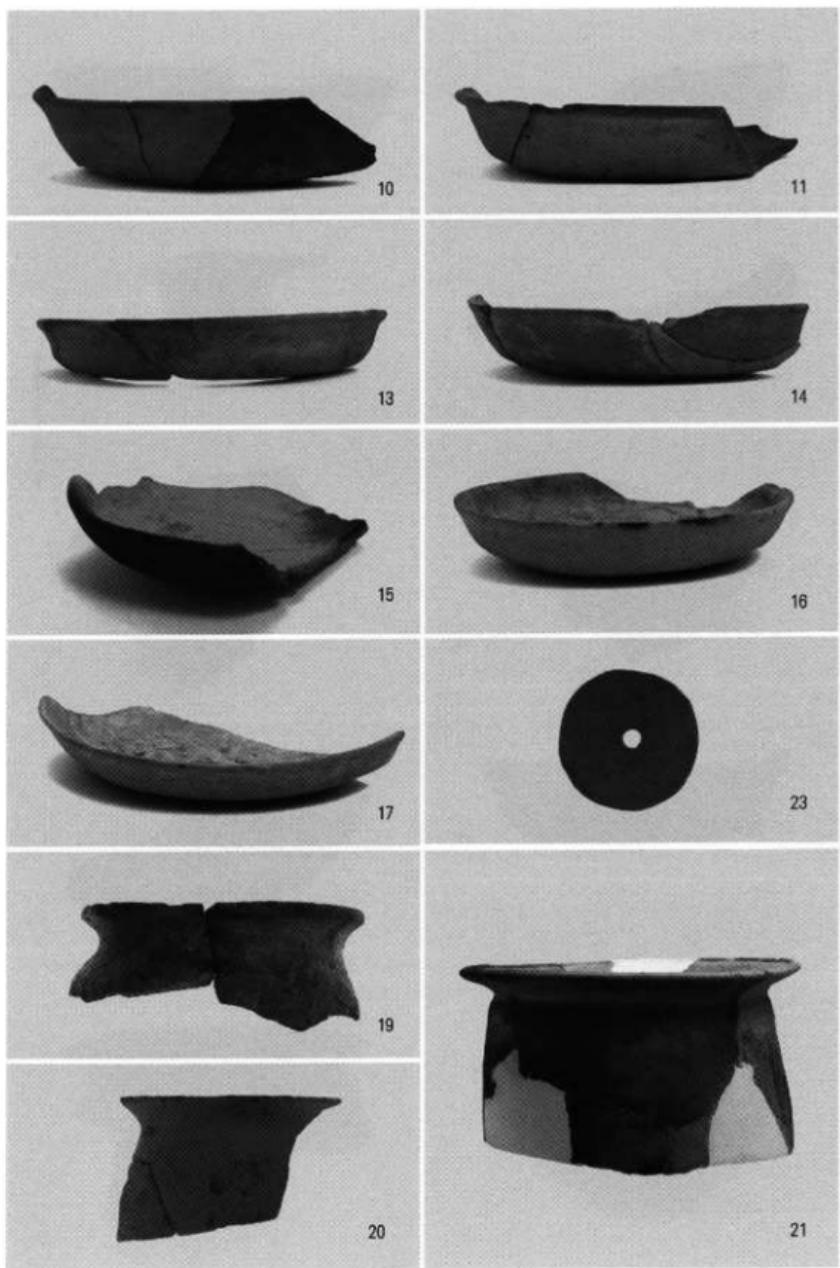
32



30



31



図版16

土坑0505・0506・0510・0537出土土器
土坑0509出土土器①



36



40



43



42



39



38



45



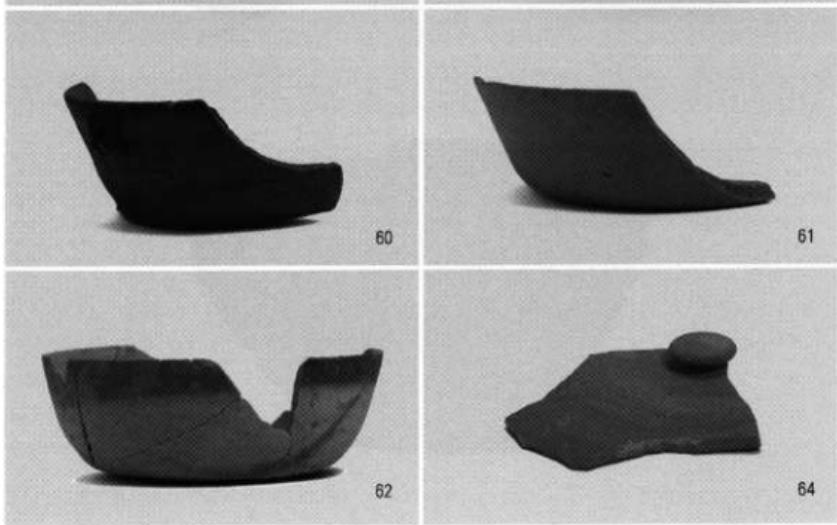
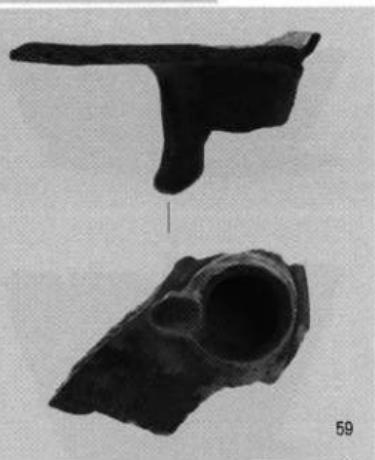
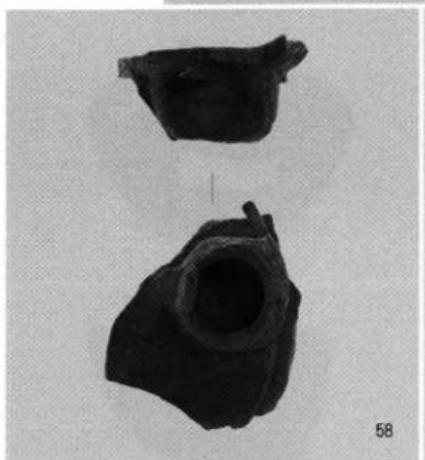
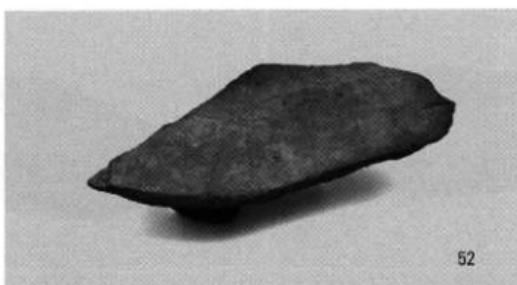
48



54



56





75



76



73



76



74

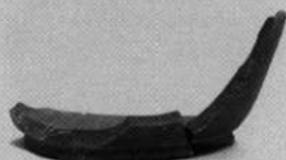
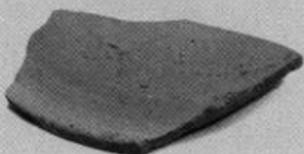
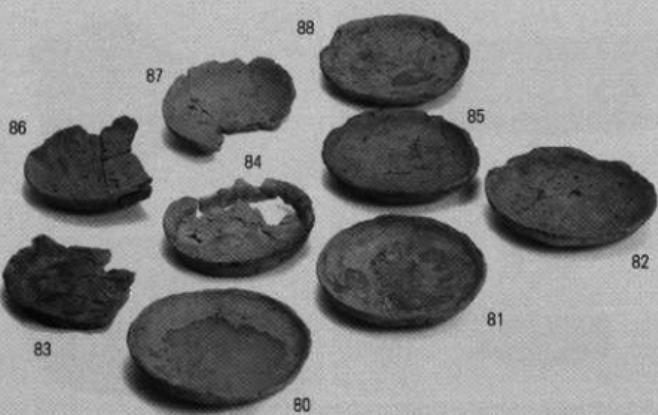


77



78

土器埋納坑 0632、土坑 0624 出土土器、井戸 0639 出土土器①

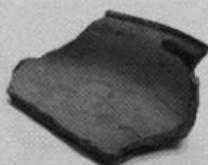


図版20

井戸0639出土土器②



109



105



114



111



114底部



112



106



113



110

粘土採掘坑、後世の遺構出土土器、包含層出土土器①



124



125



131



147



148



149



152



156



162



170

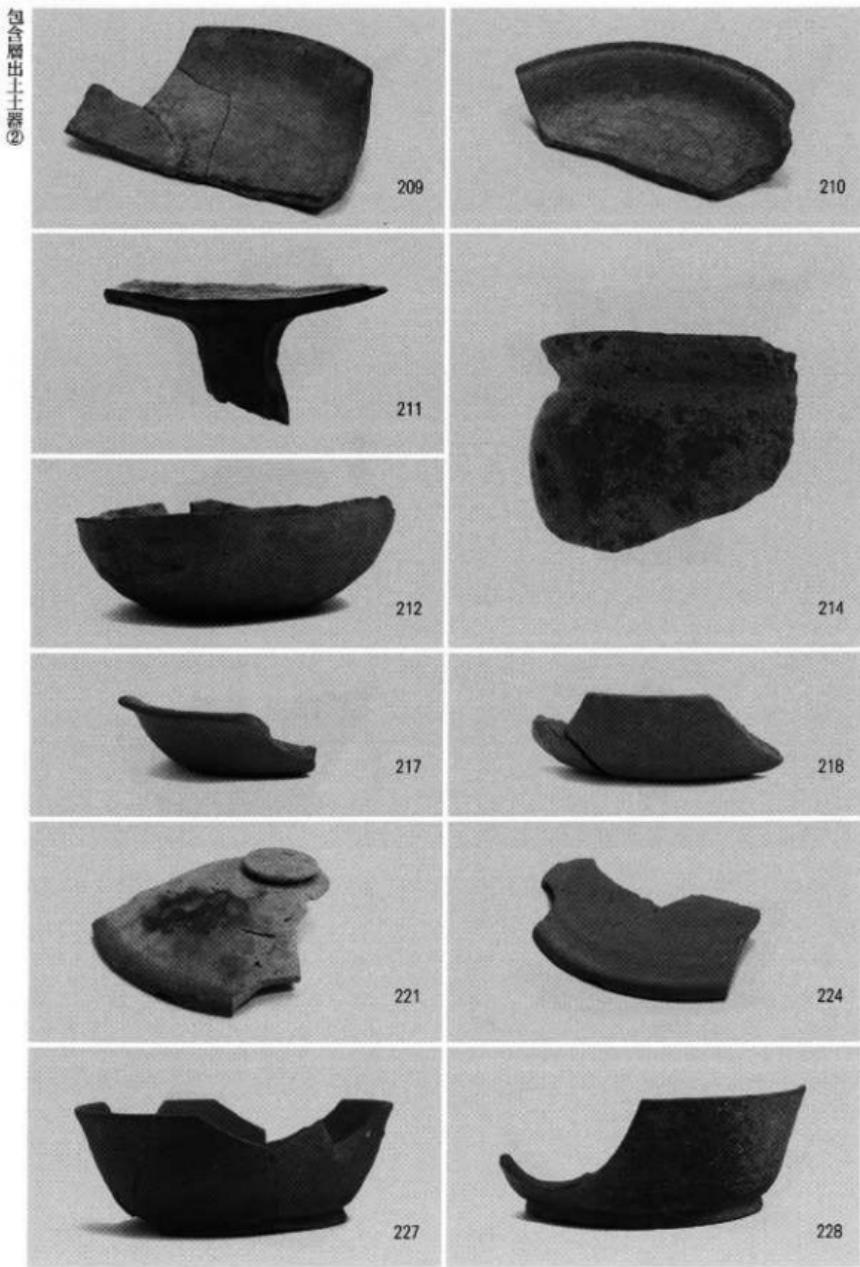


206



208

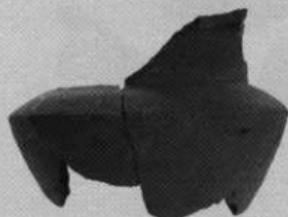
图版22



包含層出土土器③、古墳時代の土器、硯



230



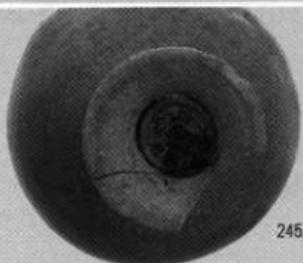
238



239



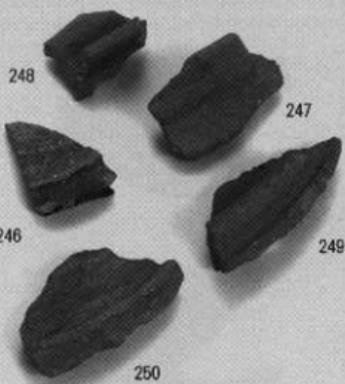
245



245上から



285



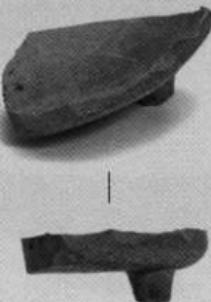
248

247

246

249

250



251



264



265



266



|



268



|



270



274



271



273



276



277



275



281



282



283



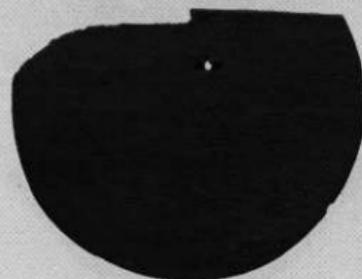
284

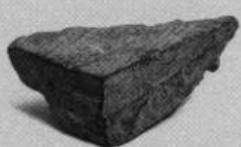


278



280





1



2



3



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12



13



14



15



16



17



18



19



20



21



22



23

報告書抄録

ふりがな	へいじょうきょう うきょう はちじょうにぼうご・ろく・じゅういち・じゅうよんつぼ
書名	平城京右京八条二坊五・六・十一・十四坪
副書名	近鉄九条駅前周辺整備事業に伴う発掘調査報告
卷次	
シリーズ名	大和郡山市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	15
編著者名	十文字健
編集機関	大和郡市教育委員会
所在地	〒639-1198 大和郡山市北郡山町248-4
発行年月日	2009年9月30日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
平城京	奈良県 大和郡山市 九条町 229-3他	29203	—	35° 48° 40°	134° 21° 15°	2004.8.31～ 9.17 2005.10.3～ 12.28 2006.8.23～ 10.16	137m ² 485m ² 561m ²	近鉄九条駅前 周辺整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平城京	都城	奈良 平安 中世 近世	櫛立柱建物、 井戸、土坑、 土器埋納坑、 溝	瓦、埴、土師器、須恵器、 黒色土器、瓦器、瓦質土器、 土馬、土製品、硯、木製品、 漆器、石製品、錢貨	西市推定地及び周辺の調査。 市周辺の坪内利用状況を確認。

**平城京右京八条二坊五・六・十一・十四坪
—近鉄九条駅前周辺整備事業に伴う発掘調査報告—
大和郡山市埋蔵文化財発掘調査報告書 第15集**

2009年9月30日 発行

著作権所有 大和郡山市北部山町248-4
発 行 者 大和郡山市教育委員会

印 刷 者 奈良市三条大路2丁目2-6
共同精版印刷株式会社